

源氏物語 夕顔の巻疏注

岩下光雄

# 源氏物語 夕顔の巻疏注

岩 下 光 雄

1

夕顔の巻は、帚木の巻雨夜の品定めの中將の体験談「常夏の女」の物語をうけて語られる。常夏、撫子の花が、どうして夕顔の花となって蘇えるのであろうか。夏の季節の花には違いないが、花のイメージは、かなり違っている。従来、こういう点については、あまり注意されてこなかった。しかし、黒須重彦氏（「班婕妤と夕顔」岩波書店「文学」57年2月号所収）が、夕顔の巻の「白き扇」を、東屋の巻で浮舟が持っていた「白き扇」と同じように、班婕妤の故事をふまえたものと解された部分に限っては、従うべき卓見だと思ふ。黒須氏も引く『文選』の「怨歌行」を、『文選（詩篇）下』（新釈漢文大系 明治書院）から引く。

新裂齊紈素

皎潔如霜雪

新に齊の紈素を裂けば、皎潔にして霜雪の如し。

裁為合欵扇

团团似明月

裁ちて合欵の扇と為せば、团团として明月に似たり。

出入君懷袖

動搖微風発

君が懷袖に出入し、動搖して微風発す。

常恐秋節至

涼風奪炎熱

常に恐る秋節の至りて、涼風炎熱を奪ひ。

弁一損篋箆中 恩情中道絶 篋箆の中に弁損せられ、恩情中道に絶えんことを。

同書の内田泉之助・綱祐次氏による「通釈」を引用する。

新しく斉国産の白絹を裂くと、それは潔白でさながら雪や霜のようだ。それをたちきって合せ貼りの円扇を作ったらまんまるで満月のようである。

この扇は君の袖や懐に出入して、動かすたびにそよ風が起る。けれど心配なのは、やがて秋の季節が訪れて、涼風が暑さを吹き去ると、同時にわが身も秋の扇として箱の中になげこまれ、君のなさけも途中で絶ちきられることです。(474頁、一部通行の漢字に改めた)

『大漢和辞典』(大修館)から必要な部分だけを引用する。

〔執扇〕白いねりぎぬで造ったうちは。

〔執扇詩〕怨歌行をいふ。班婕妤作。扇は夏を過ぎれば棄てて顧みられないのに我が身を比して自ら傷悼した歌。

出典としてあげる、江淹・雜体詩に、「執扇如团月」。張烜・婕妤怨に、「初摇明月姿」。班婕妤・怨歌行に、「円以明月」とある。白いねりぎぬで作ったうちは、丸い明月にたとえられている。

〔篋扇〕篋箆の中に棄てられた扇。転じて愛寵を失なった婦人の喩。

〔秋扇〕扇は秋涼しくなると用ひられぬことから、失寵の婦人をいふ。班婕妤の怨歌行から出た語。

班婕妤にかかわる「白き扇」は「うちわ」で「蝙蝠の扇」ではない。この物語の面白さ、作者の意図は、実はここに秘められていたのだと考える。

東屋の巻の「楚王の台の上」の注記に「班女閨中秋扇色 楚王台上夜琴声」を引くのは「源氏積」(『大成』巻

七 研究資料篇 334頁)、定家自筆本「奥入」(同 408頁)、「紫明抄」(河海抄)(角川書店「紫明抄 河海抄」167頁及び581頁)以来で、中院通勝の「岷江入楚」は、諸注集成として注目すべき古注であるが、そこには、

花 上の詞に白き扇を手まさくりにしたるよしみえたり班女が秋の扇はのちにすてられたる事を侍従かおもひよらて楚王の琴の声をのみめてたると也箋

弄 班女か故事いみ侍へき事也

秘 白き扇なとより思ひよりてうたひ給ふ也

箋 此詩の心あしきを侍従もうきふねも聞きしらぬを心をくれたるといふ也(中田武司編「岷江入楚 四」桜楓社源氏物語古注集成14 238頁)

とある。この注記は桜楓社「源氏物語古注集成」伊井春樹博士編「花鳥余情」323頁、「弄花抄」陽明文庫本の本文300頁の注記で確認できる。野村精一氏編「孟津抄」下巻238頁は、「花鳥余情」「弄花抄」の説をつなげている。伊井博士編「細流抄」には、「白扇なとより思ひよりてうたひ給也」(414頁)「薰の此句をうたひ出して後悔ある也浮舟前表さまさまあしき事あるその一也」(415頁)とある。

ところが、夕顔の巻「いつこかさして」の「岷江入楚」の注に、「三光院ノ義」として次のような注記が見える。箋聞書宇治に浮舟の君の匂宮へ心うつりたる時分かほるの(6才) おはしたれは何とやらんうちそむきたるあひしらひなりしを薰は久しく音つれぬをうらむるにやと思ひいひなくさめつつ楚王の台上の夜の琴の声といふ詩を誦せられし事あり浮舟君うせ給ひ後薰大将の不吉なる事をいひしと思ひあはせし事あり是も夕良の上の末みしかゝるへき前表にてかやうの口すさひも有し也此物語にかやうの類おほし心をつけてみるへし云々(242頁)とある。「岷江入楚」は、きわどい所に触れながらも、夕顔の巻の「白い扇」と東屋の巻の「白い扇」の類似性については

記述していないように見える。

最近の注釈書で、これらの問題に触れているのは小学館「全集」である。「白き花の」の頭注に、

白は、これ以外に、前出の白い伊予簾、後出の白い扇、女の白い衣服など、本巻の基調的色彩。清楚だが空し

くはかない印象を与える（小学館「全集」(1) 210頁）

とあり、「白き扇」の頭注には、

白は夏の扇の色。男女の間で扇を贈るのは不吉とされた（同、211頁）

とある。ところが、枕草子に、

扇の骨は、朴。色は、赤き、紫、緑。（新潮日本古典集成 第二六七段 213頁）

とある。この扇は「夏季納涼のために用いる蝙蝠の扇の骨」で、その扇の骨に張る紙の色が「赤き、紫、緑」だといっているのである。同じく枕草子の第三二段は、寛和二年六月、右大将濟時の小白河法華八講と中納言義懐の出家を回想する物語。「六月十余日にて、暑きこと世に知らぬほどなり。池の蓮を見やるのみぞ、いと涼しき心ちする」とある頃で、

朴・塗骨など、骨は変れど、ただ赤き紙を、おしなべてうちつかひ持たまへるは、瞿麦のいみじう咲きたるにぞいとよく似たる（「集成」 86頁）

とある。枕草子の記述は当時の風俗をかなり正確に伝えているが、「全集」の頭注が、「白は夏の扇の色」とするのは、何を根拠とされたものであろうか。

黒須氏は「文選」卷二七の班婕妤の作といわれる「怨歌行」をもとに「紈扇」「篋扇」「秋扇」などの語が作られ、「白き扇」が男性の女性への愛の薄れてゆくことの象徴として使われるようになったことは、当時よく知られ

たことであつた。」といわれる。「和漢朗詠集」(岩波書店「大系」) 162に、

班婕妤が团雪の扇 岸風に代へて長く忘れぬ

とあるのは、江吏部集卷上、四時部・本朝文粹卷八、詩序、時節部を出典とする。400に、

班姬扇を裁して誇尚すべし 列子車を懸けて往還せず

とあるのは、江談抄第四を出典とする。485に、

醉郷氏の国には 四時ひとり温和の天に誇る

酒泉郡の民 一頃だにもいまだ沍陰の地を知らず

とあるのは、江談抄第六、長句事を出典とするもので、「少班婕妤团雪之扇……」とあるのから続く。これらは、その流布の一端を示すものであるが、既に指摘したように、班婕妤にかかわる「白き扇」は「うちわ」であつて、それは、決して「蝙蝠の扇」ではない。この物語の面白さ、作者の意図はここに秘められていたのではないか。筆者は、黒須氏のように奇妙な想像の糸はたぐらない。「白き花ぞ、おのれひとり、ゑみの肩開けたる」「花の名は人きめて」という花の幻想には、丸い明月にたとえられた「うちわ」からの連想が働いていたのであり、蝙蝠の扇への幻想ではない。拙い宿世を持ちながら、笑みの眉を開けている。それは、丸い明月の幻想なのであつた。さる高貴な男の寵愛を失つて、京の場末に身をひいて籠っている可愛い女性を、班婕妤の物語に重ね合わせて読んでいけばよい。夏の蝙蝠の扇が、白いねりぎぬで造られるのが、普通であつたのでもない。「赤き、紫、緑」の色ではられていたのである。それを「白き扇の」と、班婕妤の故事をふまえて物語を読んでいくべきことを読者に示す。誤解をおそれて書き添えておく。夕顔の宿の扇が、白い「うちわ」であつたというのではない。故事をふまえた作者の意図が、それとなくおかれたこの語の中に、謎のように隠されていたのである。夕顔から浮舟への造型を

通して、東屋の巻でその対偶的表現の意味と謎を、はっきりと解きあかして見せたのである。帚木の巻で、

山がつの垣ほ荒るともをりをりにあはれはけよ撫子の露

うちはらふ袖も露けきとこなつにあらし吹きそふ秋も来にけり

と詠んだ撫子の女が夕顔である。枕草子三二段に、赤い紙をはった扇を見渡す限りお使いになっているのは、撫子が、可憐に美しく咲いているのによく似ている、とあるのを読んでいくと、撫子から扇へという連想をふまえながら、それを見事に裏返し、ずらせて見せた、物語作者のしたたかな発想、筆づかいに驚く。それは、もはや並並の知識を背骨にしたものではない。高い物語的世界の達成を意味している。

## 2

ありつる扇御覧ずれば、もて馴らしたる移り香、いとしみ深うなつかしくて、をかしうすさみ書きたり。

心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花

この歌は従来、

当て推量にそのお方——源氏の君かとお見受けします。白露が光を添えている夕顔の花——夕影の中の美し

い顔を（小学館 完訳日本の古典『源氏物語』一）

のように、「夕顔の花」を源氏によそえて解するのが定説であった。だが、贈答歌としての機能を考えると、「夕顔の花」に対する詠嘆ではなく、「夕顔の花に光彩を添え美しくさせた、その光に対する詠嘆的な表現」と見るべきで、夕顔は、「家の花」として、女主人を形象するものだと考えなければならぬ。切り懸めた板扉に這いかか

り、軒のつまにまつわり咲いている一房の夕顔の花を、源氏は所望する。家の花が、口惜しい運命を背負い、風情なさを「わび」、「白き扇のいたうこがしたる」に置いて源氏にさしあげる。源氏から所望され、花を折ってさしあげたことは、面立たしいことで、光栄に感じられた。夕顔の花の美しさはその光にあやかっていた。源氏を夕顔の花にたとえたのではなかった。この旧稿の骨子は、昭和三十年に提出した五百余枚に及ぶ卒業論文の一部を成すもので、折口学の発想を挺子にした得意な発掘の一つであった。筆者の論は、孤立無援の場で、おのれ独り笑みの眉を開いていたことになるが、昭和四十年代の後半には、歌の解釈をめぐって、ある意味では一つの論争がなされていた。それらの過程は、犬養廉氏の「夕顔とその出会い」（『講座 源氏物語の世界』 有斐閣 第一巻）にまとめられ、一つの展望が加えられている。

確かに源氏物語は、どこにつなげて読んでいくかによって、いろんな解釈ができるように書かれているところがある。黒須重彦氏（「班婕妤と夕顔」『文字』 岩波書店 昭和57年2月号所収）は、夕顔の巻には不可解事項がざっと数えて六十余个処の多きに及び、諸註釈は根本的に再検討されてよい時期に來ていると指摘されているが、論の骨子は従い難い妄説の類のように思われる。ともかく、物語が、先行する説話をふまえたり、資料をふまえて書いていると思われる部分にそれが多いことも確かで、典拠の謎を解き証したり、種子明かしをするという点に物語る一つの方法があったように見える。犬養氏は、

多分に古代的な、夕顔物語の含む内部矛盾が、これで氷解したとは思わない。残された疑問も多々あると思う。だがまた、浩瀚な物語の細部の矛盾は矛盾であってよく、解釈の合理化が必ずしも、作品の正しい受容となるとは限らないということも、一つの自戒としておきたい。

と問題点を指摘されながら、「自戒」という形で批判をかわされ、謙虚に論を結ばれているが、示唆にとむ。

黒須重彦氏の「白き扇のいたうこがしたる」（『平安文学研究』昭和46年6月号所収）、笠間選書の『夕顔という女』



の問題点は、犬養氏の指摘に尽されているが、黒須氏の立論は曲解の上に成り立つもので、「魅力ある主張」という類のものではなさそうである。「心あてに」の歌の作者が、「光ありと見し夕顔のうは露はたそがれどきの空目なりけり」の歌意から夕顔だと解するのも誤りだし、「心あてに」の歌を「相手を少なくとも源氏とは知らずに」「頭中将と推測して」贈ったと解するに至っては言語同断である。世を忍び、家の者にもその素性を隠し、「ひかえめな、おどおどした」夕顔の性質から考えて「およそかくのごとき行動に出るであろうか」という黒須氏の主張は、小学館 日本古典文学全集『源氏物語』の頭注などに、

この歌を作ったのは、その内気な性格と矛盾する言動だといわれる。(214頁)

とあるのと同じである。だがこのことについては、「女主人が行動的であり過ぎるという考えは、歌の解釈を誤った、後世風で近代的な解釈でしかない」と旧稿で論じたことがある。重複をいとわず旧稿を引く。

夕顔の花は、女の家に咲いている花であり、それは饗宴の場におけるさかなともいうべき出し物であった。主人方は「なさけなげなめる花」と「わび」ている。だが、日本文学を発生させ、成長させてきた、古代の饗宴の意味が発想の原点ともなっている。そうした発想の根底をとらえながら、夕顔の花が、女主人の家に咲いている「口惜しの花の契り」「枝もなさけなげなめる花」であることを考えれば、夕顔の花を源氏によそえて解釈することは誤りだといわなければならぬ。この歌は、

こんな賤しい家に咲いている風情のない夕顔の花に、光彩を添えて美しく見せる白露の光、そのように、こんな家に住んでいる私のようなものにさえ、面立たしさと美しさを添えてくださるようなあの光、それは、光の君と推し量られることでございます。

と解すべき歌なのだ。夕顔は、口惜しい花の運命を背負ってはいたが、源氏に折りまいらせたことは、せめて

もの慰めであった。それは、家の花として、そこに住む女を表象するものだった。そして、花に美しさを添えたのは、夕顔の花に置いていた白露の光なのであった。源氏は、夕顔の花にたとえられていたのではなく、光にたとえられている。夕顔の美しさは、その光にあやかっていたのである。このように夕顔の歌を解する時、定説化している夕顔のあだあだしさ、積極的、行動的な面は消えていく。そこには、控えめに光源氏をたたえる曲折したふくよかな心情が見られる。それは、古今集躬恒の「心あてに折らばや折らむ初霜のおきまどはせる白菊の花」によりながら、垣間見の賛美を発想の原点とする歌なのである。（『源氏物語とその周辺』伊那毎日新聞社 172頁）

この旧稿の考えは今でも正鵠を射たものだと考えている。だが、定説化した考えは、古い注釈書の類に見えている。『岷江入楚』（桜楓社 源氏物語古注集成 中田武司編）に、

箋義曰木枯の女のことくならは此哥尤夕貞上の詠なるへし夕貞上はさやうのかるかるしき人にはあらず自哥とは称しかたし自然官女などの私の義としてかくのとき時相かはりて詠する事も有へし然は夕貞上の哥にあらざる所も決しかたし所詮作者をつけずして見る義可然也（250頁）

とある。『細流抄』にも「さし過たるやうなれど折ふしの過しかたくて出したる扇なるへし」とあり、『弄花抄』も注するところは同じである。玉上博士も「評釈」（角川書店）で、

この女あるじは「源氏物語」の中でも無類のはにかみやであって、一目見た路上の人にこんな歌を贈るべき人ではない。が、この歌がなくては、この巻の話は起こらないので、この一事は作者の無理、失策なのであろう（356頁）。

とされる。だが、『花鳥余情』（桜楓社 源氏物語古注集成 伊井春樹編）に、

夕かほは女のわが身にたとへてよめり露の光は源氏によそへたるへし河海に夕良を美人にたとふる事をのせ侍りここには相当せざるへし夕かほの花はいやしきかきねにさく花なれば女も我身にたとへていへりわれを美人と自称すへきことにあらざる物也(41頁)

とあり、「湖月抄」に引く「細流抄」にも「源氏でいらっしやると推し量るにつけて夕顔の花が美しい光彩を添えた」とある。黒須氏(「白き扇のいたうこがしたる」)は、「源氏」の時代に夕顔の花は貴族社会では美の対象外で、陋巷に咲く(実用的目的をもった)花であり、それが源氏であるなどということは、作者にも読者にもない意識で、通念化されたものであったと指摘されている。この指摘は正しい。この歌は、ここに視点をすえて考えなければならぬのである。黒須氏の考えを批判された鬼束隆昭氏(「朝顔と夕顔——宣孝関係の紫式部歌と源氏物語——」)「日本文学」昭和48年10月号所収)は、

挑発的ともいえる歌を女の方からよこしたことが、後に描かれる夕顔の人がらにふさわしくないのであるが、源氏と女とがながしの院ではじめて素顔を見せ合った時「夕露にひもとく花は玉ぼこのたよりに見えしえにこそありけり 露のひかりやいかに」(源氏)「ひかりありと見し夕顔のうは露はたそがれどきのそら目なりけり」(夕顔)と歌のやりとりをしていることではっきり夕顔自身の贈った歌として作者は書いているのである。

と指摘され、「黒須氏がいっそう明らかにされた冒頭の場面と後の叙述との矛盾を、物語執筆のもとになった素材から生じたもの」と考えられている。紫式部集の贈答歌、

方違へに渡りたる人の、なまおぼおぼしき事ありて、帰りにけるつとめて、朝顔の花をやるとて、おぼつかぬそれかあらぬかあけぐれのそらおぼれするあさがほの花

返し、手を見分かぬにやありけむ、

いづれぞというわくほどにあさがほのあるかなきかになるぞわびしき

がもとになった素材だといわれる。方違えに紫式部の家にやって来たある男は宣孝で、後に二人が結ばれることになった。「印象深い歌の贈答」が、物語に生かされたと考えられている。そして、

物語が必然的に要請した夕顔の人がらと夕顔の花につけて自分の方から歌を贈った行動との矛盾は、フィクションの物語の中に実体験を持ち込んだために生じたものだとは私は考える。

と指摘された。この贈答歌の解釈は難解で諸説がある。諸説を研究的に整理する用意はないが、対立する問題点を明らかにして一つの見解を述べることにする。

岡一男博士は、「源氏物語の基礎的研究」（東京堂）で「方違へに為時の邸に來た男が、式部に見せた何気ない態度を、女性特有の過度な罪障感から自己に対する懸想かと買ひ被って強く反撓したところ、それが単なる好意の表示とわかったので、彼女は氣の毒に思つて、翌朝朝顔の花につけて、「きのふの私の態度わかつたわ。恐つていらっしやらない」（68頁）と心配して贈った歌。「他人に見られてはと、筆蹟をかへてやつたので、相手の男は誰かわからず、何故朝顔をよこしたかわからなかつたのである。それは彼が式部の反撓を別に少しも意をとめてゐなかつたからである。彼女は男を鈍だと思つたであらう」とされ、その男は藤原宣孝だろうといわれる。清水好子氏の「紫式部」（岩波新書）はそうした立場からの詳論である。かなり長文になるが、引用する。

式部の家に「方違へにわたりたる人」も、父為時と親しい同僚か親戚の男ということになる。 「なまおぼおぼしきこと」とは、言葉だけの意味は「なんとなくぼう」としてはっきり掴めぬこと」というのだが、はたしてどのような具体的事実を指すのか。翌日、早朝に朝顔の花を届けたところから推察すると、朝顔といえ

あのころはすぐ顔、人の顔を連想するから、「なまおぼおぼしきこと」も顔に関連したことと解すべきである。そこで、歌にある「おぼつかなそれかあらぬか」の「それ」も、相手の顔を指すものと解してよいであろう。歌の意味は「どうもはつきりしませんわね。あなただったのでしょか、違ったのかしら、明け方の暗がりのなかで、顔をお見せになりながら、誰とも分らぬふりをなさって」ということになる。すると、これは怪しからぬ話で、男が、方違えに泊めて貰った親戚か知り合いの家で、夜明け方のまだ仄暗い時に、その家の娘の寝所に忍んで行ったことになる。そして、おかしいと思った娘に、顔をちらりとぐらいは見られたので、何とか紛らわして正体を見破られぬようにした。それを詞書では「なまおぼおぼしきこと——はつきりわからぬこと」と書き、歌では「空おぼれする——そ知らぬふりをする」と言ったのであろう。「空おぼれする」は「空とぼけする」意で、このほうが詰問の気味加わる。しかし、「なまおぼおぼし」とは言っても、歌を贈る先が分明なのだから、相手が全然分らぬというのではない。それに「朝顔」の花をやるのは、顔を見届けましたよという暗示である。ちょっと不謹慎な図々しいことをして、見付けられて、顔を隠して退散し、あとは何喰わぬ顔で歩いていると、侍女たちに、「おや、お客様がどうしてこんな所に」とでも言われた時もうまくごまかして切り抜けた——つまり空おぼれた男に、「当方では全部分っていますよ、今朝方、女部屋を覗いたのはあなたでしょ」と言い遣るのである。こんな歌を貰えば、男は返事に窮するだろうに、娘だから、そんなことは容赦していない。なんと返事するか、男が女を扱う力量も歌才のほども試されているのだ。けれども、娘のほうにしても、女の側かう歌をやれば当然返歌は来るものとしなければならぬ、と、今後男との交際——歌のやりとり——はつづくことになる。もう、返歌をしないと頑張る理由は薄いものだから、それからもっと進んだ関係に発展することもありうる。そんなことは当時の女の子の常識だから、式部のほうから詰問調にした

歌を贈ったのは、彼女のほうにそうなってもよい覚悟があったのだろう。その上、こんな歌をやっても相手に嫌われないという成算もあったのだろう。この歌の、男をからかうような調子にそれが出ている。方違えに来た男に関心を持たれたことを知って、気味悪がったり、ふさぎ込んだりしないで、かえって挑むような歌をやるところ、自信に溢れた恐いもの知らずの娘らしく思われる。

式部にはあまり年の違わぬ姉があったらしい。男は姉と二人いる部屋に忍んで来た様子だ。式部の歌は姉と二人で相談して贈ったように思われる。男を恐れない、ぐじぐじした羞恥を投げ捨てた高飛車な詠みぶりが、同年輩の衆を待たむといった、すこしはめを外した気分を出している。姉と相談したと考えるのは、男の返歌に「手を見分かぬにやありけむ」と式部自身が注釈を付けているからである。相手はどちらの筆跡か分らなかつたらしいと、男の歌に「いづれぞと色分くほどに——どちらからのお便りかと考えているうちに」とあるのを補足説明しているのである。この家には姉妹がいて、二人いっしょに一つの部屋に住んでいたので、さてどちらの手跡やら判断がつかぬと男は逃げた。これで、男はこの家の娘から始めて文を買ったことがわかる。式部は当時の常識に反し、女のほうから、恋文——といってよからう——をやったことになる。時たまそんな女の歌が伊勢物語や大和物語に載るが、式部は源氏物語の姫君には絶対させなかつた。上流階級の女性だからであるうか。

男は、強い氣迫で押してくる、変な恋文にうまく身をかかわした。どちらから頂いたのかなと思案しているうちに、たちまち朝顔の花が萎れ、色褪せてしまったので、見分けられなくて困っています。どちらにどうお返事したものでしょうか、と。一筋縄でゆかぬ娘の、まがりくねった好奇心をうまくはぐらかせる相手は、若い男ではなからう。女の経験を積んだかなりの年輩で、式部たちに関心を持っている、父為時に近い人、諸家の

研究にいわれるように、やがて式部の夫になる藤原宣孝を当てるのに私も賛同する。(23頁)

岡博士には「紫式部の生涯」(『源氏物語講座』第六卷 有精堂)の再論がある。これも長文であるが引用する。

第四首目、「方違へにわたりたる人」というのは、男性であろう。(5)に「手を見わかぬにやありけむ」とあるから、紫式部がわざと筆蹟をかえたか、あるいは紫式部とあまり手紙の贈答のなかった人だと思われるからである。とくに返歌に「いづれぞと色わくほどに」とあるから、紫式部のか、その異母妹(のちに信経妻)からか、どうしても見わけがつかなかったように想像されるからである。(1)の「なまおぼおぼしきことありて」は、「何となく気にかかることがあって」の意。方違えに為時の邸に来た男が、何かちょっとした感情の齟齬があったらしく、翌朝未明に帰って行ったので、すぐ朝顔の花をつけてやった歌で、「心もとないたらぬわ、あなたったら。そうなのか、そうでないのか、わからないので、私この夜明け前の薄暗い空に、ぼんやり咲いている槿の花みたいだわ」とわざと手をかえてやったのである。この朝顔は、『源氏物語』の「槿」の巻に「秋はてて霧のまがきにむすばほれあるかなきかにうつるあさがほ」とあるもので、夏秋から冬にかけて、早晩に咲く花で、牽牛子・槿・しののめぐさなどいろいろ異なる異名がある。ヒルガオ科の一年生の園芸植物、莖はつるで、左巻きである。女の寝起きの顔によくたとえる。「空おぼれする」は「ソラトボケル」の意だが、ここでは「明けぐれの空」の意だが、ここでは「明けぐれの空」にボンヤリソラトボケルという意にとる。前者の意だとすると、石川徹のように、詞書の「なまおぼおぼしきことありて」を、「私に変な事をしておきながら」と訳し、歌意を「あなた一本本気でなさったの、それとも一時の気まぐれなの？明け方に出ていらっやる時、薄暗い明けぐれの空に朝帰りのそのお顔を紛らわして、空とぼけていらしたわね」と解せよう(『紫式部の人間と教養』△『国文学』昭和三六・五▽)。しかし、そうすると、それは男と紫式部との初夜の暁の歌を、男に女の

方から贈ったこととなり、紫式部の所為とは思われぬこととなる。「方違へに渡りたる人」とあるから、前に  
そういう関係があった男と思えぬし、「なまおぼおぼしきこと」の解釈も、けんかしたことか何かにかえなけ  
ればならない。それでこれは、昨夜男が紫式部に何気なく見せた態度に強く反発したので、男が翌暁未明にさ  
りげない風をよそいつつ帰って行ったのを、気にしての彼女の歌と解すればよい。父よりも身分の高い男で、  
これまでも求婚をほのめかして来て、たまさかには彼女からも返事した男、しかし、紫式部は当時独身を決意  
しており、同居している異母妹を縁づけようとしての所為であつたらう。いわば、薫にいいよられて中の君を  
とおもつた宇治の大い君、また匂の宮妃になつたのち同じく薫にいいよられて浮舟をほのめかした中の君の心  
情に似たところがあるう。

そうして(4)の歌は、男も朝顔を贈つて来たのだが姉か妹か筆蹟で判断できなくて詠んだもので、昨夜の紫式  
部の反発には少しも意をとめていないこと、それより姉妹のうち、どちらが朝顔を贈つてくれたのだらうと、  
それをひどく気にしているおもむきである。

この解があたつておるとすると、それは中年の男で、多分のちに彼女の夫となつた藤原宣孝であらう(5頁)  
鬼東氏は「一夜をともした、ととる石川徹氏の御意見」もあるが、「もしそうなら式部の方から絶対に先に歌  
を贈るまいと思う」(93頁)といわれるが、岡博士は、再論で石川氏の「紫式部の人間と教養」(『国文学』学燈社

昭36年5月号)を引かれ、「男と紫式部との初夜の暁の歌を、男に女の方から贈つたこととなり、紫式部の所為とは  
思われぬこととなる」(同、4頁)と既に指摘されているが、それは認められなければならない。ところが、帚木、  
空蟬物語を意識の底に沈めながら一連の贈答歌をしたたかに読みとっていく清水氏の深い理解にも目をみはらざるを  
得ない。姉であつたか異腹の妹であつたかは問わないことにするが、「式部のほうから詰問調にした歌を贈つたの



は、彼女のほうにそうなってもよい覚悟があったのだろう。その上、こんな歌をやっても相手に嫌われぬという成算もあったのだろう」とされながら、「式部にはあまり年の違わぬ姉があったらしい。男は姉妹二人いる部屋に忍んで来た様子だ。式部の歌は姉と二人で相談して贈ったように思われる。男を恐れない、ぐじぐじした羞恥を投げ捨てた高飛車な詠みぶりが、同年輩の衆を待むといった、すこしはめを外した気分を出している」という清水氏の指摘は示唆にとむ。この説を展開した石川氏の再論（『平安時代物語文学論』笠間叢書）がある。これは、岡博士や鬼束氏が引かれる「紫式部の人間と教養」（『国文学』昭36年5月号所収）を昭和五十三年九月増補訂正されて同書に再録されたものである。

たとえば、空蟬と軒端の荻の所に忍んだ光源氏、大君と中の君との寝所に入った薫の二つの相似た事件は、彼女にこれと同じような体験があったから、二度も同じような事件を書いてしまったのだとは考えられないであらうか。家集の「おぼつかなそれかあらぬか」（第四番）の歌の如き、紫式部が成人してまもなく世を去った姉がまだ存命中、姉妹二人で寝ていた所に、方違えに来たある男が、空蟬や大君のように、式部の姉が通れぬたあと、そこに一人残されて寝ていたうら若い妹、紫式部と、この男が一夜を共にすごしたことを示しているのではないか。この男が薫のように優しい、もしくは優柔不断な男だったら、彼女は無疵で済んだらうし、光源氏のような男だったら、軒端の荻のような経験を紫式部もしたことであらう。この箇所は、家集の原文では次のようになっている。

方違へに渡りたる人の、なまおぼおぼしき事ありて、帰りにけるつとめて、朝顔の花を遣るとて、おぼつかなそれかあらぬか明け昏れの空おぼれする朝顔の花

返し、手を見分かぬにゃありけむ、

いづれぞと色分く程に朝顔のあるかなきかになるぞ佗しき

これを、試みに現代語に訳せば、次のようになるう。

方違えでうちに泊った人が、その晩私に何か変な事をしておきながら、本当に私が好きなのか嫌いなのか、はつきりしない態度のまま帰ってしまった翌朝、あたし、あの人に朝顔の花を贈って打診してみたんです。

それに添えた歌は、

あなた、本気であんな事なさったの？、それとも一時の気まぐれなの？、明け方別れて出ていらした時、薄暗い空に、朝帰りのそのお顔を紛らわして空っぽけていらしたわね。

あの人の返歌ったら、私の字だか、お姉様の字だか、見分けが付かなかつたらしくって、

ハテ、姉からの文かナ、妹の方からなのかナと、識別しようとしているまに、なさけないことに、あなたの贈って下さった朝顔しぼんじャったよ。

と、まあ、こういったところであらう。

この男を通常は、後に彼女の夫になった宣孝だとしている。とすると、宣孝はよほど早くから、父為時の家に入入りして、当初は姉の方に懸想していたが、姉が死んだので、妹に乗りかえて、紫式部と結婚したことになる。その可能性も十分ある。だから、私は通説に反対するわけではない。宣孝は為時と同僚だったのだから、あり得る推測である。けれども、宣孝だとする必然性もない。この贈答歌は、家集第四番、第五番の歌で、前半、これだけが孤立している。紫式部集は、大体年代順に編集されていると思われ、宣孝とおぼしき人物との贈答歌が、家集に盛んに出てくるのは、大凡第三十一番の歌からあとになってである。とすると、これは、彼女のうら若い頃の性的体験であって、宣孝登場にかなり先立つころの事だったのであるまいか。

石川氏の指摘も示唆にとみ魅力的である。紫式部集は前半の大部分は自纂で、一部を除いてはほぼ年代順に排列されていると考える立場に従えば、今井源衛氏（『紫式部』吉川弘文館）が、やはり石川氏の「紫式部の人間と教養」に よりながら、

そうなる、姉の生前、たぶん式部は二十三—四歳、いうまでもなく、宣孝と結婚前に彼女は他の男性と交渉があったこととなり、当時のことであるからそれは当然肉体的なものも含んでいると考えられる。（63頁）

と指摘されているのが注意される。今井氏は、「王朝文学の研究」（角川書店）でも、石川氏の解釈に従うべきであり、「式部の未婚時代にこの種の恋愛関係があった事の証拠とすべきであろう」（230頁）といわれる。山本利達氏

（『紫式部日記 紫式部集』新潮日本古典集成）は、「いづれぞと」の歌から推定すると「作者と姉のいる部屋へやって来て、二人のどちらに対してともなく色めいたことを語りかけたのであろう」（116頁）と解されているが、方違えの男と、紫式部との関係は、山本氏から石川氏の旧稿、更に詳細に亘ってその関係を追求した再論に至るまで、さまざまではあるが、ともかく源氏と空蟬、軒端の荻をめぐる物語の原像か、あるいはそのものを紫式部が体験しているという事実は否定できないようであり、男との関係の深淺さにはかかわりなく、そうした場面を想定すると女の側から、姉との関りのなかで、いどむように詠みかけたのはむしろ自然であり、岡博士や鬼束氏のように、後朝の手紙を女の方から送ったと考えるのは、やはりとらわれた解釈であるとしなければならぬ。男が「そらおぼれ」したように、紫式部も「そらおぼれ」して、秘めた情事を家集にとどめた。そして、この歌の位置も、そうした「そらおぼれ」の姿勢と深くかかわるものではなかったろうか。犬養氏は、鬼束氏の論を批判され、

氏の論考は朝顔と夕顔、家集と物語など一連の叙述の中で説得力を持つもので、部分的に抽出して当否を論

ずるのは片手落ちでもあろうが、『紫式部集』の件の贈答に関する限り、勝ち気にして潔癖な少女が、けしからぬ男に一矢をむくいたので、夕顔の贈答とは全く異質なものであろう。また、氏の立場は、件の男を宣孝でないとする、その根拠をなせば失ってしまうが、家集の詞書に、思い出をなつかしむ風情はなく、むしろ、けしからぬ男を戯画化した感さえある。かく読み取ると、当の男は、作者がその死を慟哭した宣孝とは別人のような気もする。いずれにせよ、複雑多端な素材をこなして、自家薬籠中のものとする作家の営みに、実体験を持ち込んだがゆえの矛盾、亀裂を想定するのは、いささか安直ではあるまいか。(同、195頁)

と指摘されている。鬼東氏は「お互いに歌の詠まれた事情も違うし、特別に語句の一致があるわけではないが、私には両者が無関係ではないと思われる。朝顔が夕顔になっているのもかえって両者が無縁でないことを示していると思う」といわれる。今井源衛氏（『源氏物語と紫式部集』『文学』昭和42年5月号所収）は、「おぼつかない」「いづれぞと」の歌は『源氏』花宴巻の「いづれぞと」「世にしらぬ」の歌と「発想と表現の類似度はかなりの程度認める」ことができる指摘されている。だが、そうした推定を実証していく客観的な事実が存在するか否かが問題である。鬼東氏は、「式部卿宮の姫君に朝顔たてまつり給ひし歌」以下で、このことを論証されようとする。だが、犬養氏が指摘されるように、「複雑多端な素材をこなして、自家薬籠中のものとする作家の営みに、実体験を持ち込んだがゆえの矛盾、亀裂を想定するのは、いささか安直ではあるまいか」という立場からすれば鬼東氏の論は説得力を持たぬことになる。しかし、源氏物語の形成を享受を一つの動態としてとらえようとする筆者の見解からすれば、近代文学に近い方法から演繹的に源氏物語を理解しようとする犬養氏の考えにやはり疑問をいだく。勅選集の資料が、意外に限られたせまい範囲の資料から成り立っていることは、当時の文学の享受のありようを具象的に示すものであった。物語の作者は、それを享受する人と一つの集団を形成していたという事実を離れてその本質を考え

することはできない。そうした実態に支えられて、近代小説の方法からみれば、多くの欠陥や矛盾を持つと考えられる部分が、救われていた事実を認めないわけにはいかぬ。鬼東氏は、帚木の巻の「式部卿の宮のひめ君に、あさがほたてまつり給ひし歌などを、すこしほゆがめてかたるもきこゆ」という唐突な感じを与える語句が見えるのを、これはやはり先に見た紫式部集の朝顔の歌と関連があると思う。方違えに男が紫式部邸にやって来たという体験が空蟬物語の発端となったのであるが、その方違えからの自然の連想として「朝顔たてまつり給ひし歌」が出て来たのだと思う（同、94頁）。

と考えられているが、あまりにも作者の創作意識を偏重され過ぎているところに問題がある。当時の物語の読者は、「紫式部集」の歌を下に重ねて源氏物語を享受することができたのではなかったか。作者と読者とは同じ一つの集団に属するものであったという享受の様態を見つめなければならない。結論的には鬼東氏の論とほぼ重なることになるが、「紫式部集」の歌―家集そのものであったかは別であるが―を物語の下に重ねて、その語り口のしたたかさ、虚構の巧みさを味っていたと考えるならば、物語に近代小説の方法に見られるような一貫性、完結性を求めることはできなくなるはずである。「紫式部集」の歌をもとに、源氏物語が創作され、特に宣孝関係の歌が物語化されていく実態の一部は既に明らかにされてもいるが、このことはまた、源氏物語の創作の契機が宣孝の死にあつたとする古い注釈書の記述を再確認することにとどまるものではない。こうした物語の傾斜は、先行説話を素材として執筆していく場合にも見られるものであったと考えるべきで、このような視点に立って源氏物語を読んでいくと、従来、矛盾や欠陥をもつと考えられてきた問題の部分も、その意味を問い直してみなければならなくなるだろう。

「おぼつかぬ」の歌の前にある家集の三番目の歌は、

「箏の琴しばし」といひたりける人、「参りて御手より得む」とある返り事

露しげきよもぎが中の虫の音をおぼるけにてや人の尋ねむ

というもの。千載集雑上、九七四の歌で詞書きに「上東門院に侍りけるを、里に出でたりける頃、女房の消息のついでに「箏の琴伝へにまうでむ」と言ひて侍りければ遣しける」とある。従来この歌は「千載集の詞書によれば、宮仕え後のものとなるが、「紫式部集」の歌の配列からすれば、宮仕え以前のもの」とされたり、歌の配列が必ずしも年代順でない例として考えられたりしてきた。千載集が何を資料として宮仕え後の歌としたかは明らかではないが、山本利達氏は、家集の前篇では「内容上同類のものが集められ、それが年代順に並べられており、「娘時代の友達との別離やめぐり逢い、旅、結婚生活の楽しい日々、これら若き日の記念となる歌が回想的に並べられ、夫の死後の身の不幸を嘆く歌を最後においている」「後篇では、宮仕え以後の歌を中心に、結婚前後の歌が三箇所に散らしてある。従って年代順とはいえないが、同類の歌同士の中では年代順になっている」とし、「宮仕えにおける半ば公的な歌以外は、また夫に対する閨怨の歌ともいふべき前篇にみられなかった結婚生活の暗い反面をみせる歌が、求婚当時の歌と共に入っており、後篇の性格を憂愁の色濃い歌集」（新潮日本古典集成「紫式部日記 紫式部集」）にしていると指摘されている。詠作年代について精細な研究を発表されたのは岡一男博士である。岡博士は、「(1)から(8)までの歌群は(3)と(4)とが春夏顛倒してゐるだけで、大体秋・冬・春・夏・春の順序になってゐるから、長徳元年・二年・三年（正月）に詠まれたと思ふ」（『源氏物語の基礎的研究』東京堂176頁）「大体「類従本」「紫式部集」の百二十三首の歌を年代づけてみたが、それによると、多少の錯簡もあり、類をもつて蒐めたところもあるが、ほぼ年代順である」（同177頁）と指摘されているが、この説がほぼ定説となってきた。だが、千載集にとられた「露しげき」の歌については論及されるところがない。清水好子氏は、前半の大部分が自纂、年代順の排列とされなが

らも、「前半にも、年代順に排列されたと見ると都合の悪い歌も一、二首は出てくる。たとえば、第三番目の歌が千載集によって、宮仕え後の歌と解釈されているのはその一例である」(『紫式部』岩波新書6頁)と指摘されている。家集をそうした定説化した考えにとられず素直に読んでいくと、確かに類纂的で年代的ではあるが、その整理の様態は、「年代順」と明確に言い切れるような確乎たるものではないように見える。後篇に見られる年代順とは言いきれない要素が、前篇にもやはりはいり込んで見ると見るべきではないか。山本氏は家集の歌を「露一ぱいの蓬の中で鳴いている虫の声を、並一通りの思いで人は聞きに来るでしようか。こんなあばらやへ。私などに琴を習いに来ようとは酔狂な方ですね」と解され、「作者の住いと琴の演奏を謙遜したものと」解されるが従うべきである。家集の詞書きのように、紫式部のもとに直接参上して琴の奏法を習いたいという言い方に、娘時代の面影を連想していくのはかなり無理のように思われるし、住まいと自分の奏する琴の音を「露しげきよもぎが中の虫の音」と謙遜して詠んでいる歌の中には、「憂愁の人生を経験してきた人の思いがこめられているようにも思われる。その資料の出所はともかく、「宮仕え以後」とする千載集の詞書は、歌とのかかわりの上で、やはり俊成の批評にたえ得る世界を持っていたからだと思なければなるまい。ただ後撰集の詞書は、「上東門院に侍りけるを、里に出でたりける頃、女房の消息のついでに、「箏の琴伝にまうでむ」と言ひて侍りければ遣しける」とあり、女房が紫式部のもとに行く事情が家集とは違っている。この歌を紫式部集の「歌の配列からすれば、宮仕え以前のものと思われる」とされる山本氏の指摘には、演繹と撞着に導かれた一つの独断が見られると言えれば礼を失することになるが、類纂と編年という意識に支えられながら、また別の構成的意識をもつ作品となっているのではなからうか。

方違えの男との贈答歌に、空蟬、夕顔物語を重ねて読み、その歌に夕顔巻の歌との発想の類似をとらえようとする物語の読み方は、その男が宜孝であったか否かにかかわりなく、源氏物語の主題を、そうした体験の内面に原点

を据えて考えていくという点からみて重要な意味をもつことになる。だが、そうした問題にたどりつくには、まだまだ論じなければならぬことが多く、別に再論を加えなければならぬ。

家集の「おぼつかな」の歌は、紫式部が詠みかけたものではあるが、姉を意識した代作歌としての一面を持っていたことを見のがしてはなるまい。この歌のもつ「いどみ」は、そういう面からも考えなければならぬ。旧稿で、「女房達の合作説も取るに足らない」（『源氏物語とその周辺』172頁）と指摘したのは誤りで、訂正しなければならぬ。犬養氏は、

(A)の歌は侍女たちの合作（玉上説）と見たい。その場合、女たちは、隣家の門口に止まった車の主を頭中将と誤認したのではなく、むしろそれ以上の貴公子と見て取って、あるいは高名な光源子かと半信半疑、それこそ当て推量に、時宜的に叶った風流な挨拶（藤井説）を送ったものである。それは女主人公夕顔のリードではなく、徒然のうちに結ばほれた若い侍女たちの、たまゆらの花やぎと違ってよかろう。やがて扇の歌を見た源氏は、「いとしく思ひあてられ」たことに興を覚えながらも、あえてそれを韜晦したもの。すなわち源氏の返歌(B)は、「もっと近寄って（親しくなって）確かめてみるがよい。私は決してそんな男ではない」意と見たい。(B)の歌をそのように否定的に解すれば、その後の源氏が「かの夕顔のしるべせし隨身」を同行したことも、夕顔方で頻りに男の素姓を詮索しているのも、一応、納得できるのではなからうか。(同、197頁)

と指摘されているが、夕顔の巻に、

まだ見ぬ御さまなりけれど、いとしく思ひあてられたまへる御側目を見すぐさでさしおどろかしけるを、答へたまはでほど経ければ、なまはしたなきに、かくわざとめかしければ、あまえて、「いかに聞こえむ」など、言ひしるふべかめれど、めざましと思ひて、隨身は参りぬ。(小学館 日本古典文学全集『源氏物語』(1) 215頁)



とあるのにつなげていくと、「心あてに」の歌は、やはり「いかに聞こえむ」と言いあっている女房達の合作による代作歌であったと見なければならぬように思う。

いと忍びて、五月のころほひより、ものしたまふ人なんあるべけれど、その人とは、さらに家の内の人には知らせず、となん申す。時々中垣のこいま見しはべるに、げに若き女どもの透影見えはべり。褶だつもの、かごとばかりひきかけて、かしぶく人はべるなめり。(同217頁)

とあるが、夕顔は「その人とは、さらに家の内の人だに知らせず」という状態で、はい隠れている客分の女主人なのである。215頁の本文「さらば、その宮仕人なりしたり顔にももの馴れて言へるかな」は、惟光が宿守なる男から問い聞いて光源氏に復命した「揚名の介なる人の家になむはべりける。男は田舎にまかりて、妻なむ若く事好みて、はらからなど宮仕人にて来通ふ」とあるのをうけたもので、源氏は、そこに来通う宮仕人が読みかけた歌だと考えている。夕顔と宮仕人とは別人なのである。215頁の「あまえて「いかに聞こえむ」など、言ひしろふべかめれど」というのは、侍女達の詞で、やはりこの歌は夕顔の読んだ歌ではなく、夕顔に仕える侍女達が、主人公に代って代作した歌だと考えられる。以後の歌のかかわりが指摘されているが、代作歌が、客分の主人公の詠んだ歌として、以後の物語にからんでいくのは、当時の女房歌のあり方でもあり、物語もそういう形で進められていく。代作歌を、わが歌として物語につなぎとめていく世界に、物語の作者は、かえって夕顔像を造型していったのだと言える。

「露の光やいかに」と、のたまへば、後目に見おこせて、  
「光ありと見し夕顔の上露はたそかれ時の  
空白なりけり」  
とほのかに言ふ(同236頁)

この部分を読んでいくと、確かに代作歌説は無理で、「心あてに」の歌をふまえ過ぎていくようにも思われる。代作歌説も、自作歌説も、それぞれに根拠のある考え方ではあるが、どこにつなげて読んでいくかによって、ある流

動的な要素をもってくる。源氏物語には、そういう書き方をしているところがいくつかある。だが、そうした恣意的な解釈は認めるべきではない。物語の作者は、一つの謎解きを通して、主題を表現しようとしているからである。夕顔の巻の一つの面白さは、「心あてに」の歌の作者が、誰かを解き証していくところにある。光源氏と隨身では、それぞれ別人と考えている。誰の歌かの謎を解いていくところに、物語の一つの興味があつた。この歌が、代作歌であることについては別に指摘するが、帚木の巻とのかかわりという点からも、考えなければならない問題があるように思う。

常夏の女の物語は、三首の歌から構成されている。雨夜の品定めめの女の物語四話の構成を見ると、第一話、馬頭の経験談「指喰いの女」は、馬頭の歌、女の歌の二首。第二話、「木枯の女」も同じく馬頭の経験談。殿上人の歌と女の歌の二首。第三話の常夏の女の物語は、女、頭中将、女の三首。第四話、式部丞の経験談「蒜の女」は、式部、女の二首という構成をとっている。他の三話が、いずれも男から女へという二首の歌から構成されているのに、常夏の女の物語だけが、女、男、女という三首の歌から構成されている。

この常夏の女の物語の異質な構成は、何を意味していたのだろうか。雨夜の品定めめには、既に指摘されているように、仏教談義の影響もある。だが、伊勢物語を意図的にとり込んでいるという指摘も重要である。確かに「全集」の頭注を引くまでもなく、伊勢物語が大きな影を落している。当時の「伊勢」と、現在の物語との間には、かなりの違いを考慮しなければならないが、岩波「大系」本の伊勢物語の章段が、何首の歌から構成されているかを調べると、次のようになっている。

一段を構成する歌数	章段の数
1	92
2	34
3	6
4	5
5	4
6	1
7	1

三首の歌から構成されている章段は六段である。

(1)、伊勢物語一四段「みちのくの女」の物語。「なかなか」「夜も明けば」「栗原の」と、女、女、男の歌の順に、田舎の女の積極さが語られる。

(2)、四三段「賀陽の親王」の物語。「ほととぎす」「名のみたつ」「庵おほき」と、男、女、男の歌の順に、浮名の多い女への思いを語る。

(3)、五八段「心づきて色好みなる男」の物語。「荒れにけり」「葎生ひて」「うちわびて」と、女、男、男の歌の順に、したたかな女にむくいる男の物語を語る。

(4)、六九段「伊勢の国に狩の使にいきける」物語。「君や来し」「かきくらす」上の句「かち人の」下の句「またあふ坂の」と、女、男、上の句女、下の句男の歌の順に、うつくしくもはかない恋物語で、やはりこの物語の主導権は女性があつた。この段が、最初にある伊勢物語の一本があつたと伝える。

(5)、一〇七段「あてなる男」の物語。「つれづれの」「あさみこそ」「かずかずに」と、男、女、女の歌の順に、「蓑も笠もとりあへで、しとどに濡れて」女のもとを訪れる男の物語。女の歌は、いずれも幼い女に代った男の代作歌。

(6)、一一一段「やむごとなき女のもとに」の物語。「いにしへは」「下紐の」「恋しとは」と、男、女、男の歌の順に、侍女の死を弔うように、さる高貴な女あるじに恋の心を詠みかける男の物語。

三首の歌から構成されている伊勢物語の章段六段のうち、女が先に歌を詠みかける三段の物語には、いずれも女性の側からの積極さ、物語を領導していく姿が見られる。

平仲物語は、「大系」(岩波書店 遠藤嘉基)、「全講」(萩谷朴)、「新講」(武蔵野書院 目加田さくを)で、章段の分け方に

問題があるが、三首から成る章段を四段と考えれば、詠歌の男女の順序は、男、男、男二段。男、男、女一段。男、女、男一段となる。大和物語の説話集的要素の強い後半部を除く前半一四六段までについて調べると、「大系」では、三首の歌から構成されている章段は八段である。詠歌の男女の順序は、男、女、女二段。男、男、男二段。男、女、男一段。女、女、男一段。女、男、男一段。女、女、女一段である。そして、これらの物語においても、女の歌が最初に来る章段では、伊勢物語に見られるように、女性が主導的立場に立つ物語であることを、その根底としている。

こうした事實は、女の歌ではじまる三首構成の物語には、一つの型ともいうべきものを想定することができることを示す。そして、更に注意すべきことは、伊勢、平仲、大和物語を通して、「女、男、女」という三首の構成をもつ物語の章段が、きわめて特殊なものであるということであり、伊勢物語では三首目の歌が、女から男へという連歌の形をとってはいるが、帚木の巻は、この六九段の物語を意識に置いて対偶的に語られているのではないかという点である。伊勢物語のこの章段の末尾は、天福本などでは、

齋宮は水のおの御時文徳天皇の御むすめこれたかのみこのいもうと（『伊勢物語に就きての研究』校本篇 池田亀鑑 有精堂）

となっている。朱省院塗籠本・真名本系統の諸本にはこの一文はない。島原文庫本和歌知頭集（『伊勢物語の研究』資料篇 片桐洋一 明治書院）には、

さいくうと申は、もんとくてんわうの御むすめ、ゆうしなひしんわう。の御は、紀名とらちゅうなごんのむすめ、紀静子、三でうまち也（269頁）

とある。この注記は書陵部本にはない。冷泉家流伊勢物語抄には、

おやとは、齋宮のおや染殿后なり。此齋宮は文徳天皇第二姫宮恬子内親王なり。染殿にはけいばなり。母は

紀静子。三条町事なり。されども、家の日記には染殿といへり。されば斎宮のおやとここにかけるは染殿后なり(同 262頁)

とある。注記が天福本などの本文に混入したものと云われるが、この章段は、業平伝にかかわるそうした読まれ方とともに、中国文学の作品を原拠とする創作であったとする見方もある。だが、いずれにしても、伊勢物語のなかで、発端的契機を秘めた章段としての意味をもち、——それは章段の位置ではなく、内容的な意味においても——女性領導の要素をもつ恋物語であることは確かである。源氏物語の作者が、伊勢物語六九段を下に引きながら、常夏の女の物語をつくっていったとすれば、夕顔の巻で女の側から歌を詠みかけてきた意味は、自作歌、代作歌にかかわりなく、従来の見方や解釈を根本的に変えなければならないことになる。そうした物語構成の手法をふまえながら、夕顔という女性を、逆に、きわめて控えめな、あえかな女性として裏返して造形して見せたところに、作者の並並ならぬ意図があったように思われる。それは、六十九段とのかかわりを考えていかななくても、夕顔の巻で、女の側から歌を詠みかけていくのは、帚木の巻の三首構成の物語的世界の構想から形成されたものであり、一つの型——その形式をふまえながら、その内容を裏返して造形して見せた創作であったことに驚かざるを得ない。

3

「心あてに」の歌に、源氏は、

寄りてこそそれかとも見めたそがれにほのぼの見つる花の夕顔

と返歌して、惟光に様子を探らせる。そして、「なほ言ひ寄れ。尋ねよらではさうさうしかりなむ」といいながら

も、「かの下が下と人の思ひ捨てし住まひなれど」と帚木の巻の雨夜の品定め物語を思い出す。そこから物語は、さて、かの空蟬のあさましくつれなきを、この世の人には違ひて思すに（同218頁）と、空蟬物語に続き、

秋にもなりぬ。人やりならず、心づくしに思し乱るることどもありて、大殿には、絶え間おきつつ、うらめしくのみ思ひきこえたまへり。六條わたりにも、とげがたかりし御気色を、おもむけきこえたまひて後、ひき返しなめならむはいとほしかし。されど、よそなりし御心まどひのやうに、あながちなることはなきも、いかなることにかと見えたり（同221頁）

と、六條御息所物語に続いていく。そして、

まことや、かの惟光が預りのかいま見は、いとよく案内見取りて申す（同223頁）

と再び夕顔物語に返っていく。こうした物語の構成は、帚木三帖の構成をめぐる、従来の考えを確認することにとどまるものではないし、空蟬と夕顔という巻名の対応、対偶は、動物と植物とを対比させながら、ともにほかない宿世を背負うものを表わしているというだけでもない。空蟬と夕顔という二人の対照的な女性を対偶的に語るところに意味がある。早坂礼吾氏（『帚木・空蟬・夕顔』『源氏物語講座』第三巻 有精堂書店）は、空蟬は源氏にとってつれなき人で、心理的な苦悩に生きた女性であり、夕顔は事件の中にうもれた女性であるとされ、

空蟬とは対蹠的に、悲しむことはあっても、悩むことの少ない女性であり、性格的・心理的な空蟬に対して、あくまで昔物語の主人公である。夕顔事件は、最初に曖昧な形で夕顔の舞台を構成しておき、突然、「まことや。かの、惟光があづかりの垣間見は——」と本論にはいつてゆくところなど、やはり事件本意の物語であり、従って夕顔自身の描写は単純である。空蟬を近代小説的、夕顔を昔物語的な感じで受けとるのはこのためであ

ろう。紫式部はここでも相異なる二人の女性を対照的に描きわけてみせたということができよう。(42頁)

と指摘されている。この空蟬物語に続く六條御息所との物語、「秋にもなりぬ、人やりならず、心づくしに思し乱るることどもありて」には、森一郎氏(「源氏物語の主題と方法」桜楓社)が指摘されるように、藤壺との秘事を醜化の表現で暗示し、「葵上への途絶えは藤壺ゆえ」(53頁)と読みとることができよう。そして、それは、藤壺、葵、六條御息所という、若紫系物語を挿入することによって「かくろへ事」という局面的主題を負う夕顔物語を長篇的構成の物語に系列化していく構想的な意図を示すものであつたらう。だが、「秋にもなりぬ」と時間の推移のなかに語ることは、横に並ぶ事件を、時間という縦糸でつなぎとめていくことでもあつた。そして、ここでも物語の作者は、空蟬との対応、対照のなかに、六條御息所を対偶的に語ろうとしているのである。二人は、源氏に心を置き、ともかくも自からを立てて生きようとする男性拒否の心情を、その心の奥底に持つことにおいて共通する。それは、宇治十帖の物語における大君への造型と深くかわるものであるが、夕顔と空蟬という同系の物語のなかでの対比、空蟬、六條御息所という異系の物語のなかでの照応という、この物語の微妙な、そして、徹底した対偶的構成に注意していく時、源氏と中将との贈答歌のありようは、夕顔冒頭の贈答歌のありようと照応するものであり、その謎解きのような意味をもっていた。夕顔物語の発端に、

「くちなしの花の契や。一房折りてまゐれ」とのたまへば……童のをかしげなる、出で来てうち招く。白き扇のいたうこがしたるを、「これに置きて参らせよ。枝も情なげなめる花を」(同211頁)

とあるのは、六條御息所物語の結末に、  
「咲く花にうつるてふ名はつつめども折らで過ぎうき今朝の朝顔」  
「いかがすべき」とて、手をとらへれば、いと馴れて、疾く、  
「朝霧の晴れ間も待たぬけしきにて花に心をとめぬぞ見る」  
と、

公事にぞ聞こえなす。をかしげなる侍童の姿好ましう、ことさらめきたる指貫の裾露げげに、花の中にまじり

て、朝顔折りて参るほどなど、絵に描かまほしげなり。(同222頁)

とあるのと照応する。傍線部分の表現に注意すれば、これらの物語が、対偶意識によって構成された物語であったことは疑う余地がない。「霧のいと深き朝、いたくそそのかされたまひて、ねぶたげなる気色にうち嘆きつつ」御息所のもとを去る源氏は、侍女の中将の手をとらえて「折らで過ぎうき」と詠みかけるのであった。「花に心をとめぬとぞ見る」と返す中将の歌は、自分に対する源氏のいどみを、主人の御息所に対する歌にすりかえて言いのがれた機知にとんだ即興の贈答歌で、それはまさに御息所の代作歌に準ずべき侍女の歌なのであった。旧稿で、「朝顔」の花が六條御息所の家の花であり、夕顔の家の花と対偶的に構成されていたことを指摘したが、代作歌の面についても考えるべきであった。このように解する時、夕顔の物語は、代作歌を物語の発端として展開していったものと考えなければならぬ。犬養氏は、藤井貞和氏（「三輪山神話式語りの方法そのほか―夕顔の巻」）、「共立女子短期大学文科紀要」22号所収）の説のごとく、「門内に侵入して花を折る、いわゆる花盗人に対する、時宜を得た挨拶と見て、対する源氏の返歌を、挨拶を意識的に曲解、好色に取りなして応じたと見る方が、説得力もある」（195頁）とされる。この歌は挨拶の歌、会話性をもった歌であるが、犬養氏が言われるように「もっと近寄って（親しくなって）確かめてみるがよい。私は決してそんな男ではない」という風に続いていくのだろうか。私は旧稿で次のように述べたことがある。

「寄りてこそ」の歌の解釈にも諸説がある。吉沢博士の「新釈」の説、近寄って見てこそ慥にその人とも分るうが、夕暮時にかすかに見ただけでそれが私だという事がどうして分ろうぞ（112頁）

これは、「花の夕顔」を、源氏を指すと解する立場で、谷崎源氏、岩波大系、小学館古典文学全集など多くはこれによる。ところが、玉上博士の「評釈」には、



近寄ってこそ誰それとわかるもの。夕暗にぼんやりと見た花の夕顔ではわからない(358頁)

とある。これだけでは文意をとりにくいが、

「よりてこそそれかとも見ぬ」近よって見よう、親しくなろう、との気持がこの歌から察せられる。そして、夕やみに白く浮かび上がった美しい顔を、ちらっと見た、というのである。女は君を「夕顔の花」と言い、君は女を「花の夕顔」と言う。相手の武器をとりあげて、相手に打ってかかるのが、贈答歌の常法である。

(359頁)

とあるのによれば、「新釈」は「花の夕顔」を源氏に、「評釈」は夕顔によそえていることになる。この点の決着もつけておかなければならないが、いったい「夕顔の花」、「花の夕顔」の違いは何か。この点を論じたものはないようであるが、「橘の花」と「花橘」、「桜」と「山桜」、「山の桜」の対応と考えるべきではないか。即ち、前者は散文的な語であり、後者は歌語的なものであったということだ。「橘の花」「夕顔の花」に対して、「花橘」「花の夕顔」という対応に、歌語的な語感を読みとることができはしないか。そして、この微妙な語感の違いを読みとるかどうか、物語読解の鍵になっているように思われる。「夕顔の花」は、家の花であり、「口惜しの花の契り」「枝もなさけなげなめる花」で、諸注が指摘するように「源氏」を指したものである。細流抄の説を發展させた筆者の考えの如く、夕顔その人を指すとすべきである。そして、「夕顔の花」という散文的な表現のなかに、秘められた謙譲の意識を読みとることができる。夕顔の花が、俳諧の世界で、庶民の家に咲く花、賤しい花として固定化していく発想の原点を、夕顔の巻や枕草子に見ることが出来るが、そうした発想の根底には、やはり謙譲の意識が潜在しているのである。それに対して「花の夕顔」という歌語的表現の意味するものは何であったか。それは、和歌的な優美の世界を指向するものとして、謙譲の意識に対

応ずるものであった。係助詞「こそ」をうける推量の助動詞「め」及び「あらめ」の形には、願望の意を表わすものがある。この歌は、

近寄ってみてそれが誰かと見定めたいもの。夕暮れ時に、ほのかに見た美しいあなたを。

と解すべきものである。白露の光に、美しく映えていた夕顔を、和歌的な優美な世界に形象していく意図が、歌語の意識的な使用となっているのだ。女の控えめなヴェールを、さっとはぎとっていく男の戯れ、そんなうちつけのあだあだしさがこの歌の世界には見られる。「新釈」以下、諸注の試みてきた解釈はあまりにも固く、儒教的な敵しさをもち過ぎている。源氏の答歌は、それではあまりにも正面切って真正直にうけ過ぎていたのだ。女主人の「わび」ごとを、歌語の世界に形象化していくことによって、うち消し、相手側を高めながら、その言いかけをはぐらかしていく、この答歌の面白さは、そこにあつたと考えるべきである。

源氏は、一夜をたのしもうとして、河原の院とおぼしき荒れ果てた邸に夕顔を連れていく。この物語は、河海抄以下諸注が考勘しているように、三輪山神婚説話をよそうものであることは言を要しない。光源氏は、なお顔を隠しているが、これ程の仲になってから隔て心を置いているのも、と考えて顔をあらわそうとする。そして、「夕露にひもとく花は」の歌を詠みかける。

夕露にほだされて堅い蕾が紐を解き顔を見せる花は、道の通りすがりに逢った縁があつたのだ。――「評釈」  
408頁

玉上博士は、「ひもとく」が、「つぼみが花咲くことを、覆面の紐を解くこと、をかけた」とされ、この場面に「痴情艶態」の世界を見られる。この掛詞の意味を、

「花」に源氏自身の顔をたとえる。「紐とく」は、覆面をとって顔を見せること。――小学館古典文学全集 236

頁、と解するのは一面的で誤りなのである。男は自分の顔を花のように美しいと思う自信がある。だが、つぼみが花咲くように、女の心もうち解け、それにつれて自分の心も隔てを置かなくなっていく。「こうして二人がうち解けるようになったのも」という男の心を、掛詞の世界が形象化していく。源氏物語は、そんな風に読んでいくべきものなのである。「露の光やいかに」、岩波古典文学大系の山岸徳平氏は、

私の顔の光（美しさ）は、どうであるか美しいかね。「露が光を添えた顔」と、前の歌を受ける。（144頁）

とされる。しかし、「露の光」は、夕顔の花に光彩を添えて美しくひきたたせてくれた光源氏その人である。夕顔を面立たしくさせてくれた光。「どうだろう私の美しさは。こうして隔てなくうち解けていく真実の私の心、光源氏はすばらしいでしょう」覆面の紐を解く親しさをこめた懐しげな源氏の心、そういうなかで語られたことばなのである。流し目に見やっただ夕顔の歌、「光ありと見し夕がほの」この歌を家主人になぞらえて詠んでいる。湖月抄は、夕暮れの見そこないで、それよりもっと美しいと解するが、これは近代の注釈書が、逆説的表現であるとするのに従うべきである。「あれは間違いで、それほどでも」と甘えて、うち消す。それは「痴情艶態」の場というにふさわしいものであった。（175頁）

筆者のこの論に対しては、小山利彦氏（『国学院雑誌』昭和55年6月号所収）に書評があり、お教えをいただくことが多かった。「花の夕顔」が「夕顔の花」より歌語的とみるのは少し直線的過ぎるとのご指摘であるが、確かに歌語という言い方は適切でなかったように思う。

古今集巻第三、一三九の歌に、

さつき待つ花橘のかをかげば昔の人の袖のかぞする

とある。松尾聡博士は「花の咲いている橘。ただし平安時代の辞書の「類聚名義抄」では「橘」を「タチバナ」と

よむのにつづいて「盧橘」を「ハナタチバナ」を詠んでいるから、橘の一種の名とも見られる」（『古今集、新古今集評釈』清水書院 56頁）とされるが、片桐洋一氏が「花桜」（七三）と同じ言い方。橘の花のこと」（『古今和歌集』創英社 67頁）とあるのに従うべきである。この点については、竹岡正夫氏の「古今和歌集全評釈」（右文書院の「古注」）「釈」「評」にも特に取りあげるべきものはなく、「訳」に、「五月を待つ花橘の香を嗅ぐと昔のあの人の袖の香が、ホラにおう」（四九八頁）とある。片桐氏は、

うつせみの世にも似たるか花桜咲くに見しまにかつ散りにけり（七三の歌）

の注に「「桜花」となっている本もある。花が咲いている桜の意。桜の種類と解する説はとらない」とされる。前後の歌には「桜花」の歌が続き、「花桜」を歌語とは言えない。歌意から「花が咲いている桜」「花が咲いている橘」とすべきであろう。花をほめていう語なのである。若紫の巻に、

三月のつごもりなれば、京の花、さかりはみな過ぎにけり。山の桜はまださかりにて、入りもておはするままだ  
に（全集274頁）

とある。「京の花」の注に、玉葉、春下躬恒の歌「里はみな散り果てにしを足引の山の桜はまださかりなり」を引く。「山の桜」に対して「京の花」とするのは適切である。引歌はどうか、今からは分らなくなってしまうた別の歌かも知れないが、そこに歌語の存在を読みとることはできよう。そうした意識に支えられての臆測であった。だが、「夕顔の花」は、女の花であり「口惜しの花の契り」「枝もなさげなげなめる花」であった。それを「花の夕顔」と言い換える時、白露の光をうけて美しく咲く花、光源氏に所望されることによって面目をほどこした花という幻想が生まれる。女主人公の「わび」ごとを、うち消し、相手のうつくしさを言いながら、女の言いかけはぐらかしていくところにこの贈答歌の面白さがある。こう考えてくると、歌語という言い方には無理があるが、

旧稿の骨子を変える必要はないように思う。大養氏は、「もっと近寄って（親しくなって）確かめてみるがよい。私は決してそんな男ではない」と否定的に解されているが、「新釈」や「評釈」も一方に強く押しやると、そういう解釈に変わっていく微妙な世界をもつ。だが、これらの解釈に共通するのは、「花の夕顔」を源氏自身にとりなしているという点であり、それが定説となっている。女からの挨拶の歌を強いて好色にとりなし「花の夕顔」に源氏をよそえたものであろうか。女が「夕顔の花」と「わび」たのを「花の夕顔」と、うつくしいあなたですと言い換えたところに、この歌の贈答歌の面白さ、いのちがあったのではないか。この歌の前には、

さらば、その宮仕人なり。したり顔にももの馴れて言へるかなと、めざましかるべき際にやあらんと、思せど、さして聞こえかかれる心の憎からず、過ぐしがたきぞ、例の、この方には重からぬ御心なめるかし。御昼紙に、  
いたうあらぬさまに書きかへたまひて（「全集」 212頁）

とある。侍女達は、「心あてにそれかとぞ見る」と、光源氏であることを推測して歌を詠みかけたのである。だから、「まだ見ぬ御さまなりけれど、いとしく思ひあてられたまへる御側目を見すぐさでおどろかし」（同215頁）たのである。頭中將と見あやまったのでも、源氏以上の貴公子と思つたのでもない。帚木の巻冒頭に「光る源氏、名のみことごとしう、言ひ消たれたまふ咎多なるに」とあるのもここにつなげて読んでいかなければならない。「光源氏などと、名前だけはたいそうなものに世間では言っているが、じつはそうでもないと言われなさるような過失が多いと聞いているのだが」と解すべきで、読者はそれが光源氏であることを知っているのに、侍女達は確かに光源氏に違いないと推測して物語が語られていく。源氏は自分の筆跡と思われぬように書き紛らわす。こういうと、然らば、夕顔や侍女達の中に、源氏の筆跡を知っている者がいたのかと切り返す方があるようである。だが、こういう読み方は源氏物語を知らない人の読み方なのである。世間で噂されている高名な光源氏は、なぜの手紙の筆跡

もすばらしく、そのまま手本になるような筆づかいをしている。この世にあらぬ筆づかいによって源氏と知られる、物語は、こういう立場から話をすすめていくのである。「全集」の頭注に「源氏自身の筆跡と思われぬように。筆跡を隠すために、かたかなで歌を書く例も見える（狭衣一）」とある。既に指摘されているように、狭衣物語に「蓬門女」が「知らぬまのあやめはそれと見えずとも蓬が門は過ぎずもあらなん」（岩波古典文学大系 39頁）と詠みかけているのは、夕顔物語の書きかえであろう。狭衣物語には、「畳紙に、片仮名に」とある。堤中納言物語にも「虫めづる姫君」に差しあげた馬の頭の手紙が片仮名で書き紛わして書かれていたことが見えているが、狭衣物語の作者も、源氏の手紙をかたかなで書いたととつたのである。そればかりか、「蓬門女」は、中務官の姫君の乳母子「宰相」であるから、やはり狭衣物語の作者も、夕顔の巻の「心あてに」の歌を、代作歌として理解していたのではないかとする考え方が妥当のように思われる。

黒須氏（「班婕妤と夕顔」〔岩波書店「文学」57年2月号所収〕は、

惟光に紙燭召して、ありつる扇御覧ずれば、もて馴らしたる移り香、いとしみ深うなつかしくて、をかしうすさみ書きたり。

心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花

そこはかとなく書きまぎらはしたるも、あてはかにゆゑづきたれば、いと思ひのほかにかしうおぼえたまふ

（「全集」214頁）

とある例の文章の「書き紛らはしたる」の注釈が「筆跡を変えている」という「まことに奇妙なものが広く行われている」とされ、

歌の差出人がだれであるかも分らず、またその人間の日常の筆跡も知らぬ源氏が、どうして「をかしうすさみ書きたる」筆跡を「筆跡を変えている」などと判断できるのか。いかに初歩的作家といえども、そんなことを

いうはずはない。「心あてに……」の歌が唯一人の人（頭中將）を除いては理解できないように工夫したことを「書き紛らはした」といつているのである。源氏は雨夜の品定めにおける頭中將の告白を詳しく聞いているが故に、その謎めいた言葉を解く鍵を持ちあわせていたのであり、たまたま頭中將と同じ立場に立ち得たのである。（82頁）

と指摘されている。源氏物語をこのように読む読者がいるということは困ったことで、それが真摯であるだけに、えって悲劇である。黒須氏は注記で、「書き紛らはす」は「何やら意味がよくわからないように書く」という意で、参考までに用例を一つだけ挙げるとして、若菜卷下の例を引く。ただどういうわけか、氏は「昔かやうに」から「書きまぎらはししか」の部分しか引いてない。

さぶらふ人々のなかに、かの中納言の手に似たる手して書きたるか、とまで思し寄れど、言葉づかひきらきらと、紛るべきもあらぬ事どもあり。年を経て思ひわたりける事の、たまさかに本意かなひて、心やすからぬ筋を書きつくしたる言葉、いと見どころありてあはれなれど、いと斯くさやかに書くべしや、あたら人の、文をこそ思ひやりなく書きけれ、落ち散る事もこそと思ひしかば、昔かやうにこまやかなるべき折節にも、ことそぎつつこそ書きまぎらはししか、人の深き用意は難きわざなりけり、とかの人の心をさへ見おとし給ひつ。

（『新釈』92頁）

柏木から女三宮への後朝の手紙を手にした源氏の心情を描いた部分である。柏木以外の人とは考えられぬ点を一部始終あからさまに書いてあるが、逢っても逢わぬように書き紛らわすものなのにと、思慮なさを非難する。源氏は、手紙が人手に渡ることを恐れて、省略し曖昧に言いまわした——「ことそぎつつこそ書きまぎらはししか」というのである。だが、「書きまぎらはす」意が、内容をまぎらわしいように書くだけだと解するのは一方的である。

引用した本文の昌頭に、「宮の侍女達の中で、誰か柏木の筆蹟を真似て書いたのかとまで考えてみられるけれども」とあり、「書きまぎらはす」範囲は、そこまで及ぶものと考えるべきである。「国語大辞典」(小学館)は、「まぎらわしいように書く。誰の筆蹟かわからないように書く」として、「夕顔」と『夜の寝覚』の例をあげているが、「まぎらわしいように書く。事実と相違して書く。その内容や筆蹟などを誰のものかわからないように書く」と訂正すべきことを、若菜の巻下をはじめとする以下の用例は示しているのである。黒須氏が、頭中将以外に理解出来ないように工夫して、何やら意味がよくわからないように書いたと解されたのは牽強附会の説だとしなければならぬ。「書きまぎらはす」の語は、「新釈本」の索引によれば、夕顔の巻と若菜の巻下の用例の他に朝顔の巻にもある。

朝顔の巻に、

さかしらに書きまぎらはしつつ、おぼつかなき事も多かりけり。(『新釈』二275頁)

とあるのは草子地。語り手のことばで、源氏と朝顔との贈答歌が、事実と相違して気がかりなこと、書き誤りが多くなってしまったというのである。こざかしく事実と相違したことを書いてしまうの意である。「何やら意味がよくわからないように書く」という黒須氏の語意は、この用例には当てはまらない。次に夕顔の巻の例はどうか。手もとにある注釈書を引く。

とりとめもなく書き紛らわしてある具合なども(谷崎『新々訳』99頁)

散らし書きの字が(与謝野源氏「河出書房」全集)2 上巻38頁)

取りとめもなく、誰の筆ともわからぬ様に、ごまかして書いたにつけても(岩波大系「源氏」一 127頁)

無造作に、さらりと書いた筆蹟も(角川「評釈」一 354頁)「語釈」に、「まぎらはす」はごまかす。特色を出さない筆使い」「評」に、「気づらず、見せばを作らぬ筆の運び。よほどの者である。なれて、こんなことに大



して興味を持たないおとな、といった感じ。教養も素姓も生活も察せられる」とある。

なんとということもなく書きまぎらわしてあるのも（小学館『全集』一 213頁）

黒須氏の論にかみ合うのは岩波大系本。「谷崎源氏」と『全集』は筆蹟とも内容ともどうともとれる解釈だが、一応筆蹟の意に解すべきか。「与謝野源氏」「評釈」は、書法、筆蹟だが黒須氏の論とはかみ合わない。氏のいわれるようには解していないのである。また、氏の敬意を表すると言われる「円地源氏」の「濃く淡い墨つぎの様子」というのも、書法・筆蹟の類に属する。こういう実態のなかで一方的にとらわれて論じているのは独断的過ぎるという諒をまぬがれないように思う。

夕顔の巻に「かきまきはしたるも」とある青表紙本の本文は、河内本系の七毫源氏に「かきまきはしたりても」、同系の高松官家本、尾州家本、大島本、鳳来寺本、別本の陽明家本には「かきまきはしたるても」とある。青表紙本を除く本文がことごとく「手」の異文を有することは注意しなければならない。既に指摘した語意に従ってこれを書き並べてみる。

まぎらわしいように書いた手。

事実と相違して書いた手。

その内容や筆蹟などを誰のものかわからないように書いた手。

こう書き並べてみると、書法・筆蹟・文字などの意に解釈している「与謝野源氏」「円地源氏」「玉上源氏」などの解釈に従うべきものようである。「をかしうすさみ書きたり」「あてはかにゆゑづきたれば」と続く一連の文脈は、河内本や別本の本文に従って青表紙本の本文をも読んでいくことが自然であることを示している。「頭中將を除いては理解できないように工夫したもの」という黒須氏の考えは、きわめて不自然で奇妙であり、とらわ

れた解釈なのである。だが、「与謝野源氏」「円地源氏」「玉上源氏」などの間には、微妙な意味のゆれがある。それは、この歌が夕顔の歌だとする前提にとらわれてきたための苦心の解釈であったように思う。物語の読者は、この語を通して、実はこの歌が、夕顔になりかわって、女房達が読んだ代作歌であったことを既に読んでいたのではないか。夕顔の筆蹟を知らない源氏が、どうしてそんな判断ができるのか、初歩的作家でもそんなことを言うはずがない、という風に読んでいくのは、それはそれとして意味のあることには違いないが、いかがなものであろう。登場人物がわからないことを読者の側がわかっているように書くのも、読者がわかっていることを登場人物がわかっているように、作者の側から書いていくのも、読者へのサービスという点からみれば同じことになる。一つの理詰め物語が読めるのだと考えていたとしたら、それほど悲劇なことにはないように思う。現代の物語や小説を読んでいるのではなく、作者と読者とが交錯する世界をもっていた当時の物語の享受のありようを考える必要がある。先に書き並べてみた意味と、これまでに指摘してきた物語の状況からすれば、「そこはかとなく書きまぎらはし」たのは、夕顔にかわって侍女達が詠みかけた代作歌であることを、源氏にははっきりとはわからないのに、読者にはわかるように書いていると考えた方が、黒須氏の奇妙な疑問に答える意味から、かえって適切な解釈になるのかも知れない。それは、あくまでも逆説的な意味においてはあがあるが。

『全集』頭注は、「こそ……め（「む」の已然形）は、贈答歌や手紙や会話などの場合勧誘の意を表わす」とし、「近くに寄って、まちがいなく誰それかと確かめてみたらどうですか、夕暮れ時にぼんやりとごらんになった美しい夕顔を」と現代語訳する。だが頭注の文法的説明には問題がある。『日本文法大辞典』（明治書院）に、

平安時代における「こそ……め」の用法で注意されるのは、会話文ではこれが勧誘の意味に用いられたものが多く、和歌においては推量・意志の意味に用いられたものが多いことである。（824頁）

と吉田金彦氏が説かれているのに従うべきである。『国歌大観』歌集篇の源氏物語の歌七九三首について、「こそ」の用いられている歌を調査した筆者の手控えによれば、五六首で、うち「こそ……め」の形をとる歌を『国歌大観』の番号で示すと次の六首である。

七八七・一〇二八・一〇六三・一〇九七・一二二四・一三三三

これらの歌の用例について検討を加える。

〔七八七〕（夕顔『全集』(1) 215頁）

寄りてこそそれかとも見めたそがれにほのぼの見つる花の夕顔

〔一〇二八〕（蓬生『全集』(2) 338頁）

たづねてもわれこそとはめ道もなく深きよもぎのものとこのころを

源氏の独詠。「たとい探り尋ねても私こそは訪問しよう」の意で「意志」。

〔一〇六三〕（薄雲『全集』(2) 429頁）

舟とむるをちかた人のなくはこそあすかへりこむ夫と待ちみめ

紫の上の歌。「舟」は源氏。「をちかた人」は明石の御方。「全集」は、「舟——あなたをとめる」「をちかた」の人がいらっしやらないのだったら、「明日帰り来む」とおっしゃるように、明日帰ってこられる夫と申ってお待ちしてお逢いできるでしようけれども」と推量の意に解する。だが、「大系」(岩波)に、「待ってみましよう」(二 224頁)、「評釈」(玉上)に、「あなたをお引きとめするあちらのかたがいらっしやらないなら、明日お帰りのあなたとお待ちもいたしましう」(第四卷 170頁)とあるように意志に解すべきである。

〔一〇九七〕（少女『全集』(3) 76頁）

風に散る紅葉はかるし春のいろを岩ねの松にかけてこそ見ぬ

紫の上の歌。中宮と詠み合った春秋の優劣論。『全集』は「風に散る紅葉などは軽々しいものに過ぎません。春の緑の色を永遠に変わらぬ岩根の松に託して見ていただきたいと思ひます」と解する。「大系」は「何時も変らず見はやましよう」（二 325頁）、「評釈」は「いつもみごとに春の色を見たいと思ひます」（第四卷 469頁）と解する。意志で、願望的な意が加わっていると解すべきである。

〔一二三四〕（若菜上『全集』（4）58頁）

命こそ絶ゆとも絶えめさだめなき世のつねならぬなかのちぎりを

源氏の歌。『全集』は「自分の愛をなんとかして相手に信じさせようとする源氏の苦しい気持がうかがえる」。「命」というもの、これは絶えるときもあろう。しかし、この無常の人の世とはちがう二人の間の縁なのです」とする。諸注も強調逆接法で推量と解する。

〔一三三三〕（幻『全集』（4）524頁）

さもこそはよるべの水に水草るめけふのかざしよ名さへ忘るる

中将の歌。「古注釈以来諸説ある」と『全集』にある通りだが、「水が古くなって、神が憑らなくなることで、源氏が中将の君にすでに久しい間逢わないでいることをいう」と解するのに従うべきである。『大系』に「私への情愛も無くなって久しくなり、私を見捨てなされ（神のよるべの水もなくなって、水草が生えるのである）」（四 208頁）、「評釈」に「お言葉どおり、よるべの水に水草が生えましよう」（第九卷 153頁）とある。水が「古くなった」のか「なくなった」のか。「評釈」に「水がくさりにごって水草が生えたことで、源氏の愛情がなくなったことになたとえた」（154頁）とするのに従う。諸注のごとく「推量」と解すべきである。

これによれば、意志二例、意志で願望的な意味を伴うもの一例、推量二例で、問題となる夕顔の巻の例を除くと勧誘の意味で用いられているものはない。和歌は日常会話性という一面をもつものではあるが、『全集』のごとく解すべきものであろうか。吉田氏の指摘されるどころと、期せずして一致しているところに注意すべきである。『新釈』（吉沢）『評釈』『大系』は「花の夕顔」を源氏によそえ「こそ……め」を推量に解している。だが既に指摘したごとく、「花の夕顔」と言い換えているなかに、「夕顔の花」が、白露の光によって光彩を添え、源氏に所望されたことよって面目をほどこし、うつくしく、面立たしい「花咲く夕顔」となったのである。それに、源氏が詠みかけていると解さなければならぬのであった。この歌は、旧稿で考えたごとく、

近寄ってみてそれが誰かと見定めたいもの。夕暮れ時に、ほのかに見た美しいあなたを。

と、意志で願望を伴ったものと解すべきだ。源氏の歌はうちつけで、あだっばい。一応女をたたえ、もちあげているが、その程度の女だと見限っていたのである。女をもちあげながら、その言いかけをはぐらかしていく、この歌の面白さは、やはりそこにあつたのである。

「心あてに」、この歌の解釈をめぐる黒須氏の指摘については、頭中将を介在させる部分を除くと従うべき点が多い。そのことについては、いろいろな視点から述べてきたのでくり返さない。ただ、「班婕妤と夕顔」で、「もてならしたる移り香いとしみ深うなつかし」き扇が、『長恨歌』の「唯将旧物表深情 鈿合金釵寄将去」によるとして、「旧」き「物」として、頭中将との愛の生活を象徴する小道具として、作者は作っている」というのは如何なものであろうか。強いてそのように解していくならば、光源氏はまだそれに気づいてはいないが、読者には、それが頭中将の思い人であった夕顔であることをそれとなくわからせるように書いていると考えるべきで、そう解さないと物語の大筋から大きく離れていってしまう。そして奇妙な想像の糸をたぐり寄せていくことになる。稲賀敬三氏

の「夕顔」(字燈社 別冊国文学「源氏物語心携Ⅱ」)はこの点について示唆するところが多い。この歌が、『文華秀麗集』の勇文継の「春日左將軍臨況」をふまえているという黒須氏の指摘も、直接それをふまえたものかどうかは別として、その状況にはかなり類似するものがある。氏が指摘されるごとく、

檐下開花光艶燦 檐下の開花光艶

籬前修竹影檀欒 籬前の修竹影檀欒

何図一損台門貴 何ぞ図らん一たび台門の貴きを損し

今日高車過下官 今日高車下官を過ぎらんとは

というこの詩の後半第五句から第八句は、夕顔の巻の物語と、語句の対応がかなり意図的になされているように見える。この詩の場面に近い形で物語が設定されていることは、氏の指摘されるごとくである。

「白露」の御光臨を得て、「開花(ここでは夕顔の花。女の卑下意識がある)」が「光輝く」——というように、女はわずかの文字を用いてうたうのである。となれば、この歌の言外には何があるか。

「何図一損台門貴 今日高車過下官」の終りの二句がなければならぬ。この夕顔の花咲くようなむさくるしいところまで、「台門の貴きを損し」高車(高貴なる人の乗った車) がおおいでになるなど思いがけなかった(何図)という驚きと喜びとが、言外に響いているに相違ない(岩波「文学」昭和57年2月号 81頁)。

時の高官藤原冬嗣が、勇山文継の私邸を訪れた時の感激を詠んだこの詩をふまえて、光源氏の光臨と閑花の所望に対する面目に言い換えたものとすれば、この歌を「そこはかとなく書きまぎらはしたるも、あてはかにゆゑつきたれば、いと思ひのほかにかしうおぼえたまふ」という傍点部の光源氏の心情も理解されるし、待女の右近の詞を通して夕顔を三位中将の娘とする夕顔の巻の記述の意味も理解できるようにも思う。

寄りてこそそれかとも見めたそがれにほのぼの見つる花の夕顔

この歌の解釈をめぐっては既にいろいろと述べてきた。「河海抄」に、

此哥五文字おりてこそとかけ本ありさてこそ花を折にも又車よりおるゝ心にもかよいたれといふ義もある歟  
然而古本に皆よりてこそとありほのほのみつると(あるも)ちかつきてこそそれともみゆれといふ也 (角川書店

『紫明抄 河海抄』240頁)

とあるが、「岷江入楚」もこれを引く。そして、「箋聞近くよりてこそ何共見わかんすれよそめはかりにて夕顔と定めたるは不審也といふ也」(桜楓社 卷一 252頁)とする。「紫明抄」にも、

此哥、おりてこそといふ本あり、それこそよけれ、花をおるにもかよひ、車よりおりたる心ちもかよひて、と  
中人侍れとも、ほのほの見つるとはてたるに、ちかつきよりてこそといふは、きよよかるへくや(角川書店 『

紫明抄 河海抄』 33頁)

とある。黒須氏は、「岷江入楚」を引かれるが、「紫明抄」「河海抄」に見える注記であった。氏が、「(女の  
方へ) 帰る」のも男なら、「(車から) 降る」「(花を) 折る」のも男なのである」(「班婕妤と夕顔」)とされるの  
は正しい。そして、「さぞかし花のように美しいであろう、まだ見ぬあなたの顔を(見ようものを)」というよう  
に、「夕顔の花」と来た歌に対して「花の夕顔」と、作者は源氏をして答えさせているのだと思われる」(「白き扇  
のいたうがしたる」)と指摘されているのにも、従うべきである。このことについては既に拙著「源氏物語とその  
周辺」を引いて述べてきたのでくり返さない。「河海抄」は「然而古本に皆よりてこそとあり」とあるが、青表紙  
本、河内本は、「よりてこそ」、別本の陽明家が、「おりてこそ」となっている。「古注」は古本の本文を尊重し  
直接的であけすけでない婉曲の表現を妥当なものとしたのである。だが、夕顔の巻の、

心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花

寄りてこそそれかとも見めたそがれにはほのぼの見つる花の夕顔

夕露に紐とく花は玉ぼこのたよりに見えしえにこそありけり

光ありと見し夕顔の上露はたそがれ時の空目なりけり

など一連の贈答歌を引いて詠んだのは、「六百番歌合」の「十三番 夕顔 左女房 右勝 中宮権大夫」の歌であった。続国歌大観本によってそれを示す。

片山の垣根の日影ほの見えて露にぞうつる花の夕顔

折りてこそ見るべかりけれ夕露に紐とく花の光ありとは

「六百番歌合」は、建久四年、藤原良経の家で行われた歌合で、「千五百番歌合」に次ぐ大規模なもの、判者は藤原俊成である。「折りてこそ」の歌を詠んだのは右方の筆頭歌人「従三位行左近衛権中将兼中宮権大夫藤原朝臣家房」である。伊井春樹氏（桜楓社『源氏物語注釈史の研究』）は、「折りてこそ」の歌を引かれ、別本の異文を示して「ほとんど源氏物語の歌の語句を繋ぎ合わせてできている」歌に過ぎず、「源氏物語的世界への賛美以外にもでもない」（104頁）と指摘されている。家房の歌が、現存本としては別本の陽明家本の本文に近いものであることは否定すべくもない。家房は、藤原北家道長流の五撰家の祖、忠通の息、基房（松殿）の子で、当代を代表する歌人として、権威ある源氏物語の証本を見ることができたと推定されるが、それが『紫明抄』や『河海抄』が退けた「折りてこそ」の本文を有していた事実は注意されなければならないことである。寺本直彦氏（『源氏物語受容史論考』風間書房）は、

平安時代ないし鎌倉初期には、源氏物語大成の校異に示されている以外に多くの異本があり、顕昭ないし清輔



らの用いた本は、青表紙本、河内本ないしいわゆる別本とも異なる異本であつたらしいこと、しかも袖中抄所引須磨の巻の一節は河内本的性格を有していて、種々疑問を投げかけること、等の事実が知られるかと思う（686頁）

と指摘され、「六百番歌合や千五百番歌合を経て、新古今時代に頂点に達したような、源氏物語の詞・心を踏まえたいわゆる本歌取の歌は、いわば歌壇における源氏受容の正統ともいうべく、和歌史的にみれば最も意義あるものと認められる」（687頁）といわれるが、そうした受容史のなかに、本文流伝の相をとらえていくこともできよう。

『河海抄』は『万葉集』から「花容無止」を引く。黒須氏は、「長恨歌」の「雲鬢花顔金步搖」「雪膚花貌参差是」を響かせて「花の夕顔」としたのでとされる。そして、「車からおりて（よつて）さぞ花のようなお美しいであらうお顔を見たいものだ。誰そ彼れどきにほのぼのとしか見なかつた顔を」と解されている。既に指摘したごとく、古今和歌集に「花橘」「花桜」があり、源氏物語の若紫の巻にも、聖が、源氏をたたえて、

奥山の松のとぼそをまれにあげてまだ見ぬ花のかほを見るかな（『全集』(1) 295頁）

と詠んでいるのを見ると、本来漢語的な表現ではあつたらうが、そして、「長恨歌」を意識に置いていると考えるもよいが、そうした和歌の伝統にも深く支えられていた表現であつたと考えざるを得ない。

4

小山利彦氏（『国学院雑誌』55年6月号所収）の書評は、お教えをいただくことの多い論評であるが、その中で、

また推論過程で夕顔を「口惜しの花の契り」と表現する意識と枕草子（大系106頁）の夕顔に対する意識との共通

性を指摘しているが、枕の方は「花のかたちも朝顔に似て」とか、花ではなく「実のありさまこそ、いとくちをしけれ」と表現しているはずである。

と批判された。もっともなご指摘であるが、少し考えているところもあるので、つけ加えさせていただく。田中重太郎博士の「全注釈」(角川書店)は能因本によるもので、校異欄に三巻本、前田本、堺本の本文をにかけてある。七十段「草の花は」の夕顔についての部分を引用する。

夕顔は、朝顔に似ていひつづける、をかしけれ。などで、さはた生ひ出でけむ。ぬかづきなどいふ物のやうにだにあれかし。されど、なほ夕顔といふばかりはをかし。

〔三巻本〕

ゆふがほは、花のかたちもあさがほに似て、いひつづけるに、いとをかしかりぬべき花の姿に、みのありさまこそ、いとくちをしけれ。などさはたおひ出でけむ。ぬかづきなどいふもののやうにだにあれかし。されど、なほゆふがほといふ名ばかりはをかし。

〔前田本〕

ゆふがほは、花のかたちもあさがほに似て、いひつづけたらむに、をかしかりぬべき名を、花のすがた、にくきみのありさまこそ、いとくちをしけれ。などでさはたおひ出でけむ。ぬかづきといふもののやうにだにあれかし。されど、なほゆふがほといふばかりをかし。

〔堺本〕

夕がほの花のさまもあさがほに似て、いひつづけたるもをかしかりぬべきを、葉のすがたぞにくきや。みのさまこそ、いとくちをしけれ。などかさはおひいでけむ。ぬかづきなどいふもののやうにだにあれかし。されど、

なほ夕がほといふ名のつきそむ、いとをかし。

枕草子の本文は雑纂本と類纂本の二系統に分類され、伝能因所持本、三巻本が前者に、堺本、前田本が後者に属する。萩谷朴氏（『枕草子』新潮日本古典集成 上巻）は、

「枕草子」は、長徳二年（九九六）秋に筆を執り始めた狭本「枕草子」の頃から、寛弘年間、広本「枕草子」成立の時期に至るまで、類纂形態から雑纂形態への移行を加速しつつ、なおかつ、その間において遂次巷間に流布しつつあったものであるとし、また、その広本にしたところが、時の権力者道長の目に触れることを願った本と、修子内親王等、皇后の遺児に読まれることを期待した本と、その本文内容にも自ずと差異があつて、おそらくその伝本は、多元的な原本から出発したものと考えられる。したがつて、原作者原手記の唯一の祖本を、目指しての本文批判や原本再建の作業は、不可能なことかと思われる。（397頁）

とされ、

個々の文章の一語一句を連繋し、個々の章段を構成し、各章段を連環せしめて、この作品の血液となつて充満し、神経となつて張りめぐらされているものが、作者清少納言の自由な連想作用なのであるから、やはり最終的な完結本としての広本「枕草子」は、本来、雑纂形態をとつて書かれたものであり、その連想の糸筋を、最も明瞭に読み取ることのできる三巻本系統の第一類本が、より純粹な本文を保有しているものであるという結論に到達せざるを得ないのである。（404頁）

と三巻本優位の立場に立たれる。岸上慎二氏（『枕草子 紫式部日記』 岩波大系）も、

概して三巻本は項目が少ないのがその性格で、例えばA的であり、能因本はAの次にB的なものの増補が行われている。作者みずからの増補とすると、この系統が最終的な決定的の本文をもつことになる。しかし、もし

これが他人の附加であると、Aの本文である三巻本が本文評価において優位に立つべきである。今日この結論はえられていない。しかし今日の本文状況としては、三巻本の伝来の方がより研究的に行われて来ているために損傷の度合が少く、やや優位にあると考えてよいようである。(22頁)

とされる。根来司氏(『源氏物語枕草子の国語学的研究』(有精堂))も萩谷氏の解説を引かれ、三巻本は能因本のように文章表記が濁っていないことを指摘されるなど、三巻本善本説が有力であるが、両本の優劣を論ずべきでないとする立場もあり、能因本の伝来を重視する立場もある。両系統の評価については、学界の見解は一致していないし、筆者にはそれを論ずる用意もない。だが、両本の優劣を問題として持ちこむべきだとする立場から、三巻本の口語的要素、能因本の雅文的、文章語的要素を指摘し、三巻本→能因本の過程は考えられるが、逆はあり得ないとして、三巻本の原形的性格を主張する立場(石田穰二氏『枕草子』別冊国文学 54年11月「日本古典文学研究必携」)にも疑問を感じる。筆者が不思議に思うのは、定家の校訂にかかわる三巻本とそれにかかわらぬ能因本、同じく定家の校訂にかかわる青表紙本とそれにかかわらぬ別本の一部という対応がその本文の性格の上で驚くほど相似性がありはしないかという、疑問であった。「それにかかわらぬ別本」という言い方には問題があり、誤解をまねくおそれがあるが、このことについては別に論じなければならないので、しばらくそのままにしておく。だが、筆者には、この幼稚で素朴とも思われる疑問が、三巻本や青表紙本の性格を最終的に決定していく重大な鍵をもつもののように思われるのである。

枕草子の本文には、既に指摘されているごとく、これが同一作者の手になる作品であろうかと思われるほど異なるものがある。能因本と三巻本とは、文体的には違う作者の手になる作品かと考えられる程度の違いが見られる。だが、「草の花は」の段は、それほど大きな相違はない。ただ、意味の上で対立する大きな点は、三巻本が花の姿

に趣があるのに対して、能因本、前田本はその趣を認めないことであり、堺本は「花の姿」が、「葉のすがた」と独自異文になっているが、趣を認めない点については、能因本、前田本に共通する。従来、枕草子の本文系統は二系統四部（四系統）に分類されてきたが、前田本は能因本と堺本とを底本として集成された後人による改修本であり、堺本は原作の傍をどめぬほどの改竄本であるとされ、能因本と三巻本の対立に価値評価の問題がしばらくしてきたかの観がある。だが、個々の章段について具体的に検討していくと、必ずしもそうした結論に貫かれていたとは言い切れない面もあるように思われる。そのことについて松尾聡博士（『枕草子』小学館『古典文学全集』）が、率直に言って、各章段について具体的に一つ一つ彼此対照しつつ本文を検討してゆくと、清少納言自身で初稿のことばを、こう改め、この言いまわしをこう変えたとは、その推敲に当たっての心理的推移を付度するのにも、どうも素直には納得しかねるような箇所に出会うことが必ずしも稀ではなく、いずれが原作に近いかの論は別として、ともかく両本共に原作者の作とする説はやや妥協にすぎない感じがしないではない。むしろ今後きびしい吟味が必要であろうか。さらには、また林和比古氏のように、能因本の方が素朴で、三巻本には知的な整理作業が多く加わっているとみる学者もおられ、楠道隆氏のように、能因本と三巻本とは、清少納言が執筆した随筆断片類をそれぞれ別人が編集して成立させたもので、従って一方を正とし、他方を否とするというような優劣論で論ずべきではないと主張される学者もおられるので、三巻本・能因本の先後、優劣評定を後日の研究に待つとすべきが、あるいは隠当かと思われる。（41頁）

と指摘されているのに、従うべきだと考える。いま『全集』本七〇段「草の花は」の夕顔の部分、先に引用した田中博士の『全注釈』により能因本を底本として校異を示してみる。

夕顔は、朝顔に似ていひつづけたる、をかしかりぬべき花の姿にて、にくし、実のありさまこそいとくちをし

けれ。などで、さはた生ひ出でけむ。ぬかづきなどいふ物のやうにだにあれかし。されど、なほ夕顔といふばかりはをかし。

①夕顔は——ゆふがほは、花のかたちも 三・前・夕かほの花のさまも 堺

②いひつづけたる——いひつづけたるに 三・いひつづけたらむに 前・いひつづけたるも 堺

③をかしかりぬべき——いとをかしかりぬべき 三・をかりかりぬべき名を 前・をかりかりぬべきを 堺

④花の姿にて、にくし——花の姿に 三・花のすがたにくき 前・葉のすかたぞにくきや・堺

⑤実のありさま——みのさまこそ 堺・

⑥などで、さはた生ひ出でけむ——などさはたおひ出でけむ 三・などかさはおひいでけむ・堺

⑦ぬかづきなどいふ物のやうにだにあれかし——ぬかづきといふもののやうにだにあれかし 前・

⑧夕顔といふばかりはをかし——ゆふがほといふ名ばかりはをかし 三・ゆふがほといふばかりをかし 前・

夕がほといふ名のつきそめけむ、いとをかし 堺・

左の校異に従えば、①、②、③によって、三巻本の本文は堺本と深くかわるところがあるといわなければならない。片々たる異文の調査から無謀な推測を加えようとは思わないが両本の関係は、直接的な関係であったと考べきではなく、複雑な本文の混雑の過程を想定すべきであり、三巻本と能因本との間にも、そうした混雑の過程を考えなければならない。だが、夕顔の花の記述において、花の姿に趣を見るか、見ないかという三巻本とその他の諸本の本文の異同は、もっと注意しなければならない問題をもっているように思う。同じ能因本を底本とした「全注釈」と「全集」の現代語訳を引用してみよう。

夕顔は、朝顔に似て、(朝顔・夕顔と)並べて言い続けておもしろそうな花の姿であって(それでいて) みっと

もなく（『全注釈』499頁）

夕顔は、朝顔に似て、朝顔と並べて言いつづけているのは、おもしろいのが当然な花の姿であって、それにもかかわらずにくらしくて（『全集』156頁）

田中博士と永井和子氏の現代語訳で私が納得できないのは、「朝顔と並べて言い続けると、夕顔の花の姿がおもしろい」とされる点である。永井氏の現代語訳は「実のかっこうこそ、夕顔本来のよさを妨げてひどく遺憾である」とそれを極限的に表現されており、「にくく」の頭注に「文のつづきが疑わしい」とされるが、実は夕顔の花の姿に趣を認めようとする文脈のねじ曲げから来ているといえば、言い過ぎになろうか。「似て」の「て」は原因接続、「いひつづけたる」の「たる」は連体形の中止法で、準体的に用いられ、「に」または「は」を補って訳す。「にて」の「に」は断定の助動詞、「て」は逆接に解すべき文脈である。

現代語訳を試みる。

夕顔は朝顔の花に似ているので、朝顔と並べて言い続ける時は、 $\wedge$ 言い続けると $\vee$   
確かに趣のありそうな花の姿ではあるが、

この現代語訳は、夕顔の花の姿に趣を認めない立場に立っている。前田本や堺本の本文を意識に置いて能因本の本文を解するならば、私の試みた現代語訳に解さざるを得ない。三巻本以外の諸本の本文は、夕顔の花をそうした美意識のなかにとらえていたと考えなければならぬのである。三巻本によられる萩谷朴氏（『枕草子』上 新潮古典集成）は、傍注に「二つ並べていうととても趣が感じられそうな花の形だのに」、「（ぶざまな）実の恰好ときたら」（143頁）と解されている。「実のありさま」については問題はない。「されど」以下の諸本の異同も解釈の上ではなんら問題とすべき点はない。「全集」は、「けれど、やはり夕顔という名だけはおもしろい」と解されて

いる。ところで「されどなほ」「ばかり」という表現には、かなり屈折し、強調された意識を読みとらなければならぬのではないだろうか。三巻本にも能因本にも便利な索引が作られている時代に、あい変らず読んでいく間に書きとめた手控えを利用するという、非能率さで、不正確な調査になっているかも知れないが、『全集』本（能因本）では「されど」の用例は三八例で、「されどなほ」の用例はこれを含めて三例ある。467頁の跋文の用例は本文に問題があって文意が通じないので除外する。他の一例は一八四段、338頁にある。

女こそなほわろけれ。内わたりに、御乳母は、内侍のすけ、三位などになりぬれば、重々し。されど、さりとほど過ぎ、何ばかりの事はある。またおほくやはある。受領の北の方にてくだるこそ、よろしき人のさいはひには思ひてあなめれ。ただ人の上達部のむすめにて后になりたまふこそめでたけれ。されど、なほ男は、わが身のなり出づることめでたく、うちあふぎたるけしきよ。

「女こそなほわろけれ」に対して「されど、なほ男は」というのである。「されどなほ」は「しかしやはり」「しかしなんととっても」の意。夕顔の段も文脈の上から「夕顔は……」の最後から「……あれかし」までをうけて逆接に続くと考えるべきであるから、「二つ並べていうととても趣が感じられそうな花の形だのに」ではなく、夕顔の花の形に趣を認めない文脈の方が構文的な続きからは自然だとすべきである。吉沢義則博士の『新釈』本索引によれば、「されど」の用例は源氏物語に八〇例見える。そのうち、「されどなほ」の用例は二例で、若菜下巻の42頁7行、82頁3行に用例があるだけである。

世の末なればにや、いづこのそのかみの片端にかはあらむ。されどなほかの鬼神の耳とどめ、かたぶきそめにけるものなればにや、なまなまにまねびて、思ひかなはぬたぐひありけるのち、これを弾く人よからずとかいふ難をつけて、うるさきままに、今はさをさ伝ふる人なしとか（42頁）



五月などは、ましてはればれしからぬ空の気色に、えさわやぎ給はねど、ありしよりはすこしよろしきさまざま。されど猶絶えず悩み渡り給ふ（82頁）

前の例は源氏が夕霧と琴談議をしている部分。後の例は紫上の病状を語る部分である。「しかしながらなんといつても」、「しかしやはり依然として」と解すべきもので、屈折し、強調された意識による逆接であることには変りがない。黒須氏が、夕顔を詠んだ歌は、源氏物語以前あるいは当時の歌には一首もなく、それどころか、ほとんど夕顔の巻の歌をふまえたものばかりで、「私はずいぶん捜したが、少くとも人の美を表わす「夕顔」をついに見ることができなかつた」といわれるのは正しい。そして枕草子「夕顔は」の本文を引かれ「されど夕顔といふ名ばかりはをかし」と傍点を打たれ「清少納言は人のとりあげない或は価値なきものと思われているものの価値を発見することに自負を持っていたとさえ思われる女性である」と注記されている。黒須氏が、前の本文とのかかわりはどう考えられていたか、「なほ」がない本文によられたのはどうしてか、それらのことは知るよしもないが、傍点を加えられているところから推測すると、「夕顔という名前だけは面白い」という点に新しい美意識の発見を読みとられたものであろう。清少納言は、夕顔の花の姿にも、実のありさまにも趣を認めてはいなかつた。だが、「花のかたちも朝顔に似て、いひつづけたる」という点、ことばの連想を通して「夕顔といふ名」の面白さを、新しい美意識としてとらえようとしたのである。三巻本の本文に、後代の美意識、文芸意識による一つの合理化、文芸化を読みとることは唐突で行き過ぎだという謗をまぬがれぬかも知れないが、定家の校訂にかかわる青表紙本と三巻本とがその間に一見逆行する本文の様相を示しながらも、そこに共通する一つの性格をもっていることは、定家の古今集享受が、実作とのかかわりを重んじた鑑賞的傾向にあったことを実証された片桐洋一氏（「古今集と定家」国文学昭和56年12月号）の論とともに、定家の校訂本の性格にかかわる重要な問題を示唆するものであろう。それはと

ともかくとして枕草子を三巻本にとられることなくこのように解してくると、夕顔を「口惜しの花の契り」と表現する意識と、枕草子の夕顔に対する意識との間には、共通性があると考えなければならぬはずである。源氏物語の作者は、それを物語として展開させてみせたところに、一つの面白さをつくり出していったようにも思われる。

5

秋山虔氏は、

私さきき作中人物の行為を必然化する文脈や主題の把握は単純一筋縄にはいくものでないと述べたが、そのことは物語の世界の進行が、層々たる作品以前の要素の錯綜によって分厚く支えられ、梓づけられ、方向づけられながら、同時にどのような一定の独自の論理構造において統一されているか、その究明が大事な課題として我々の前に立ちはだかっているということにはかならない（学燈社 「源氏物語必携」Ⅱ「源氏物語―作品と作中人物」）

と指摘され、「文脈から関係記事を抽出して作中人物の人生を再構成してみたり、文脈を無視して我々が持ち合わせる課題を彼につきつけてみたりすることも、そうした読者が存在することを否定できぬとしても、それは作品研究としての作中人物論とは無縁だ」といわれるのは、当を得た発言であるが、源氏物語の本文研究と享受の現況からすれば、論としては説得力をもって成り立ちはずるが、解決をはからなければならぬ前提となるべき問題が多過ぎるように思う。そして、知らず知らずに、そういう過失をおかしながら、それに気づかぬ論の類もまた多いように思われる。

「方違へにわたりたる人の」の詞書ではじまる家集の四、六番の歌については、長い引用をまじえながら、既にいろいろと書いてきた。だが、その返歌の主が宣孝であったかどうかについては強いてふれなかった。再論を加えたい部分を残していたからである。伊藤博氏は、「あの華麗多彩な恋を織り成した源氏物語の世界とはうらはらに、恋の歌は寥々たるものであり、そのうえ情感に乏しい、これは他の女流の私家集を比べても目に立つところである」とされ、家集四・五の歌について、

歌意まことに解しがたいが、方違えにやって来た男との間に、「なまおぼおぼしきこと」があり、その出来事をめぐって翌朝交わされたやりとりであることだけは確実で、石川徹氏は未婚時代方違えにかこつけて、泊った男がかの女に「変な事」をしかけ、かの女がその真意をはかりかねてただしたものとされる。方違えということからあの空蟬の巻の夏の夜の情事と結びつきたい誘惑にもかられるし、全く無縁でもないのだろうが、後朝の歌というには女の方から詠みかけている点が不審であり、すくなくもこの贈答歌の段階では男の返し歌からみて、相手の字も見分けられぬ程度の仲の「あるかなきか」の出来事ではなかったものとするのが妥当だろう。その後この男との間柄が「激しい恋」に展開したか否かは全く不明であるし、この男が後の夫宣孝でなという保証もない（『源氏物語の原点』明治書院33頁）

と指摘されている。南波浩氏（『紫式部集全評釈』笠間書院）は、「この贈答歌は、式部と宣孝との「出あい」を語るもの」（48頁）とされる。家集が、幼年時代の「友」に与えた歌ではじまり、晩年の「友」の死に対する弔歌で終り、首尾一貫し、整っているのは、作者が集めたものだからと考えられてきた。また、「なりけり」の形で前の歌には左注的、後の歌には詞書になっているのは、自己の体験から書かれたと考えるのが自然で古本や定家本の祖本は、紫式部の自撰であるといわれてきた。そして、前篇では内容上同類のものが、年代順に集められ、後篇では宮仕え以後の歌を中心

に、結婚前後の歌が三箇所 scattered してあり、年代順とはいえないが、同類の中では年代順になっているとされている。家集が晩年の自撰で、生涯の歌集を編むにあたって娘時代の歌から始め、ほぼ年代順であるという、岡博士以来の定説は、今度、家集を山本氏の校訂に成る『集成』本を何回もくり返して読む機会を持って疑問に思うことが多かった。

### 家集一の歌

めぐりあひて見しやそれともわかぬまに雲がくれにしよはの月かな

は、久方ぶりで見えながら、心を尽して語ることも出来ずに別れた幼友達との別れの情を詠んだ歌で、山本利達氏は、見違えるような娘になった友達の変化は、自らの成人を自覚させるもので、そのことが、この歌を家集の巻頭に置くことになったのだと指摘されている。「自らの成人を自覚」するところに家集の原点を見られる山本氏の立場も、それはそれとして、一つの意味を持つてはいる。だが筆者は、第二の歌に、

その人、とほき所へいくなりけり。秋の果つる日きて、あかつきに虫の声あはれなり

鳴きよわるまがきの虫もとめがたき秋の別れやかなしかるらむ

と続いていくことの意味を重視したい。「いくなりけり」と、幼な友達は、都から遠く離れた親の任地へ行くのであるよ。と詠嘆し、鳴きよわるまがきの虫の音に、離別を惜しみ悲しみ泣くわが姿を暗示する。この歌は、少女の感傷、惜別へのロマンを詠いあげたものではない。受領階級の宿命的なものへの自覚がその奥に秘められているように思われる。家集六番から十番までの歌群、十五番から十九番までの歌群、二十番から二十七番までの歌群にはそうした心情が歌の中心に据えられていたことを考えなければならぬ。筆者はそこに、身のほどへの厳しい自覚と人生における別離という悲しみに支えられた「みやび」の心をみる。家集の発端は、そうした深い心情を基調に

展開していると見なければならぬのではないか。南波浩氏は「紫式部集」のうちに深い流れている心情は、孤愁感・憂き世感・無常感であって」「それに埋没してしまうことなく、そのような事象（環境）や心象（自己）を、客観視し、対象化することによって、自己の人生を回顧し、人の世の真実を見極め、人間としての自己の生き方を見直し、追究して行こうと努めた」（『全評釈』715頁）とされる。従うべきである。

第三の歌は、千載集に宮仕えの後の歌の詞書でとられているもので、これについては既にいくつかの問題点を指摘してきたが、それは、家集の歌の配列からすれば、宮仕え以前のものと考えるべきだとする定説への疑問であった。家集の歌で、「虫の音」を詠んだ歌は、第二、第三の歌のみで他にその例を見ないことに注意しなければならぬ。これは年代順によって第三の歌としたのではなく、第二の歌と「同類」の歌としてその位置に置かれたものと考えるべきものではないか。この二首の歌は、年代順に配列されていると見てよいが、そのことと、他の歌との年代は、かかわるところがないと見なければならぬ。

第四、五の歌をめぐっても、既にいろいろな点から書いてきた。伊藤博氏は、「後朝の歌というには女の方から詠みかけている点が不審」であるとされるが、こういう解釈が誤りであることも既に指摘した。「すくなくともこの歌の贈答歌の段階では男の返し歌からみて、相手の字も見分けられぬ程度の仲の「あるかなきか」の出来事ではなかつた」と解されるのにも従えない。この才知にあふれていると見られる歌は、「後朝の歌」ではなく、男が強いて男女の仲を越えようと迫ったものでもなく、人違えをしてある恋の情趣を体験したことへの詠みかけで、代作歌の一面——それは姉に頼まれて詠んだという、意味ではなくわが身をそういう立場に置いて詠んだという意味であるが——を持っていた。男が、「手を見わかぬにやありけむ」というのは、「相手の字も見分けられぬ程度の仲の「あるかなきかの出来事」ではなく、女がちよっと冷笑を浮かべ、皮肉っぽく軽くからむような心情で書いた詞

書きで、文字通りにうけとったら、おかしなものになってしまう。男の歌は、女の詠みかけをはぐらかし、ちょっと空とぼけてみせた歌。男は、それが誰からの歌かわかっていたのである。やはり、真正面から、ことば通りに解釈しない方がよさそうな歌である。女の歌は短かく切れ、たたみかけるような口調で、「あらぬか」「あけぐれの」と「a」音を重ねてリズムカルで明るい。いかにも才知にあふれたいどみの歌で、そこには、陰湿さがない。

このように読んでくると、定説化した家集についての論にも、いくつかの疑問が出てくる。今井源衛氏（『王朝文学の研究』 角川書店）は、次のごとく指摘されている。

岡一男氏が、はじめて、家集の基本的構造が和歌の年代順排列にあることを指摘されたのは、まことに正しいことであつた。その事によって、氏は精緻な式部伝を構築せられたのであり、この時式部の伝記は正しくはじめて学問的な装いを獲得する事ができたといつても過言ではなかつた（284頁）この年代順排列の原則がどこまで家集の中に貫徹され、また岡氏御自身も認めていられる様なこの原則に背く若干の連想や類をもつて歌を蒐めた小歌群や、錯簡、誤脱の範囲やその性格の測定については、なお十分に慎重な検討を要するのではないかと思うのである。岡氏が年代順排列という演繹の原理を用いて従来詠作年代不明とされてきた歌を何年作と明かに截断されるとき、右のような事情を考えると、その手続の飛躍の怖れはないかと私は常に多少の懸念を抱かせられた（285頁）

として、個々の歌について詳細な検討を加えられ、

もともとこの家集全体を律する年代排列の原則は、必ずしも強力なものではなく、これに背反する例は至る所に見出されたし、また、類聚的部分においては、反年代性の確証はなくとも、その可能性の強い事が想像されるのである（308頁）

とされる。紫式部集についての氏の論は、従来の定説を批判され、その根底となる部分をも否定されているが、従うべきものだと考えている。そして、紫式部集の歌と源氏物語の創作とのかかわりは、従来考えられてきたよりはもっと深いところがかかり合っているのではないか。そのことについては、既に述べてきた断片的な論のなかでも明らかにし得たように思う。

『紫式部集』が、源氏物語の形成やその享受にかかわる意味を、いま少し掘り下げて考えてみたいと思ひながら、手もとにある僅かな資料をあやつりながら、それでも、作品だけは丹念に読んで、おぼつかない推論を重ねてきた。いずれ、再論を試みなければ、と思う疑問を多く残していたからである。だが、そうした推論が、既に先学によって明らかにされている部分もあって、怠惰な物言いが、恥じられもする。

例の家集、四、五番の歌「方たがへにわたりたる人」について、竹内美千代氏は、

詞書も歌も「おぼおぼしき」ことで一貫している。相手は恐らく男性であろう。その受取手が判断に苦しんでいるのでは、われわれが、おぼつかないのは当然であろう。その中で一番はつきりしているのは彼女の意識である。敏感な若い日の乙女心に何かを期待して、「なまおぼおぼしきこと」を問い正そうとしたのであろうが、相手に何事もなかったと見え、朝顔の花に筆跡まで変えて贈られたのでは、とまどうばかりであった。「手を見わかぬにや」とあるのは、筆跡は知っているはずの人か。「いづれぞ」は全くどの誰かわからないのではなく、方違え所の女性の誰か、この時は彼女の姉も健在であったかも知れない。謎のような歌と、色あせた朝顔を見て困った返歌をよこしたのでは、結局彼女の独り相撲のようである。勝気で積極的な気性が見える。「鈍感な方」と軽い失望と共に、伶俐な少女はこの寸劇の幕としたであろう（『紫式部集評釈』改訂版 桜楓社 50頁）とされ、岡一男博士、角田文衛博士、石川徹氏らの推察をあげ、「朝顔の歌のこれ以上に発展したらしいものは、

家集にも日記にも見えない」、「後にこの経験をフィクションに仕立てて夕顔の巻が書かれたのではなからうか。また空蟬にも利用されているように思われる」と指摘されている。

木船重昭氏は、「古今六帖」六、あさかほの「おぼつかなたれとか知らむ秋霧の絶えまに見ゆる朝顔の花」の歌を「換骨奪胎、利用作詠したこと、歴然としているのである。〃明けぐれの空のようにぼんやりと空とぼけていらっしやる今朝のお顔といったら、昨夜のお顔かどうか、なんとも知れせんわね〃——方違人の今朝の顔を、式部が見たわけではない。この式部歌は、方違人を譴責するような口吻ではない。朝顔の花に託して、想像し擲掄して詠みかけたのである」（『紫式部集の解釈と論考』笠間書院 13頁）とされ、「方違人の返歌では、式部歌を承けたその△朝顔▽は、式部の譬に転化している。それが△あるかなきかになる▽とは、〃どこのお女人か、つい分からぬまま〃と言うのである。歌は、式部の擲掄をていよくかわして、切り返したのだ」「擲掄歌を贈って、「いかが。参ったでしょう」と内心得意の式部は、あにはからんや、ていよくかわされ、実は辛辣なしっぺ返しをくらったのだ」（同 15頁）と指摘されている。方違人の歌は、竹内氏「評釈」が「脈絡がある」としてあげられ、木船氏「評釈と論考」が「うべなえる指摘」とされる花宴の巻の歌、

いづれぞと露の宿りを分かむまに小笹が原に風もこそ吹け

と深くかわるものである。だが、木船氏が「ただし、光源氏歌も『源氏物語評釈』が積くように、△女を誰人ぞと分たむといふ意▽」で、家集の歌を「△どなたからでしょうかねえ▽（『研究』）と解すべきである」と説かれるのには従えない。花宴の巻の歌は、

どちらの御方ぞ（どなた）と、私が御身（麗月夜）の宿所（住居）を識別しようと思う間に（御身の身の上を知ろうと  
思つて尋ねている間に）、世間に評判が立って言い騒がれ、二人の間が隔てられて、逢えなくなつてしまふかと恐



れる。女の宿所を「露の宿り」と言った縁で「小笹が原に」と言った。「小笹が原に」は「世間に」「風」は「評判・噂」の意（岩波大系本 307頁）

と解されてきた。「全集」も、「名前をうかがっていないと、どれが露のようにはかないあなたのお宿かと」、「評釈」も、「あなたの身の上を知ろうと尋ねている間に」とする。諸注いずれも「どこのお女人」の意に解する。丸山林平氏の『上代語辞典』（明治書院）の「いづれ」の項に「人・事物・場所・方向などをさす不定称。だれ、どれ。どこ。どちら」とあり、舒明紀、万葉三五九三の歌を用例に引く。ほとんどの辞書がこういう類の説明をする。ところが、小学館の『国語大辞典』は「おもに個々の事物からの選択を示す」とし「①多くの事物の中から一つを取り出して示す。どれ」「②二つの事物のうち、一方を選んでいう。どちら。どっち」とする。『上代語辞典』の用例はいずれもこの「①」の意味。花宴の巻の用例もこれと同じだと考えなければならぬ。明け行くあたりの騒がしさに、光源氏は扇だけを、逢瀬の証拠に取りかわしてお立ちになる。部屋に帰った源氏は、やはり眠れない。そして、

をかしかりつる人のさまかな。女御の御おとうとたちにこそはあらめ、まだ世馴れぬは、五六の君ならんかし、  
帥宮の北の方、頭中將のすさめぬ四の君などこそ、よしと聞きしか、なかなかそれならまししかば、いますこし  
をかしからまし、六は春宮に奉らんと心ざしたまへるを、いとほしうもあるべいかな、わづらはしう尋ねむほ  
ども紛らはし、さて絶えなむとは思はぬ気色なりつるを、いかなれば、言通はすべきさまを教へずなりぬらん  
など、よろづに思ふも、心のとまるなるべし。（『全集』 429頁）

傍線の部分に注意して読んでいくと、『国語大辞典』の扱いがすぐれていて、「①」の意味であることは明確である。弘徽殿の細殿で会った女が、弘徽殿女御の妹君であることはわかっていたのであるが、それが妹君達の誰で

あるかをさぐっていたのである。「いづれ」は「どこの女人」というような漠然とした不定称代名詞で用いられているのではない。こういう語意の扱いの不適切さが誤謬を重ねて虚像をつくり出していくことになる。以下、花宴の巻に用いられている「いづれ」の語の全用例が、すべて弘徽殿女御の妹君達のうち、誰であるかの意に用いられている事實は、筆者の考え方が正鵠を射たものであることを証しているように思う。但し、既に妹君達のうち、五の君か六の君かという形にしばられてきているので、「国語大辞典」の「②」の意味に転じている。

いかにして、いづれと知らむ、父大臣など聞きて、ことごとしうもてなさんも、いかにぞや（『全集』 430頁）  
いづれとも知らで、ことにゆるしたまはぬあたりにかかづらはむも（同 433頁）

いづれならむ、と胸うちつぶれて、「扇を取られて、からきめを見る」（同 436頁）

「まだ世馴れぬは、五六の君ならんかし」を重視して、『全集』430頁の頭注「五の君か六の君か」に従って「②」の意味としたが、「帥宮の北の方、頭中將のすさめぬ四の君などこそ、よしと聞きしか、なかなかそれならましかば、いますこしをかしからまし」とある反実仮想の扱い方如何では「①」の意味とすることもできよう。だが、いづれにしても、光源氏の歌以後、「いづれ」の語がこういう用いられ方をしている事實は、いまま少し慎重に考えなければならぬことのように思う。

『新釈本』の索引によれば「いづれ」の語の源氏物語中の全用例は八十二例、「②」の用例は三十四例で、その用例は『国語大辞典』の語意の分類に一致する。慣用的用法と見られるものはあるが、語意の点では問題はない。ただ次の一例が、やや問題になる。

「骸をだに尋ねず、あさましくてもやみぬるかな、いかなるさまにて、いづれの底のうつせにまじりにけむ」  
など、やる方なくす思す。（『全集』 蜻蛉 227頁）

ここは従来、「いったいこの水底の貝殻と交じってしまっているのだろうか」と解釈されてきたところで、漠然とした不定称代名詞のように解される。多くある水底の中から一つを指しているというのは、「他の水底」が文中に表わされていないことから強弁になるうか。この文については、別の立場から旧稿「源氏物語とその周辺」(208頁)で論じたことがあるが、古注釈に引く万葉集の歌ではなく、既にわからなくなってしまった「いづれの底の」にかかわる引歌が存在していたようにも見える。文脈の上から考えても、そうした想定の方がむしろ自然であるし、引歌の存在を想定することによって、例外とも見られるただ一つの用例は、例外ではなくなるのである。しかし、「国語大辞典」も、「おもに」という記述があり、従来、一般の辞書類が扱ってきたような、漠然とした不定称代名詞の用例が存在しても例外とも言えない。だが、そのことから、花の宴の巻の用例をそうした語意に解することは、既に検討した用例から誤りであり、そこから紫式部集の「いづれぞと」の歌意を演繹的に考えることも誤りである。

「いづれぞと」の語句を句頭にもつ歌は、「国歌大観」正・続索引によれば四首であるが、花の宴の巻と、紫式部集の歌、続拾遺集一〇〇四の歌は「方たがへにまうでたりける人の覚束なきさまにて帰りにける朝に朝顔を折りて遣しける」(傍点筆者注)と詞書きがあって紫式部集の歌と重複、続古今集、五九三の土御門院の「いづれぞと草の縁もとひ侘びぬ霜がれ果つる武蔵野の原」の歌と、三首である。続古今集の歌は、「おもに」以外の用例のように見えるが、結局、「大辞典」の「①」で「おもに」の用例として引くこともできる。こういう語意のなかで、「不定称代名詞」として、従来、一般の辞書類が扱ってきたような意味によって、推測を重ねていくことは、重大な誤謬をおかすことになる。「広田の社の歌合として人々歌よみ侍りける時社頭雪といへる心をよみ侍りける 権大納言実国」とある千載集一二六三の歌「おしなべて雪の白いふかけてけりいづれ榊の梢なるらむ」の歌も「①」で、

「おもに」の用例になろう。

「国語大辞典」の「おもに」の用例は「いづれか」の語に多くあらわれることが予想される。「国歌大観」索引によって確認できるこの語を句頭にもつ歌は二十八首で、うち重複歌の一首を除くと、二十七首である。「国語大辞典」の「①」の意味をもつ例は、続古集96、新拾遺1883、新統古1757、新古今1699の四首、「②」の意味をもつ例は、後選集868、862、488、風雅集1891、692、拾遺集551、後拾遺集616、417（今昔物語178と重複）795、続後撰906、千載集1127、土佐日記16、新古今1624、1583、107、283、1787、続後拾遺集503、1229、源氏物語1417、詞花集203の二十一首である。うち「おもに」以外の用例として次の三首をあげることができるが、これらはいずれも、「多くの事物」が言外に想定できるので「①」の意と解することもできる。「国語大辞典」も、いま一工夫あってもよいように思う。

紅葉はのちりかひ曇る夕時雨いづれか道と秋の行くらむ（新勅撰 1101）

世の中はいづれかさしてわがならむ行きとまるをぞ宿とさだむる（新古 987）

かへるべき方も覚えず涙川いづれか渡るあさ瀬なるらむ（後撰 889）  
／＼「かへし」に、「涙川いかなるせより  
帰り剣み馴るるみをも怪しかりしを」とある。▽

このように、「いづれ」の語は、従来、一般の辞書類で扱われてきたり、副詞の用法にひかれる現代語の語意にとらわれたりすると、重大な誤謬をおかすことになり、その上に立って推測を重ねていくことは、およそ真実から離れた虚像をつくり出していくことになる。

木船氏は、柴式部は姉と同室ではなかった、「姉と相談して歌を詠み贈ったのであれば、詞書きにそれらしき記述がありそうなもの」だといわれるが、強弁であろう。これらの贈答歌の発想に、夕顔の巻の女房の「心あてに」の代作歌と光源氏の「寄りてこそ」の贈答歌との類似が見られることは既に指摘した。物語の読者は、それを重ね

て読んでいた、そういう物語の享受がなされていたのではないか。一群の贈答歌に、夕顔物語の原像か、それに近いものを体験したと見るのは、「想像」ではない。家集の恋歌は、かなりおぼめいた詠み方や配列をしているのである。木船氏が、「おおむね時間的秩序に従っているとするのが、おおかたの見方である」が、「作詠時の時間的秩序に従わない、あるいはその不明の排列構成部分をも、意外に多く内包している」と指摘されているのは従うべきである。だが、花宴の巻の歌から帰納的に解される「いづれぞと」の歌の論と、家集の構造、主題を「友情」越路」「婚前、婚後」「寡居、哀傷」というようにその前半の構造表をまとめられているのには、にわかに従えない。家集の主題化が、もっと深い次元でなされていることは、既に述べたところであるが、やはりそうした意識のなかに、紫式部日記との照応を読みとることができるよう思う。木船氏が言われるように、紫式部集は「半記録的虚構的撰集方法になる、式部自撰の自伝歌集」(232頁)としての性格を持ち、源氏物語の読者は、家集の歌に重ねて物語を享受していた——既に指摘したごとく、それは家集そのものであったということではないが——そういう問題をいま少し問い直していく必要があるように思う。

南波浩氏(「紫式部集全評釈」笠間書院)は、「紫式部集」のうちに漂い流れている心情は、孤独感・憂き世感・無常感であって、その頃までの私家集の多くが、恋愛抒情歌・叙景歌・屏風歌・献詠歌などで構成されているのに比して、これはまことに特異な存在で、式部はそれらの情感を濃くただよわせながら、それに埋没してしまうことなく、そのような事象(環境)や心象(自己)を、客観視し、対象化することによって、自己の人生を回顧し、人の世の真実を見究め、人間としての自己の生き方を見直し、追求して行こうと努めたものようである」(715頁)。「人間らしく生きたいと願う、その志向をはばむ歴史社会的矛盾から受ける孤独感・憂き世感を、ただ個別化し、主観化してそれに埋没してしまうのではなく、それらを歴史社会的事実として、対象化し、その中におかれ、その中に生

きている自己を、第二の自己の眼によって客観視し、擬視し、個別と普遍との相関性の中で、自己の存在性を検証しよう、営為しようとしている」(719頁) 家集であると指摘されているが、源氏物語の主題を考えていく上で示唆することが多い。

6

更級日記に見られる源氏物語の享受はいろいろな意味で問題を持っている。今井卓爾氏は、

文学少女が環境にひしがれて、遂に自分の憧憬を現実的に満足させる事の出来なかつた老後の述懐である。孝標女のこの「源氏物語」観は、その環境に基礎をもつものであり、「源氏物語」が創作せられた当時は、「源氏物語」は存在の必然性なり可能性なりが現実的にあつた物語で、従つてかういふ見方をも生ずるほどの迫力をもつたものであつたらう。然しこの時代には已にこの評者が経験した様な現実的破綻を余儀なくされる程、必然性又は可能性が欠けて来てゐたと思はれる。もっと後になって、時代を離れたものであるならば、かういふ幻滅は起らないであらうが、存在の可能性が考へ得られる時代であつて、已にそれが昨日となつてゐる時、かういふ文学少女の老婆が出るのであると思ふ。孝標女の様な社会的地位の人は、夕顔や浮舟とその位置を替へる事が夢想されてゐた程、「源氏物語」の平安時代のその当時に於ける力は大きなものであつたと思ふ。(鮎沢書店「源氏物語批評史の研究」17頁)

と指摘されている。伊井春樹氏は、注釈の発生という視点から、

孝標女は、源氏物語を読みながら、その世界に陶醉していった。そこにはことばの障害もなければ、社会的背景、

知的水準の差もそれほどなかっただけに、たちどころに作品に展開する場面が、彼女の眼前に映画でも見るように髣髴としていったに違いない。後世の読者にとっては、どのような考証の数々を尽くそうとも、けっして体験を再現することのできない、同時代の読みの強みが彼女にはある（桜楓社「源氏物語注釈史の研究」1139頁）

と述べられている。更級日記に見られる源氏物語享受の基層は、ほぼこれらに尽されている。だが、「なぜ孝標女は源氏物語の人物群像の中で、ともに薄幸のヒロインというべき夕顔・浮舟に憧れたのか」という問題を鋭く追求されたのは志津兼三氏（「更級日記考」国語と国文学 昭和五十六年十一月号）である。氏は、

その回想を記述するに当って死のイメージなり死を待つイメージとともに、あるいは往生成仏もしくは転生の機縁を説きすめることばとともに、夕顔や浮舟の憧れた幼時が回想されたとすれば、夕顔や浮舟にもまた死別・離別のイメージが、往生や転生のイメージが強く残っていたからではないか。確かに夕顔も浮舟もこの世から姿を消した。貴公子に愛され、何不自由なく暮しながら、人知れずこの世から消えて行く。この華やかで、しかもあはれな花の風情、今も昔も変わらず文学少女の心に残ることであつたのだ。

こうして夕顔と浮舟は登場し、夕顔は二度と表われることなく、浮舟はこの後長く残るのであるが、そこにもこの往生成仏と転生のイメージが生きていることは容易に理解されると思う（38頁）

と指摘され、「往生成仏の機縁を逃さぬためには、神仏には勿論、世間にも、自分がどのような者であつたか知らねばならない。毎日の孤独の思いを癒し、不安感を払拭するために書かねばならない」といわれ、

阿弥陀仏の御来迎を確信している孝標女が計画した最初の構想は、いかに自分が神仏に見守られて来たか、神仏の加護を身に受けて、往生成仏の功德を作つて来たか、そのあたりにあつたのではなからうか。（50頁）

とされる。そして、確信の中に疑いが生じ不安と心細さに変わり、浮舟を思い、竜女成仏談に思いを致し、一つ一つ

の過去の回想を媒介にして、阿弥陀仏の御ことばを頼みに生きている自分を確かめるべく、孝標女を導いて行ったのではないか。もともと仏に許され、神にも許され、人にも認められて、往生成仏の機縁に恵まれた自分を、天下の人々に知らせるべく筆を執ったはずのものが、いつかその現実の為に自分をより確かなものにしようとする方向へ変って行った。そうして成立したのが孝標女の更級日記である」(50頁) と指摘される。氏は更に、「孝標は夕顔の結末も、浮舟が投身をはかったことも、小野の里でまだまだ揺れ動く心のままに、しだいに仏道に身を託し後世を願うように変ったことも、明らかに知っていた」(46頁) 「かつて幼い日にその竜女成仏の話聞き、浮舟入水に心魅入られたかも知れないが、現在の孝標女はその孤独に耐え仏を頼み生きている「手習」の浮舟に、自分のとるべき姿の典型を見出しているのである」(47頁) といわれる。

更級日記の源氏物語享受は、いろいろな意味で示唆にとむ。夕顔と浮舟への憧れのなかに、実は作者の意図した構想を既に読みとっていたのではなかったか。夕顔の後日譚としての玉鬘物語にとらわれることなく、夕顔と浮舟という、二つの物語の構成的な位相を注意深く比較検討することによって、物語構成の意味を探ることができるようになる。

夕顔の巻「いづくをさして」の注に、「源氏釈」は「世中はいつくかさしてわかならんゆきとまるをそやとさたむる」(「大成」巻七 研究資料篇 285頁)を引く。古今集、雑下、読み人知らずのこの歌は以来諸注が引歌としてあげてきた。「岷江入楚」に、

箋聞書宇治に浮舟の君の匂宮へ心うつりたる時分かほるのおはしたれば何とやらんうちそむきたるあひしらひ  
なりしを薫<sup>(6)</sup>を久しく音つれぬをうらむるにやと思ひ給ていひなくさめつゝ楚王の台上の夜の琴の声といふ詩を  
誦せらし事あり浮舟君うせ給て後薫大将の不吉なる事をいひしと思ひあはせし事あり是も夕白の上の末みしか



「古注集成」242頁

かるへき前表にてかやうのにすさひも有し也此物語にかやうの類おほし心をつけてみるへしと云々（桜楓社）  
とある。古今集、九八七の歌について、岩波『大系』の頭注は、

この仮の世の中では、どのやどが、これと指定して、我がやどであるだろうか。そんなものなんかありはしない。わたしはわが足の行ってとまる所を、わがやどと決める。行脚して修行する僧の心（302頁）

とする。空穂『評釈』（東京堂）も、「修業のために行脚して、樹下石上を家としている僧の態度を語ったもので、何等かのとき、人に向っていったものと取れる。仏教の説いている心である」（160頁）とする。「岷江入楚」の「箋聞書」（中院通勝が三光院（三条西実枝）から聞いた聞書）には、「是も夕貞の上の末みしかかるへき前表にてかやうのにすさひも有し也」とある。夕顔の「末みしかかるへき前表」と見ているのである。東屋の巻に、

いと恥づかしくて、白き扇をまさぐりつつ添ひ臥したるかたはらめ、いと限なう白うて、なまめいたる額髪の隙など、いとよく思ひ出でられてあはれなり（『全集』(6)92頁）

「楚王の台の上の夜の琴の声」と誦じたまへるも、かの弓をのみ引くあたりにならひて、いとめでたく思ふやうなりと、侍従も聞きあたりけり。さるは扇の色も心おきつべき閨のいにしへをば知らねば、ひとへにめできこゆるぞ、おくれたるなめるかし。事こそあれ、あやしくも言ひつるかな、と思す（93頁）

とあるのは、古注が指摘してきたように、班婕妤の故事をふまえたもので、夕顔の巻の「白き扇」も、黒須重彦氏のいわれるごとくこの故事をふまえたものであった。岩波古典文学大系『和漢朗詠集』の162・400・485の歌には、この故事がふまえられ、当時既によく知られていたものであった。夕顔や浮舟の姿に、趙飛燕に寵愛を奪われた不運な班婕妤を準えているのである。だが、それは故事をふまえ、準えて、物語を書いていただけではない。そこには、

常に新しい物語の書き換えが用意されていた。夕顔が、夕顔の花咲く場末の陋巷に身をひそめていたのは、頭中将の寵愛を失ったからだではない。正妻右大臣の四君方のおどしに困り果てて身を隠してもいたのである。頭中将は、「こよなきとだえおかず、さるものにしなして、長く見るやうもはべりなまし。かの撫子のらうたくはべりしかば、いかで尋ねんと思ひたまふる」(『全集』(1) 159頁) のであり、「つれなくて、つらしと思ひけるも知らで、あはれ絶えざりしも、益なき片思ひなりけり」(同、160頁) と思っている。正妻でなくとも、相応の女として愛し続けようとしたのである。幼な子も可愛いかった。だが、夕顔は、正妻方からのおどしや、男の途絶えがちな逢瀬を心ひそかに恨み、なげいて身を隠してしまう。そして、「はかなき世にぞさすらふらん」——現世に生きのびているならば、はかない身の上で、零落し、さすらっているだろうといとしく思ひだす。それは、ただ不運な女、愛を失った女として登場してくるのではない。女もまた、男を思いきることでもできず、折々は、わが身からとは言え、恋しさに胸をこがす夕方もあるだろう。「これなん、えたもつまじく頼もしげなき」女で、言葉や行動を通して男に愛を訴え、その心をひきとめることのできない引込み思案の女なのであった。「痴者」の物語として、そこには物語の変相——常に新しい書き換えが行われているのであり、班婕妤の故事をふまえ、準えているだけではない。物語の読者は、「白き扇」という語を通して、男の愛を失って不運にも零落してその身をひそめる班婕妤を連想し撫子の女であることを光源氏よりも早く知ってしまうのである。読者の知的興味を、作者の側に有効にひきつけていく戯曲的な構成手法なのであった。玉鬘系物語のなかにこうした手法が意識的に使われていることは、池田亀鑑博士(『新講源氏物語』上巻 至文堂)が指摘されたごとくである。班婕妤の故事から源氏物語を演繹的に読みとろうとするのは、作者の意図とは相反する逆な立場だといわなければならない。

夕顔・浮舟物語が、班婕妤の故事をふまえながら、新しい物語をつくり出していったことは、二つの物語が、対

偶的な意識によって構成された物語としての一面を持っていたことを示している。更級日記の源氏物語享受は、こういう点を適確にとらえている。ここでは、そうした点から、更に問題をとらえ直してみたい。夕顔をとり殺した女の正体については、いろいろな立場から論じ尽されてきた。篠原昭二氏（「廢院の怪」講座 源氏物語の世界」第一集 有斐閣）は、

夕顔の命を奪った「物の怪」の正体については古来論議があるが、そのおおよそは『無名草子』『源氏こころくらべ』等の「こだま」説、一条兼良『花鳥余情』、三条西実隆『細流抄』等の六条御息所の霊説、そして、『源氏物語評釈』における萩原広道による以上二説の折衷説（247頁）

の三種に区分できるが、「後日における光源氏自身に従って、廢院にすむ精霊と認めるのがもっとも穩当であり、これが、ほぼ現代の定説になっている。しかしながら、御息所は全く無縁かという点、光源氏の内面における脈絡は認める説が有力で、たとえば『全集』(1)の頭注（二三八頁）では、「物の怪」の言葉である「おのが、いどめでたしと見たてまつるをば、尋ね思ほさで……」について、「夕顔に溺れることの、六條御息所へのうしろめたさが、夢になって源氏を責めるのである。荒廢した院に棲む霊物と、夢の中の御息所の容形とが二重写しに語られている」と説く（248頁）とされる。そして、「場所につく妖怪」が、「わたしの、あなたを大変すばらしいと拝察している気持を御心におかけにならないで」と、「妖怪が光源氏を「めでたし」と見て「見入れ」た」とものと解された。「妖怪自身が光源氏に思いをかけていて、しかも目前に取得のない女（夕顔）を寵愛する姿を見せられて、憤っている」ので、「光源氏に向かって言われた語であると同時に、彼女の前世での嫉妬に苦しんだ生を自ら物語るもので」、「そこにいま光源氏に打ち捨てられたようにしてある六条御息所との深い共通性が浮かびあがるとされた。そして、

夕顔の巻は「六条わたりの御忍び歩きのところ」と語り出されて、六条御息所との関係を背後にした物語であることを基調にしている。夕顔との情事の具体相を語るこの巻の宗とあるべき部分は、光源氏が六条御息所の、「いとものをあまりなるまで思ししめたる御心ざま」(二二二頁)に触れた後朝の場面が語られた直後に、「まことや、かの惟光が預りのかいま見はいとよく案内見取りて申す」(二三三頁)と語り出されるが、これも、御息所と夕顔の女とが光源氏の生活において表裏の関係にあることを提示したものであろう。だがここで注意すべき事柄は、「六条あたり」の女が高貴な心深い女で、光源氏との関係がはかばかしく進んでいないということまでは分かっていても、まだ具体的には誰とは知られていないという事実である。御息所ということは葵巻で明らかにされるが、夕顔巻での語り方はあくまで醜化されている。このことは、御息所との関係と夕顔の女を語ろうとしてその特徴を際立たせる手法として、御息所とのことを背景に置いたということである。背景にはさらに空蟬もいるし「いやしきにても、なほこの御あたりにさぶらはせん」(二三三頁)と光源氏に娘を近づけようと計る諸家の存在もある。そういう女たちの思いに取り囲まれた中で光源氏はあるまじき恋を夕顔の女にし、彼自身も「六條わたりにもいかに思ひ乱れたまふらん恨みられんに苦しうことわりなり」とあり、彼の反省が御息所に対するものにとどまらないことが暗示されるのは見逃がせないであろう。(257頁)

とされ、この物の怪も、「詮無い者に愛を奪われた女ならば誰のものでもありうる」のであるが、「荒れたりし所に棲みけん物」(二六八頁)に女を奪われたことを自分の藤壺との情事の報いと考えていることは、作者が夕顔の死に与えた意味を推測する上で重要であるように思われる」(258頁)と指摘されている。

これについては既に旧稿(「源氏物語とその周辺」137頁~140頁)で述べたことがあるが、それを引用しながら、再論を試みることにする。以下、とくにことわらない「」の引用は旧稿からのものであることを示す。篠原昭二氏が

「六条わたり」の女が高貴な心深い女で、光源氏との関係がはかばかしく進んでいないということまでは分つていても、まだ具体的には誰とは知られていないという事実である」と指摘されるのは、「池田博士は「間接的に性格表現をこころみるという程度」とされ、森一郎氏は、「隠見する『六条わたりの貴婦人』とされるなど、夕顔の巻の登場は、六条御息所という構想ができあがらない以前の形を隠見させていると考えたり、具体的に六条御息所のこととしてもきわめて軽い扱い方に過ぎないと考えられてきた」ほぼ定説化した従来の説の上に立たれているが、疑問である。「六条わたりの御忍びありきの頃」と書き出され、「木立など、すべての所に似ず、いとどのどやかに心にくく住みなし給へり」「うちとけぬ御有様などの、気色異なるに」「とけ難かりし御気色をおもむけ聞え給ひて後」「女は、いと物をおまりなるまで思しめしたる御心ざまにて、齡の程も似げなく」という「四ヶ所の物語の断片をつなぎ合わせていくと、異常な鮮明さで一つの物語が浮びあがってくるような書き方をしている」。「六条わたりの女性の物語の輪郭が明確に構想され、物語の筋書きが具体的にできあがっていなければ描けない書き方である」。若紫の巻に、

秋の末つ方、いともの心細くて嘆きたまふ。月のをかしき夜、忍びたる所に、からうじて思ひたちたまへるを、  
時雨めいてうちそそぐ。おはする所は六条京極わたりにて、内裏よりなれば、すこしほど遠き心地するに（「全集」310頁）

とあるのは、『全集』頭注に「忍んで通う所とは、六条御息所か。また夕顔巻との関連も考慮されるが、ここでは身分も高からず、源氏の愛情も薄い人物として寸描されている。高貴で奥ゆかしい御息所像はまだできあがっていない」とあるのに尽くされている。この若葉の巻と、夕顔の巻の六条わたりの女性についての描き方は「本質的に異なる書き方であり」、夕顔の巻の書き方はむしろ、葵の巻の六条御息所の描き方と「同じ次元に属するものと考え

ることができる」この旧稿の考えは、現在でも訂正すべき必要はないと考える。檜原茂子氏（『源氏物語論』笠間書院）は、「夕顔、若紫巻の六条わたりの女と葵巻以後の六条御息所とは同一人物ではあるけれども一線を画する必要があるのでないかと推察」（98頁）され、「六条御息所はもともと六条わたりの女として帚木六帖で活躍する程度の女性だった」といわれるが、従い難い。「夕顔の巻と若紫の巻とは、やはり扱い方が本質的に違っている」と考えるべきである。若紫の巻については、『全集』の頭注に尽されているが、夕顔の巻は、四ヶ所の短かい本文の引用からも明らかのように、「敬語の明確な使用を通して、高貴な女性でしかも、六条に住むという女性の素姓」を、かなり具象的な世界を背後に置いて描いていると考えなければならぬ。確かに、「まだ具体的には誰とは知られていない」が、単に醜化的に語られたり、挿入的に語られたりしてはならない。明確な敬語意識によって語られるこの物語の背後に、したたかで、確かな具象的物語の存在を読みとり得なくなっているのは、現代のわれわれが、この物語の醜化、挿入の手法を理解できなくなってしまうからではないか。玉上琢弥博士が、夕顔の巻冒頭の解説で「六条わたりの人はどんな人か、ここでは全然わからない。この巻を読み終えても、前坊の御息所かどうかわかりはしないのである」（『評釈』340頁）とされるのも同じである。また、その語り方があくまで醜化されているのは、「御息所との関係と夕顔の女との情事を相対的に語るのではなく、夕顔の女を語ろうとしてその特徴を際立たせる手法として、御息所とのことを背景に置いた」という考え方にも疑問をいだく。だが、それが主要な軸ではないように思う。「心あてに」の歌の解釈をめぐって、この歌が代作歌と考えるべき謎解きの鍵は、夕顔の巻で、光源氏の詠みかけを、主人公の六条御息所にことよせて、巧みにはぐらかした中将の君の歌にあると考えなければならぬ。それは中将の君の「朝霧の」の歌の代作歌性とかかわりの中で考えるべき問題であることは既に指摘したごとくである。そうした対偶的構成のもつ意味は、物語のもっと重要な軸になっているように思

われる。六条御息所が、光源氏に娘を近づけようと計る諸家の女達と同列に扱われているというのは説得力を持たない読みかたではないだろうか。夕顔の巻に、

内裏にいかにも求めさせたまふらんを、いづこに尋ぬらんと思しやりて、かつはあやしみの心や、六条わたりにもいかに思ひ乱れたまふらん、恨みられんに苦しうことわりなりと、いとほしき筋はまづ思ひきこえたまふ。

何心もなきさし向ひをあはれと思すままに、あまり心深く、見る人も苦しき御ありさまを、すこし取り捨てばやと、思ひくらべられたまひける（「全集」237頁）

とある。「六条わたりにもいかに思ひ乱れたまふらん、恨みられんに苦しうことわりなり」というのは、「彼の反省が御息所に対するものにとどまらないことが暗示される」として、空蟬やそういう女達とのかかわりだけを考えて読んでいくべき本文なのであろうか。「御父帝は今頃どんなにか自分を案じてお探しあそばしていらっしやることであらうか。お使いの者達はどこを捜し歩いてのことやらとお思いやりになるにつけても、一方ではわれながら怪しからぬ心のすさびだ、六条の御方も、どんなに思い乱れていらっしやることか、恨まれるのもつらいことだが、もっともなことでと、お気の毒な点ではまず真つ先にこの御方をお思い出しになる。無邪気にさし向っておつとりとしている女を・・・」と現代語訳できる。「六条わたりに」という本文を、そのように解釈していくことにためらいをおぼえるのは筆者だけであらうか。「内裏」と、御父帝のご心慮に対応して「六条わたりに」と語られていくことに注意すべきである。これは、葵巻のはじめの部分に見える父院の諫言に照応する。六条御息所が、源氏の愛も頼りにならないので、幼い姫君が斎宮に卜定され、伊勢に下向するのについて下ろうとされるところ。

院にも、かかることなむと聞こしめして「故宮のいとやむごとなく思し、時めかしたまひしものを、軽々しう

おしなべたるさまにもてなすながいとほしきこと。斎宮をもこの皇女たちの列になむ思へば、いづ方につけてもおろかならざらむこそよからめ。心のすさびにまかせて、かくすきわざするは、いと世のもどき負ひぬべきことなり」など、御気色あしければ、かしこまりてさぶらひたまふ。「人のため恥がましきことなく、いづれをもなだらかにもてなして、女の怨みな負ひそ」とのたまひけるにも、けしからぬ心のおほけなさを聞こしめしつけたらむ時と、恐ろしければ、かしこまりてまかてたまひぬ。

また、かく院にも聞こしめしのためはするに、人の御名もわがためも、すきがましう、いとほしきに、いとどやむごとなく心苦しき筋には思ひきこえたまへど、まだあらはれてはわざともてなしきこえたまはず。「全集」(2) 13頁)

夕顔の巻の「いとほしき筋はまづ思ひきこえたまふ」と、葵の巻の「心苦しき筋には思ひきこえたまへど」という表現は照応する。夕顔を物怪に奪われ、夜明けを待ちこがれるところ。

からうじて鳥の声はるかに聞こゆるに、「命をかけて、何の契りにかかる目を見るらむ。わが心ながら、かかる筋におほけなくあるきじき心のむくいに、かく来し方行く先の例となりぬべきことはあるなめり。忍ぶとも世にあること隠れなくて、内裏に聞こしめさむをはじめて、人の思ひ言はんこと、よからぬ重べの口ずさびになるべきなめり、ありありて、をこまましき名をとるべきかな」と思しめぐらす (『全集』(1) 244頁)

この「かかる筋におほけなくあるまじき心」というのは、葵巻に「けしからぬ心のおほけなさ」とあるのに照応するもので、光源氏の藤壺への懸想を意味する。篠原昭二氏は、「夕顔巻での語り方はあくまで醜化されている。このことは御息所とのことを背景に置いたことである」「女を奪われたことを自分の藤壺との情事の報いと考えていることは、作者が夕顔の死に与えた意味を推測する上で重要である」と指摘されているが、一面だけをと



らえられた解釈のように思う。夕顔巻と葵巻における六条御息所物語が、かく対偶的に語られ、照応していることの意味は重要であり、夕顔巻は、六条息所物語が具体的に語られている葵巻の記述を、その背景にふまえて醜化、挿入されていると考えなければならぬのである。だが、このことは、玉鬘系物語後記説を実証、修正しようとした旧稿の意図を承るものではない。夕顔の巻の六条御息所物語が、葵巻の記述を前提としているか、まだ執筆以前の構想の段階であったかは問うべくもないが、その物語が具体化され、形象化された以後、あるいは同時に、ともかく、同じ次元に立って書かれているという事実が重要なのである。このように、夕顔の巻で、醜化的、挿入的に語られている六条御息所物語が、桐壺の帝、藤壺とのかかわりの中で語られていることは、葵巻の記述に照応するものではあるが、それは主筋の物語につないで語ろうとする傍系の物語の語り口であり、夕顔の巻の空蟬物語は、更にそうした傍系の物語をもつなぎとめていこうとする意図をもつものであった。それはただ一つの背景の物語とどまるものではなく、藤壺を永遠の女性として思慕する光源氏の心情に貫かれたもので、そうした点で物語の主題と深くかかわるものであった。

旧稿で、

敬語の明確な使用を通して、高貴な女性で、しかも六条に住むという女性の素姓は、二条の后をめぐる伊勢物語の構成を考えても類推することができるように、きわめて特殊な、具象性をもつものであったと考えられる。そればかりではなく、四ヶ所の物語の断片をつなぎ合わせていくと、異常な鮮明さで一つの物語が浮びあがってくるような書き方をしている（「源氏物語とその周辺」 138頁）

と指摘したことがある。伊勢物語は既に承平の頃に「業平の実録として紀貫之に受け取られていた」（市原愿「伊勢物語生成序説」 明治書院 139頁）「業平の陽成朝に見られた異常とも思える昇進の史実の背後に、二条後の殊遇を見、后が入内後、歌への情熱に生き、歌人を近付け皇室関係では数少ない古今集歌人となり得たという線を結んで、時

を廻行させてゆくならば、そこに業平と高子の愛の世界を想定し得ようと思うのである」(同 225頁) と指摘されている。由良琢朗氏は、「高子にとって、心の燃える愛をそそげる男性は、業平であって、清和天皇は、そうした存在ではなかった」(『伊勢物語人物考』 明治書院 41頁) こと、業平の死後、高子の幽仙・善祐との乱れは、良房の権勢への反発、解放を求める悶えであったと考えられている。福井貞助氏は、伊勢物語六五段が「3〜6段、東下り、76段などから汲み取れる二条后物語に照応する、暗に業平・二条后と目される男女の物語を形成している」(『伊勢物語生成論』有精堂 457頁) ことを指摘されている。

平安時代における伊勢物語の享受が、鎌倉時代の注釈書に見られるように、業平の実伝を物語化したとする考えに深くかわるものであったことは、片桐洋一氏(『伊勢物語の研究』研究篇 明治書院)の指摘されるごとくである。「古今集、大鏡、新古今集以下の勅撰集、そして鎌倉時代の勢語注釈書というようにたどり得る平安時代から鎌倉時代にかけての伊勢物語享受の実態」(同 471頁) を、「各章段の最後の部分の「注的な文章」の中」に見られた氏は、享受の実態を現在の伊勢物語自体の中に確認されている。伊藤楓夫氏(『伊勢物語の享受に関する研究』第一巻 桜楓社)は、源氏物語が、様式の系譜として伊勢物語の正統の継承者であるとし、『源氏物語事典』(岡一男 春秋社)を引かれる。総合の巻で、『伊勢』と『正三位』が合わせられた時の藤壺の詠、「「みるめこそうらぶれぬらめ年経にし伊勢をのあまの名をや沈めむ」によって大勢に逆らって『伊勢』に対して持っていた強い関心と深い理解を知る」(同 132頁) といわれる。平内侍の詠、「伊勢の海の深き心をたどらずに跡と波や消つべき」の下の句と、藤壺の「年経にし伊勢をのあまの名をや沈めむ」の句の対応に、確かに「時流にかかわらず」古典趣味的な作者の伊勢物語への深い関心と理解とを知ることができるが、「世の常のあだごとの引きつくるひ飾れるにおされて、業平が名をやくたすべき」という総合の詞に、片桐氏の指摘されるような、業平の実伝を物語化したとす

る伊勢物語の享受のありようを認めなければならぬ。そこには、やはり物語享受の時代相の反映が見られると考  
えなければならぬのである。

旧稿の「二条の后をめぐる伊勢物語の構成」とは、東下りをめぐる二条の后との恋物語を「京に、その人の御も  
とに」（九段）という一語の敬語表現に読みとっていたのではないかと考えての指摘であった。だが、この本文は、  
天福本、武田本、流布本に限られたもので、「御もとにとて」は、古本系統の承久本、伝肖柏筆本、時頼本、大島  
本系統の大島本、神宮文庫本、塗籠本系統の不忍文庫本、群書類従本、丹表紙本、伝民部卿局筆本には「もとにと  
て」となっている。大津有一博士の「伊勢物語に就きての研究」補遺篇によって池田博士の校本篇を補うと、一誠  
堂伝為相筆本第一部、泉州本は、「御もと」。武者小路本には「御定」、「二条后也」の注記がある。「冷泉家流  
伊勢物語抄」にも「二条の后のかたへとて文書きてつくるなり」（片桐洋一、「伊勢物語の研究」資料篇 310頁）とある。  
ところが、「伊勢物語愚見抄」になると、「此人も二条の后を申といふ説あり。誰にてもあらんかし」（同 516頁）  
となり、「伊勢物語肖聞抄」「伊勢物語宗長聞書」などになると、誰ともわからない。「やんごとなき人」の許へ  
だというように注記が変わっていく。こうした注記の変化は、やはり伊勢物語の享受の変相によるものであったと考  
えなければならぬ。このように注釈史の断片をたどっただけでも、そこに享受の複雑な変相や、多様な知識を背  
景にして読まれてきた享受の実態を考慮しなければならぬし、「御もと」という本の流伝がどのような形でなさ  
れてきたのか、その原形がどうであったかなど考慮すべき多くの問題を含んでいるが、「二条の后」とする読まれ  
方が、平安時代から鎌倉時代にかけてなされていたことも認めなければならぬ。源氏物語絵合の巻の伊勢物語享  
受のなかには、そうした享受のありようを見ていかなければならぬことを示唆している。土佐日記、源氏物語、  
大鏡などを資料とした伊勢物語の享受が、中世の注釈書の類に深くかかわる享受のありようを示していることは、

源氏物語も、また、そうした享受の方法にたえ得る作品として作られていたことを示す。帚木の巻冒頭の本文は、従来本系、主筋の物語に対する傍系、副筋の物語という構成的な意味をもって読まれてきたが、それは、実伝の物語に対する虚構の物語という、新しい物語的世界の達成をめざすものであったと考えることもできる。そして、それは、実に蜃巻の物語論と完全に照応するものであった。

「更級日記」は、夕顔と浮舟の女君への限らない憧れのなかに、物語作者が企図した構想を読みとっていたのはなかったか、そういう享受のありようについては、既に考えてきた。二人の女性には、構想や表現の上で、明確な対応が見られる。今井源衛氏（「浮舟の造型」―夕顔・かぐや姫の面影をめぐって―）（岩波書店「文学」57年7月号所収）の論は示唆にとむが、手習の巻に、

「何のさる人をか、この院の中に棄てはべらむ。たとひ、まことに人なりとも、狐木霊やうの物の、あざむきて取りもて来たるにこそはべらめ。いと不便にもはべりけるかな。穢らひあるべき所にこそはべめれ」と言ひて、ありつる宿守の男を呼ぶ。山彦の答ふるもいと恐ろし。（「全集」271頁）

とある。傍線部は夕顔の巻の場面と照応する。それを意識して語っている。浮舟の失踪は、人々には「狐木霊 やうの物の、あざむきて取りもて来たる」、「天狗木霊などやうのもの、あざむき率てたてまつりけるにや」（夢浮橋 同 362頁）と、妖物のしわざと考えられていた。しかし、僧都の加持により、物の怪が現われ、浮舟から去る時の物の怪の詞に、

「おのれは、ここまで参うで来て、かく調ぜられたてまつるべき身にもあらず、昔は、行ひせし法師の、いさかななる世に恨みをとどめて漂ひ歩きしほどに、よき女のおまた住みたまひし所に住みつきて、かたへは失ひて、我いかで死なん、ということ、夜昼のたまひしに頼りをえて、いと暗き夜、独りものしたまひしをとり

てしなり、されど、観音とざまかうざまにはぐくみたまひければ、この憎都に負けたてまつりぬ。今はまかりなん」とののしる。(『全集』283頁)

とある。浮舟をとり殺そうとした怨霊はこの世に執着を残して死んだ憎の怨念が、宇治の八宮邸にとどまったものであった。それは夕顔の巻の某院にとどまる「女」の怨念に対応する「男」の怨念による死霊なのであった。

夕顔を殺す物怪の詞に、

「おのが、いとめでたしと見たてまつるをば、尋ね思ほさで、かくことなることなき人を率ておはして、時めかしたまふこそ、いとめざましくつらけれ」とて、この御かたはらの人をかき起こさむとすと見たまふ。(『全集』238頁)

とある。この詞の解釈をめぐっては先に引用したように篠原昭二氏にすぐれた論があり、深沢三千男氏(『源氏物語の形成』桜楓社)に委曲を尽されての論もあり、既に加うべきものはないように見える。三谷栄一博士も、

光源氏が「いとをかしげなる女」の姿をした妖怪と見たのは、明らかに光源氏の良心にとつては六条御息所以外に考えられない。光源氏は六条御息所を訪問する途中で夕顔君と和歌を贈答し、知り合うのであって、六條御息所に対する良心の呵責、「心の鬼」が「物のけ」となって現われたのである。(『夕顔物語と古伝承』有斐閣

講座「源氏物語の世界」第一集 216頁)

とされ、光源氏はそれを「自分の良心の呵責だとは自覚せず、荒廃した邸に住む妖怪だと思い込んで」しまったと解されている。確かに、四十九日の法事の、あくる夜の夢に、

ほのかに、かのありし院ながら、添ひたりし女のさまも同じやうにて見えければ、荒れたりし所に棲みけん物の我に見入れけんたよりに、かくなりぬることと思し出づるにもゆゆしくなん。(『全集』268頁)

とあるのを読んでいくと、そのように考えなければならぬように思われてくる。「岷江入楚」の、

御息所の有ましき契をさまさまいひなひかしていくほとなくさしもなき人に思ひうつり給所をねたく思ひ給ふ  
成へし

というような考え方が、現代の注釈書に装われていく姿をそこに見ることができようと思う。物怪の詞の解釈について、旧稿で、

諸説があるが、それらは、六条わたりの高貴な女性が物怪となつての詞と解そうとすることから生ずる矛盾なのである。某院にとどまる女の怨霊が、六条わたりの高貴な女性と夕顔を對比させているのだと考えれば、諸説の矛盾は一掃され、浮舟物語との完全な対応が成り立つのである。(「源氏物語とその周辺」 138頁)

と述べたことがある。「対比させている」と抽象的な言い方をしたのは、解決しなければならぬ、いくつかの問題があったからであるが、藤井貞和氏(「六条御息所の物の怪」有斐閣 講座「源氏物語の世界」第七集)が指摘されるように、物怪の考え方には、複雑な思想や発想の混在が見られる。

光源氏は、夕顔がうばわれたのは、「荒れたりし所に棲みけん物の我に見入れけんたより」と考えている。荒れていた所に住んでいたという魔物が、自分に魅入つたついでだという。「棲みけん」の「けん」は、従来、連体形が婉曲の意に用いられたものとして現代語訳しなかったり、「いたらしい」という風に、ただ、過去の推量の意に解したりしてきたが、二つの「けん」を重ねて用いる用法は意識的だと考えなければならない。かなり意図的な用法である。

「見入れけん」の「けん」は連体形の婉曲表現だが、「棲みけん」の「けん」と微妙に照応する。ここは、怪異な昔物語をふまえていると考えるべきだから、連体形が過去の伝聞を表わす用例だと解すべきではないか。廃院の怪

を、怪異な昔物語に重ねて見ているのである。「見入る」とは、「執念をもって取りつく。(神や霊などが)のりうつる」ことで、魔性のものは、高貴な美しい人の魂をほしがって取りつくのだった。

須磨の巻の巻末に、

さは海の中の竜王の、いといたうものめでするものにて、見入れたるなりけりと思すに、いとものむつかしう、この住まひたへがたく思しなりぬ。(『全集』 210頁)

とある。光源氏の美しさに「ひどく物愛でをして」魅入ったのである。魅入られた源氏は、わが身の危険を感じる。夕顔の巻は、「妖怪が光源氏を「めでたし」と見て、「見入れ」た、源氏はそのように考えていた。『全集』の頭注は、

夕顔を取り殺した物の怪の正体を、源氏はここで院に棲んだ霊物と推定する。夕顔急死の条では、この魔性のものと六条御息所らしい貴婦人とを二重写しに描き、その謎の判断は読者にゆだねてあった。(268頁)

とする。「見入る」とは、「妖怪自身が光源氏に思いをかけていて、しかも目前に取得のない女(夕顔)を寵愛する姿を見せられて、憤っている」のではなく、源氏の高貴な美しさに魅入って取り殺そうとしたが、宿世が強くそれはできない。傍の夕顔を取り殺した。玉上博士(「評釈」)が指摘されるように、夕顔の側に、物怪に憑き入れられる弱さ、隙があったからであり、深沢三千男氏が池田弥三郎氏の説を引かれて指摘されるように、光源氏の失言も「妖怪を呼出して、その出現のきっかけを作ってしまった。そればかりか、先に引いた手習の巻で「昔は、行ひせし法師」が、些細な恨みを現世に残して成仏できずにさまよっているうちに、美しい女人が大勢住んでいる宇治の八宮邸に住みついて、大君をとり殺し、浮舟をさらっていったとする。『全集』の頭注は、大君臨終の場に物怪のとり憑いた様子はなく、新しい構想と先行の巻とのつながりをつけるための記述だと指摘するが、八宮邸に恨

みがあって住みついたのではないという点が大切である。八宮邸に住む怨霊のなかには、宮に直接恨みを持つのではない、こういう霊もいたのである。調伏の時、いろいろと取り憑いている怨霊は退散したが、最後まで執念く残る怨霊という言い方が見える。やはり、「いろいろと取り憑いている怨霊」のなかに、こうした類の怨霊の存在も考えなければならぬのではないか。夕顔の巻に照応する手習の巻の怨霊が、修業僧の、こうした男の怨霊であったことは、夕顔を取り殺した怨霊も、やはりこうした類の怨霊であったと考えるべきことを示唆しているのではないか。確かに、葵巻で夕霧の出産間近に葵上に取り憑いて源氏に思いを訴え、若菜下の巻で、危篤状態の紫上に取り憑き、柏木の巻で、女三宮受戒の時に取り憑いた六条御息所の怨霊とのかかわりを、何らかの形で考えていくことが、夕顔の巻の対偶的な物語の構成から考えても妥当のように思われる。そうした考えが確かに定説化しはじめている。だが、筆者は、そのような読み方のなかに、何か現代の、装われた新しい解釈を感じもする。源氏物語の対偶意識は、物語享受の立場からも、もっと重視されなければならないようにも思われる。

夕顔を取り殺す「いとをかしげなる女」、荒廃した院に棲む霊物と、夢の中の御息所の姿形とが二重写しに語られていること、物の怪の言葉の陰鬱で威嚇的、凶悪の気配、「めざまし」は卑者を見下す階級意識を潜める場合が多いという「全集」の頭注を追っていくと、二重写しに描きながら、その謎の判断を読者にゆだねた、とする判断がどのようなものであるかはいう必要もあるまい。だが、物語は、そんな風に読んでいくように書かれているのだろうか。だいいち、「全集」の校注者が、「「おの」は、この物語では、僧・男子・老人などの自称で、若い女は用いない」と指摘されるのは、何を根拠にされている発言なのであろうか。こういう解釈を示す注釈書の類は、他にいくらでも拾うことができる。深沢三千男氏も「「己の」は、女性が使うにしては少し変な言葉である。源氏物語でも殆んど男性が使った例で」、紫の君の祖母尼君、横川僧都の妹尼が使っているくらいで、「いくら生霊化しているからといっても、六条御息所の使うことばとしては、ふさわしくないようである」（『源氏物語の形成』328頁）とさ



れる。

「新釈本」の索引によれば、「おの」の用例は、三十例を教えるが、女性に対して用いられたもの十五例、男性に対して用いられたもの十三例、男女両方に用いられたもの二例である。うち、若い女性に対して用いられているものは七例である。葵の巻の、

(1)、若き人々、「いでや、おのがどち引き忍びて見侍らむこそはえなかるべけれ（「新釈」 327頁）

(2)、若き人人は、所々に群れあつ、おのがどちあはれなる事どもうち語らひて（369頁）

の二例は、若い女房達を、曙標の巻の、

(3)、おのが心をやりてよしめきあへるも、うとましようおぼしけり（131頁）

は、遊女を指しもの。若菜上の巻の、

(4)、おのがどちの心より起れる懸想にもあらず（306頁）

は、光源氏と女三宮を、竹河の巻の、

(5)、大空の風に散れども桜花おのがものとぞかきつめて見る（403頁）

は、姫君達の「花の争ひ」で、右方の童女が読んだ歌。早蕨の巻の、

(6)、峯の霞の立つを見捨てむことも、おのが常世にてだにあらぬ旅寝にて、いかにはしたなく人笑はれなる事もこそ（201頁）

は、宇治の中君を。浮舟の巻の、

(7)、風のおともいと荒ましよう霜深き暁に、おのがきぬきぬも冷かになりたる心地して（107頁）

は、匂宮と浮舟を指す。こういう用例を拾っていくと、「若い女は用いない」という指摘はいかなものであろう

か。特に、(1)、(5)の用例は会話文や和歌に用いられたもので、従来の考え方が誤りであることを示しているようである。このように、夕顔の巻の物怪の詞は、若い女性の詞と考えても、少しも問題はない。ただ、別本系統の陽明家本では、物怪の詞は「まろが」となっている。「まろ」について『国語大辞典』の補注に「中古の文献では、老幼男女、貴賤にかかわらず、広く用いられている。しかし「今昔物語」などでは、主として女性が使う語となっているようであり」と指摘されている。このことは、陽明家本の本文の性格を知る上で、きわめて重要な示唆を与えているように思う。

従来「いとをかしげなる女」は、「実にきれいな女」(玉上「評釈」)「たいへん美しい様子の女」(『全集』)「ひどく美しげな女」(『大系』)などと訳されてきた。夕顔の巻の連体形の用例で、他の二例は次のように用いられている。

(1)、黄なる生絹の単袴長く着なしたる童のをかしげなる、出で来てうち招く。(『全集』 211頁)

(2)、をかしげなる侍童の姿好まじう、ことさらめきたる指貫の裾露げに(222頁)

(1)は夕顔の侍女、(2)は六条御息所の侍童であるが、この間には、明らかに物語の対偶的な構成が見られる。「ただ、「童」と「侍童」の語に、二人の女性の身分の違いが示されている。形容動詞「をかしげなり」の語意は、どのように考えられてきたであろうか。三省堂『例解古辞典』は、「いかにも「をかし」と感じられるようす」とし、「をかし」のすべての意味がそのまま「をかしげなり」に移行していくようにとらえる。岩波、角川の古語辞典も、こういう立場に立つのであるうか、形容動詞の項目を立てていない。旺文社、小学館は「かわいらしい。いかにも趣がある」、三省堂『新明解』は、「魅力的だ。魅惑的だ。かわいらしい」、『国語大辞典』は「①面白みや趣のあるさま」「②正常でないさま。怪しげなさま」とある。この語は辞書によってかなり扱い方や意味に違

いのあることがわかる。形容動詞に転じる場合、形容詞の意味の一部分だけがずれこんで用いられていくものがある。この語は、やはりそういう類の語であったように見える。「新釈本」索引によって確認し得た源氏物語に用いられている「をかしげなり」の用例百七例について調査の結果を分類して示す。巻名の下にある算用数字は、「新釈本」の頁数である。巻名は略号に従った。同一頁の重複は、その頁中の別の行に用例のあることを示す。

第一類 女性の登場人物に対して用いられているもの、五四例

(イ)、九例用いられているもの

(1)、(イ)、浮舟。○東50、○東52、○浮103、○浮121、○蜻165、○宿323、○手260、○東17。

(ロ)、浮舟の髪。○手284。

(ロ)、五例用いられているもの

(2)、紫上。○賀282、○玉399、○御304、○御307、○須23。

(3)、(イ)、朧月夜。○宴312、○賢438、○須17。

(ロ)、朧月夜の声。○宴312。

(イ)、朧月夜の情報。○葉下101。

(4)、玉鬘。○胡31、○螢49、○玉360、○初5、○真179。

(5)、(イ)、宇治中君。○宿274、○椎87、○総140。

(ロ)、中君の情報。○宿260、○椎50。

(イ)、四例用いられているもの

(6)、(イ)、宇治大君。○総99、○総181。

(四) 大君の髪。○ 惟 88。

(五) 大君の消息。○ 橘 30。

他に「中君」「大君」を総称するもの

○ 橘 6、○ 総 155。従って中君は七例、大君は六例となる。

(7) 雲井雁。○ 霧 281、○ 横 84、○ 横 184、○ 少 329。

(二) 三例用いられているもの

(8) (イ) 女三宮の尼姿。○ 柏 152、○ 鈴 195。

(ロ) 女三宮の声。○ 菜下 70。

(9) 葵上。○ 桐 30、○ 葵 344、○ 葵 349。

(三) 二例用いられているもの

(10) 軒端萩。○ 空 96、○ 空 97。

(11) (イ) 秋好中宮。○ 絵 189。

(ロ) 秋好中宮の筆跡。○ 梅 232

(12) 女二宮。○ 蜻 208、○ 寄 319。

(二) 一例用いられているもの

(13) 源氏の想い人、中將の君。○ 幻 336。

(14) 六條御息所の尼姿の髪。○ 滯 135。

(15) 女二宮の夕霧への消息。○ 霧 212。

06、物怪の女。○顔 135。

第二類、男性の登場人物に対して用いられているもの、十九例。

(1)、六例用いられているもの

(1)、夕霧。○野 110、○少 335、○常 74、○菜上 382。

(2)、夕霧の笛の音。○少 314。

(3)、夕霧の筆跡。○少 340。

(2)、(1)、光源氏。○顔 142、○紅 283。

(2)、光源氏の情報、手習、絵、笛の音など。○末 266、○紫 226、○椎 46。

(2)、四例用いられているもの

(3)、(1)、匂宮。○御 305。

(2)、匂宮の浮舟への情報、絵など。○浮 126、○浮 104、○浮 103。

(2)、三例用いられているもの

(4)、(1)、薫君。○横 188、○横 188。

(2)、薫の手紙。○浮 128。

第三類、児、童に対して用いられているもの、二十五例。

(1)、誰と素姓が明らかにされているもの

○帚 74、○夢 326、○横 184、○霧 292、○竹 398、○竹 423、○少 334、○少 337、○少 337、○霧 296、○菜下 23、○匂 362、

○菜下 110、○菜下 115。他に光源氏の孫達の物の音。○菜下 33。

(2) 誰と素姓が明らかにされていないもの

。檀 288、。顔 108、。顔 119、。紫 171、。葵 334、。檀 288、。早 214、。浮 92、。紫 224、。落 128。

誰と、素姓が明らかにされているものの半数は、夕霧の子供達について用いられているものである。

第四類、物について用いられているもの、八例。

- (1)、明石上方の琴、。初 6。(2)、玉鬘方の和琴、。常 75。(3)、紫上にさしあげる檜破籠、。葵 374。(4)、末摘花が侍従に贈る箱、。蓬 162。(5)、女絵ども、。総 162。(6)、俊蔭の物語の絵、筆跡、。絵 194。(7)、経仏の飾り、関の具、。初 12。(8)、春宮の御方の猫、。菜下 3。

この調査を通して明確にいい得ることは、「をかしげなり」という語が、「かわいらしい」「いかにも趣がある」「魅力的だ」などの意味を表わすものとして、それほど注意して読まれてこなかったのではないかとということである。この語が、男性の登場人物としては、光源氏、夕霧、匂宮、薫君に限られて用いられているという事実は、きわめて重大な問題を示唆しているように思われる。女性の登場人物に対しても、浮舟、中君、紫上、朧月夜、玉鬘、雲井雁、女三宮、葵上など、ごく限られた人々へのみ用いられている語であることがわかる。結論を、きわめて大胆な形で提示すると、「いとをかしげなる女」に、光源氏も、物語の作者も、六条御息所を重ねていたのではないということである。古注釈以来、そこに何らかの形で六条御息所の関与を認め、現代のほぼ定説化しつつある源氏学の学説が、やはり装われたものであり、本来の物語享受のありようとは違ったものであることを論じるには、もう少し、「をかしげなり」の語の内面に立ち入って考えてみなければならぬ。

形容詞「をかし」の語源については、従来、「普通と違って、笑うべきさまである」、「普通と違って格別なおもむきがあるさま。賞すべきさまである。魅力のあるさま」という二つの面から、別々の語源が考えられてきた。

大野晋博士（『日本語をさかのぼる』岩波新書）は、「をかし」の古い例が「趣がある、かわいい、美しい、魅力があるなど、対象に対して好意的な状況」についていうものがきわめて多く、「変だとか馬鹿馬鹿しいという意味」がないことから「チカシとヲコとは意味の氣質が連続しない」とされ、一つの語源をたどろうとされる。そして、「寄ルからヨラシ、行クからユカシ、を当ルからアタラシ」が作り出されたように、「招きたい、喜んで迎え入れたい」という意味が根本」であり、「招（を）く」意味から展開して、「好ましい、面白いという意味になり、面白い内容は幅が広いので、相手の様子が醜くて面白いとか、変っていて面白いとか、広く陽気に笑う場合にヲカシを用いた」（77頁）とされる。

源氏物語に用いられている百余例の「をかしげなり」の用例を調査すると、児、童などに、「かわいらしい」という思いをこめて用いられているものが、二十五%近くあり、紫上に「若うをかしげなり」（玉<sup>399</sup>）、女三宮の尼姿に「うつくしき子供の心地して、なまめかしうをかしげなり」（柏木<sup>152</sup>）、その声を「若くをかしげなる」（菜下<sup>70</sup>）、夕霧の笛の音を「若うをかしげ」（ただし河内本などには「若ううつくしげ」とある）（少<sup>314</sup>）、夕霧に、「見る目は人よりけに若くをかしげにて」（葉上<sup>382</sup>）、源氏に「をかしげに若き人」（紅<sup>238</sup>）というように、そこはかとないあどけなさ、かわいらしい魅力、親しみ深い魅力などを表わす場合が多く、朧月夜の魅惑的、魅力的な美しさの中にも、そうした心情が深く秘められているように見える。そして、源氏物語の用例について調べていくと、そこに意味の「根本」があるように思われる。

葵上に対する用例は三例であるが、桐壺の巻の終りに「大殿の君、いとをかしげに、かしづかれたる人とは見ゆれど、心にもつかず覚え給ひて、をさなき程の御ひとへごころにかかりて」とあるのは、「たいせつに育てられた、いかにも美しげな人だと思われるけれども」（『全集』）「立派な人」（『評釈』）というように解されているが、

そういう意味ではないと思う。かわいらしく、親しみを感じさせる魅力を期待していた、そこに光源氏の女性に対する一つの理想があったけれども、意外に取りすましているところが気に入らなかったというのである。大臣家の娘として、大切に育てられた姫君だから、おおらかな、かわいらしい人だとは思われる、一見、そんな風に見えるのだが、というので、葵上は現実には「をかしげなる」人ではなかったのである。源氏が姫君にそういう期待を抱くことが、実は無理なことだったのに。だが葵上は、臨終に当って、はじめて心うちとけ、なごむ。源氏にうつし身の女性を感じさせる。葵上が「をかしげなる」人になるのは、出産の床、病床に臥す人になってからである。

いとをかしげにて、御腹はいみじう高うて臥し給へるさま、よそ人だに見奉らむに心乱れぬべし。(葵344頁)

いとをかしげなる人の、いたう弱りそこなはれて、あるかなきかの気色にて臥し給へるさま、いとらうたげに苦しげなり。(同、349頁)

このように読んでくると、葵上が「をかしげなる」人であったというのではない。葵上という一人の女性を通して、女の理想像の一面を「をかしげなり」として追求しようとしていたというべきだろう。そればかりではない。紫上や大君にも病に臥す女人を「をかしげなり」と表現する。

限りもなくらうたげにをかしげなる御さまにて、いと仮初に世を思ひ給へる気色、似るものなく心苦しく、すずろに物がなし。(御法307頁)

御ぐしはいとこちたうもあらぬ程にうちやられたる、枕より落ちたるきはの、つやくとめでたうをかしげなるも、いかになり給ひなむとするぞと(総角181頁)

六条御息所は、「をかしげなる」女人ではなかった。だが、やはり臨終に近く、病床に臥すようになると、その尼剃の髪が「をかしげ」で、絵に描いたようだという。ひとしお心にしみじみと感じるという。



心もとなきほどの火の影に、御髪いとをかしげに、花やかにそぎて寄りゐ給へる、絵にかきたらむさまして、  
いみじうあはれなり。(落標135頁)

ここも、従来のように、ただ、美しいというのではあるまい。くっきりと尼剃ぎに切りそろえ、物に寄りかかっている、今は限りの姿に、普段の御息所とは違った、ある親しみをもった深い魅力を感じる。あいよることのできなかった、二人の魂が、斎宮の後見という遺言を通して、ともかくもあるなごみのひと時をもつ。それは、死に行く者への鎮魂の賦でもあった。このように読んでくると夕顔をうばった物怪に、光源氏も、物語の作者も、六条御息所とのかかわりは考えていなかったことがわかる。源氏物語は、本来、そんな風に享受されていたのではなかっただろうか。

「をかしげなり」が、登場人物に対して用いられる場合、魅惑的、魅力的な妖艶さや、いかにも趣がある様子などに用いられていると見られるものも確かに存在するが、どうしてもそのように解さなければならぬ用例は、きわめて少ない。物について用いられている第四類の用例八例も、葵<sup>374</sup>、菜下<sup>3</sup>などの二例は、やはり「かわいらしい」という意味をもち、形容動詞化していく過程では、形容詞「をかし」の語意の、こうした意味が「根本」となって転成していったものと思われる。

このように考えてくると、「おの」「いとをかしげなる女」には、若い女性や、幼い女の妖怪、物怪を想定していくべきもののように思われるが、最後に残された問題は「めざまし」に、「卑者を見下す階級の意識を潜める場合が多い」という指摘と、夕顔の巻に六条御息所の物語が対偶的に語られている意味をどのように考えるべきかという点である。

『新釈本』の索引によって、源氏物語に用いられている「めざまし」の用例を調査する。確認できた六十八例に

ついで集計分類すると次のようになる。(「(a)源、空蟬。」は源氏が空蟬を「めざまし」と思うことを示す)

第一類、心外だ。気に入らない。あきれたの意に用いられているもの

(イ)、十四例用いられているもの

(1)、光源氏 (a)源、空蟬。○空 93、○帚 90。(b)源、常陸介。○関 180。(c)源、頭中将。○絵 190。(d)源、柏木。○柏 155。(e)源、下賤な者。○須 44。(f)源、入道の代作文。○明 80。(g)源、明石御方が良清の思い人であったこと。○明 82。(h)源、紀伊守邸のもてなし。○帚 74。(i)源、碓の音。○顔 127。(j)源、尼君達。○紫 210。(k)源、夕顔 (侍女)。○顔 112。(l)源、低い身分の女。○胡 30。(m)源、中将の君。○顔 119。

(ロ)、七例用いられているもの

(2)、紫上 (a)紫上、明石御方。○薄 232、○玉 393、○菜下 53、○薄 242、○菜上 375。(b)紫上、明石姫君。○松 228。(c)紫上、源氏 (女三宮)。○菜上 305。

(ハ)、五例用いられているもの

(3)、朱雀院 (a)朱雀院 (女三宮)、源氏。○菜上 286、○菜上 283。(b)朱雀院、柏木。○菜上 379。(c)朱雀院、婿選  
び。○菜上 290。(d)朱雀院、女の宿世。○菜上 287。

(4)、落葉宮 (a)落葉宮、柏木。○菜下 73、○霧 224。(b)落葉宮、夕霧。○霧 220、○霧 222、○霧 227。

(ニ)、三例用いられているもの

(5)、夕霧 (a)夕霧、乳母。○少 332。(b)夕霧、落葉宮。○霧 222。(c)夕霧、儒者。○少 307。

(6)、女三宮 (a)女三宮、柏木。○菜下 66、○菜下 83。(b)女三宮、紫上。○菜下 305。

(7)、頭中将 (a)頭中将、四君。○賢 434。(b)頭中将、女房達。○少 317。(c)頭中将ら。夕霧。○霧 290。

(付) 二例用いられているもの

(8) 右大臣方 (a) 右大臣、源氏。○賢441。 (b) 弘徽殿女御、源氏。○賢444。

(9) 玉鬘 (a) 玉鬘、少将。○竹408。 (b) 玉鬘一行、家主の法師。○玉373。

(10) 薫、薫、中君。○寄266、○寄284。

(一) 一例用いられているもの

(11) 八宮、姫君達への懸想人。○椎52。

(12) 女御達、桐壺更衣。○桐1。

(13) 匂宮、八宮邸侍女。○浮101。

(14) 帝、薫(内親王婿)。○寄220。

(15) 葵、源氏。○賀284。

(16) 大宮、夕霧。○霧275。

(17) 柏木、宰相の君。○袴169。

(18) 大殿女房達、紫上。○賀294。

(19) 隨身、女房達。○顔113。

(20) 作者、末摘花邸に放牧する童。○蓬151。

(21) 惟光、夕顔。○顔133。

(22) 近江君、五節。○常91。

(23) 老女房、源氏(女三宮)。○菜上303。

(24) 小侍従、柏木。○葉上 391。

(25) 乳母、玉鬘への懸想人。○玉 361。

(26) 大殿の御方、匂宮。○寄 306。

(27) 物怪、源氏。○顔 135。

第二類、目がさめるほどすばらしい。りっぱだの意に用いられているもの

(1) 源、明石御方。○明 94。

(2) 源、中将君。○顔 119。

(3) 紫上、明石御方。○裏 262。

(4) 女房達、明石尼君。○葉下 21。

(5) 若い女房、蕪。○寄 234。

(6) 作者、冷泉や夕霧。○裏 272。

形容詞「めざまし」は、一般に、辞書類では第一類、第二類で分類した意味に従って説明されている。ところが、三省堂の「新明解」では、

事の意外に「目がさめるほどだ」の義であるが、目下、後輩等、また血統、階級、身分、家柄等の上の者が下の者に対し、腹を立ててけなす場合と、逆にほめる場合とにわかれる。

とある。この説は、管見に入ったものでは小学館の「古語辞典」がうけ、「平安時代の作品をみると、身のほどを知らない失礼なことだ。あるいは、身分の低いわりには大したものだという感じを伴い、善悪の両方の意味に使われている」と「参考」に述べている。「全集」頭注も、これによる。源氏物語の全用例を通じて、この説にはみ出

すかと見られるものは、第一類、第二類を通じて、ほぼ一〇%弱で、その他はいずれもこうした語意を伴うように見える。但し、第二類の「目がさめるほどすばらしい。りっぱだ」の意味に用いられているものは六例中、三例までがはみ出すかと見られ、五〇%に達する。褒める場合には、比較的身分や年令などに関わりがなかったようにも思われる。「新釈」本による。

(1)、「めざましき、女の宿世かな」と、おのがじしはしりうごちけり。(葉下21頁)

(2)、「御かたちいよいよねびととのほり給ひて、ただ一つものと見えさせ給ふを、中納言のさぶらひ給ふが、こととならぬこそめざましかめれ。(裏 272頁)

(3)、「猶めざましうおはすかし。心をあまりをさめ給へこそ憎けれ」(寄 234頁)

(1)は、女房達が明石尼君の宿世に陰口を言うところ。(2)は、作者が冷泉帝や夕霧をたたえていうところ。(3)は、匂宮二条邸の若い女房達が薫を褒めていうところ。この三例は、身分や年令などには関係がないと見られる。次に、第一類の「心外だ。氣にくわない。あきれた」の意に用いられているものの中から用例を引く。

(4)、「わがいとよく思ひ寄りぬべかりし事を、譲り聞えて心広さよ。など、めざましう思ひをる。(顔 133頁)

(5)、「一日はつれなしがほをなむ。めざましうと許し聞えざりしを、見ずもあらぬやいかに。(葉上391頁)

(6)、「北面だつ方に召し入れて、君たちこそめざましくもおぼしめさめ、下仕などやうの人々とだに打語らばばや。(袴 169頁)

(4)は、源氏の夕顔への愛の甚しさを、惟光がめざましと思うところ。(5)は、女三宮方の小侍従が、柏木をめざましと思うところ。侍女ではあるが、女三宮を笠に着た表現と考えると、身分関係に関わってくる。(4)も、考えの視点を移すと、笠に着た表現ともなり、身分関係に関わってくる。(6)は、柏木が玉鬘を訪問、恨み言を述べる物語。

玉鬘の女房の宰相の君に、柏木が「あなたはお嫌いになるでしょうが」というところ。これらの三例が一応、第一類のなかで身分や年令などに直接関係のないと見られるものである。ただ、第一類、(イ)の(4)の(b)と逆のものが、第一類(イ)の(5)の(b)に見え、身分や年令関係といっても、かなり相対的な面があり、全く固定化しているわけでもない。だが、「古語辞典」などが、第二類の意味を表わすものとして用例に引く夕顔の巻119頁、源氏が六条御息所の侍女の中將の君に、「髪のさがりば、めざましくも見給ふ」とあるのを、「身分の低いわりには大したものだ」という分類が適切かどうか、疑問があるようにも思う。御息所の上席の侍女で、女主人の代作歌ともいふべきものを詠む立場にあった侍女を、こういう物語の場面で、そうした意識をもって扱っていたかは、やはり疑問で、先にあげた(6)の用例には、それに通じていく意識が見られるように思う。それはともかく、夕顔の巻の「いとめざましくつられれ」という物怪の詞に、何か笠に着た言い方を感じとるのは、これまで検討してきた源氏物語の用例からすれば、きわめて自然のように思われる。誰を笠に着た物言いなのか、怨霊説によれば、六条御息所その人であったことになるが、また別の解釈もできるように思う。

「いとをかしげなる女」の物怪の詞「おのが、いとめでたしと見たてまつるをば」の解釈にも異説がある。

「わが身が、まことめでたき夫とお慕い申しているのに、お訪ねくださらず」(「全集」 238頁)

私が、御身(源氏)を大層お美しいと見申すのに、それをば源氏は訪ねる事もお考えなさらずして(「大系」 146頁)

「ほんとは御立派とお見あげ申しておりますわたしを尋ねようともなさらないで」(玉上「評釈」 413頁)

「めでたいお方よと存じ上げて、こんなにお慕い申している私を構って下さらないで」(谷崎「新々訳」 120頁)

「私がどんなにあなたを愛しているかしのれないのに、私を愛さないで」(与謝野「源氏」河出日本文学全集 45頁)

「私がこの上なく御立派なお方とお慕い申していますのに、訪ねようとも遊ばさないで」(円地「源氏」194頁)

「をば」は、「あゆひ抄」に解くように、「何を」に比べると、「甚だ重し」、つまり「を」で受ける語を「は」で特に取りたてて強調するもの。「何をコレハ」「何ヲソレハ」と訳すべきもので、「を」は、客語表現の他に多くの用法が見られるが、「全集」、与謝野、円地「源氏」のように格助詞「を」を逆接に解するのは如何なものであろうか。谷崎「源氏」、「評釈」は格助詞とし、「大系」は苦心しながらも、格助詞に解している。「評釈」は、

さて、この夢の中の美人の言葉が、よくわからない。「おのがめでたしと見たてまつる六条の女君をば」と見る説もあるが、それではずいぶんおせっかいなものけになってしまふ。「男君をおのがめでたしと見たてまつるに」の意と、「を」を接続助詞に考える説もあるが、その時は「をば」とは言わないようだ。で結局、「君をめでたしと見たてまつるおのれをば、たづねも思ほさで」の意と見ることにしたが、なお落ちつかない。夢の中でのもののけが言う言葉なのだから、少しは変でもしようがなからう(「評釈」414頁)

とする。やはり「をば」を逆接に解するのは誤りであろう。諸注「めでたし」と思う対象は源氏とし、「評釈」、『全集』は、六条御息所とする異説があることを注記する。このあたりの物語に六条御息所を重ねて読んでいるのは「細流抄」で「此おほししめたる心霊に出つへきさまなり」(桜楓社「古注集成」43頁)。「御息所の念なるへし」「ねたく思給なるへし」(同47頁)などである。「岷江入楚」にも、「此念慮通して便りを得て霊も出現せるにや」「源氏の枕上也女は御息所の念成べし」「御息所の有ましき契をささままいひなひかしていくほとなくさしもなき人に思ひうつり給所をねたく思ひ給ふ成へし」(桜楓社「古注集成」岷江入楚」283頁)などである。「河海抄」「紫明抄」などには、そういう注記は見えない。このことについては、既に深沢三千男氏に指摘されるところがある。氏が指摘されるように、「花鳥余情」の「邪気になれるにや」も、怨霊説と見るべきであろう。「解釈をめぐっては

諸説があるが、それらは、六条わたりの高貴な女性が物怪となつての詞と解そうとすることから生ずる矛盾なのである。某院にとどまる女の怨霊が、六条わたりの高貴な女性と夕顔を対比させているのだと考えれば、諸説の矛盾は一掃される、と指摘したのは、某院にとどまる女の怨霊が、六条御息所と夕顔とを対比して、

私がりっぱだと存じあげている御息所をお訪ねになろうとも思ひなされず、こんなつまらぬ夕顔をお連れになられ、

と解すべきだと考えていたからであつた。「をば」を格助詞「を」の強調的表現とし、それと物語の構成上の問題を矛盾なく解いていく最も適切な考えは、おそらく「めでたし」の対象を六条御息所と解する以外にはあり得ないだろうと思われる。怨霊、物怪が、その人に直接恨みを持たない、その家に住みつく霊の類があり、手習の巻で浮舟をうばつたのもそういう怨霊であつた。その対偶的な構成から類推しても、やはり夕顔を取り殺したのは、廃院にとどまる若い女の怨霊である。それを光源氏をとりまく女性と考えることは適切でないように思う。このような類の怨霊の存在を考えていくと、玉上博士のように「ずいぶんおせっかいなものけになつてしまふ」と考える必要はない。夕顔の巻で、六条御息所の物語と夕顔の物語とが、強い構成的意識によつて語られてきた意味の一面は、やはりそういう点にあつたと考えなければならないが、この二つの物語の対偶性については、更に別の視点から考えなければならぬ問題をもつて思うように思われる。

六条御息所と夕顔とが対偶的に語られている意味について、坂本昇氏（「六条御息所」学燈社 別冊国文学「源氏物語必携」Ⅱ）は、

某院で、その荒れた邸に棲む妖物のために夕顔が一命を落とす直前、源氏は「六条わたり」を想起し傍らの夕顔と比較する。そこには身分に関わらぬ新たなタイプの女性への開眼が示されているとともに、「六条わたり」



に対する愛情の冷却化の根拠も明らかにされている。夕顔は「ひたぶるに、若び」「あてはかに、児めかし」い女であった。紫の上は容貌が藤壺に似ていたことが源氏の心を捉えた直接の原因であったが、幼い少女の魅力を知る伏線が、すでに夕顔との恋に述べられていたとみて誤りはないであろう(137頁)

と指摘され、池田勉氏(『源氏物語試論』古川書房)の「この女人の立場や性情のゆえに、屈折のふかい、その結果として、源氏のすき心のはての予期せぬ悔恨を、ながく源氏の生涯に残すこと」になるという一文を引用される。夕顔を、紫の姫君という幼い少女の魅力を知る伏線だと考えることは、この物語の構造の本質にかかわる問題であるように思われる。空蟬、夕顔という巻名の対偶的なあり方は、やはり物語の、整理された一つの形態を示すものだと考えなければならぬのではないか。六条御息所の存在を、「源氏のすき心のはての予期せぬ「悔恨」」というようにとらえていくことも、いまま少し立ち入って考えてみなければならぬことのように思う。森一郎氏(『源氏物語作中人物論』笠間書院)も、多屋頼俊博士の示唆をうけ、「六条御息所が源氏物語の中に占める役割は、光源氏の女性遍歴における罪障意識を主題とする点にある」(76頁)、「源氏の罪障とは、〃知らずして〃六条御息所の宿業に触れ、彼女の業をものけ化してしまったことにある」(90頁)と考えられている。ただ、夕顔の巻の六条御息所と葵巻以降の六条御息所とは位相を異にすると考えられる立場が一般的であり、夕顔をとり殺した妖怪も、直接的には六条御息所の怨霊とはその関係を断ち切られた形で構想されているとする立場も有力である。だが『花鳥余情』「細流抄」以来の六条御息所怨霊説は直接的には否定されながらも、なお間接的にその関与を認めようとする立場が定説化しつつある。深沢三千男(『源氏物語の形成』桜楓社)は、ものけのおどし文句が、「浅い睡眠に際して、源氏の潜在意識に浮び上った良心の声に重ね合せる事によって」発せられたとされ、それは、「六条の女君に対する良心の咎め」であり、「己がいとめてたしと見奉る」対象は六条の女君であり「己が云々」は妖物発言で

あると同時に、それと二重写しになった源氏内心の声」(336頁)であつたとされる。そして、妖怪は建物の奥の、暗い塗籠からでも出現したものと設定されていたのではないかとされ、

この建物の妖怪の正体は、この建物の中で薄命の生涯を閉じた女性の死霊かも知れない。皇室御領のながし院の荒唐には何かの事情がからんでいそうである。(340頁)

そこに出現すべきものは、お節介にも源氏の心の鬼に乘じ、嫉妬の情に駆られた怪美女である(343頁)

と指摘される。更に氏は「六条御息所悪霊事件の主題性について」(「源氏物語とその影響 研究と資料」古代文学論叢第六輯 武蔵野書院)で、六条御息所の物怪の出現を女の性の苦悩のみを背後とするだけではなく、廢太子事件による父大臣の失意と怨恨という、政治的事件をからませる三谷博士らの説を原拠に、

その上にもし史実ないしそう信じられるに至つた伝説と二重写しさせる事によって、作品世界の奥行きを増すための作者の狙いであり、またそのように受取るのが作者によって期待された読者の望ましい観照態度とするのであれば、六条院なる邸宅には本来場所柄につきままとっている怨念の家のイメージもあるのであつた(50頁)とされ、王権から見離された怨念と捨てられた女の強烈な怨念とをからます時、怨念の家としての河原院 || 六条院のイメージづけが強化され、御息所の怨念は、「呪われた(反王権)の家である限り」呪い続けられたとする。そして、王権への執念を呪いの力とするゆえに、王権に臣従する家となつた時、その怨霊は回路を失つたこと、「悪霊の回路は同時に罪の回路」(84頁) だつたこと、六条院の造営は「女鎮めの家」(90頁)の発想だつたことを指摘された。六条御息所の怨霊が、「廢太子事件による父大臣の失意と怨恨」という、「王権への執念」を呪いの力として背後にもつものであるとすれば、夕顔をとり殺す物怪が、六条御息所の怨霊であつたと考えることは妥当でない。だが、源氏物語は、そうした政治的事件をからませながらもそれを表面に出して語っていかない。そういう

点ではかなり徹底した書き方を貫いている作品のように見える。光源氏の謫居も、宇治の八宮の隠棲も、そうした縦糸は物語の表面にあらわれてこない。極度なまでに挿話的に扱われている。そして、物語をかたち作る骨格として作品の裏側に深く秘められている。そこには、女好みの物語への志向と史書を「ただかたそぼぞかし」と評する高い次元の物語観が、厳しく潜在しているように思われる。廃院に棲む女の妖怪の背後に、政治的な事件を読みとらせながらも、実はそこに、怪異な昔物語を重ね、ある一つの人生の宿業を語っているように思われる。森一郎氏（「文学」昭57・7月号所収「源氏物語のモチーフ」）は、「女たちの生と運命が、光源氏の生涯に収斂されながらも、内在としてかたどられる」（73頁）ところに源氏物語の女物語としての実体が存することを指摘されているが、女の物語としての伝承が厳しく潜在している事実も認めなければならない。

夕顔を物怪にうばわれる直前、源氏が「六条わたり」を想起し傍らの夕顔と比較するのは、坂本氏が指摘されるように、「六条わたり」に対する愛情の冷却化の根拠が明らかにされていると解すべきであろうか。森一郎氏も、「女としての生と運命を浮彫りするのであるが、彼女は登場した時すでに光源氏と冷却の関係である」（70頁）といわれる。確かに光源氏と冷却の関係になっていることを語ってはいるが、物語はそういう点に比重をかけてはいないように見える。むしろ森氏（「源氏物語作中人物論」笠間書院）が、夕顔を感溺している時もまず六条御息所を思うのは、「六条わたりの貴婦人との情事が主たる恋愛生活であったからにはかならないのである。藤壺との愛が重大な密事として、逢瀬のゆるされぬ恋であったのに対し、これはしげしげと通っていく忍び所であったのである」（80頁）と指摘されたのを重視したい。それは吉岡曠氏（「源氏物語論」笠間書院）が、「葵上と六条御息所が源氏にとて現実であったとすれば、紫上と明石君は、源氏がやがて物語上に実現する理想的現実であった」（153頁）といわれる意味に重なるという点で重要であるように思う。帚木の巻の冒頭をうけ、雨夜の品定めを通して、空蟬、夕顔

の物語を展開していくには、光源氏が、満たされぬ現実の妻妾達にとり囲まれながら、色好みの理想を貫く貴公子として造型されていく必要があった。物語の作者は、そこに一つの倫理的な根拠を与えようとしているように見える。こうした理想化こそ、女好みの造型なのであった。女達の側に素直にうけ入れられていくには、当時の男女のモラルの現況にふみとどまるのではなく、それを超えた理想化が必要であったのではないか。六条御息所との関係が冷却していることを語ることに意味があったのではない。空蟬、夕顔物語を展開させていく必然性を語ることに意味がある。宮廷生活にかかわる高貴な女達との恋——「桐壺」の恋物語の裏側に存在するものは、つたない宿世ゆえに、園原の伏屋に生うる「帚木」の女達との恋物語であった。巻名の対偶的なあり方は、物語の構造の根幹にかかわる享受のあり方を示しているように見える。それは、「桐壺」の恋物語が書かれていたか書かれていなかったかということではなく、それを表の物語として、裏側の物語を語っていくことであった。表の物語は、根底として、あるいは背景として暗示されていてもよいし、実際に書かれていてもよかった。源氏物語は、そういう暗示的、象徴的な、対偶的構造をもつ作品としても書かれている。

『栄花物語』の文学史的意味が、「事実その物を物語的に記す半歴史的半文学的な歴史物語といふ新ジャンルを国文学史上に創始」(至文堂『日本文学史 中古』556頁)したところがあり、「大鏡」のそれが、「史記の形式に規範をとって紀伝体を採用して歴史物語に新様式を創作」したところにあること、「前者が作物語風の女性的様式によって生活の種々相が絵巻物式に再現せられてゐるのに対して、後者は道長栄花の由って来る所を明らかにしやうと

する一定の目的をもって書かれてゐる」(同 568頁)とすれば、この歴史物語の方法は、やはり源氏物語の享受の変相に深くかわる時代の流れを象徴するものであるように思われる。大胆な臆測を加えていくと、「栄花物語」は、道長栄花の物語を源氏物語の世界を通して、年立的整理を加えながら享受しようとしたものであり、「大鏡」は、道長栄花の物語を、源氏物語の表の物語——骨格の物語と裏側の物語という、並びの巻の「縦」「横」の考えによって享受していく立場と深くかわるもののように思われる。それは、「奥入」と「河海抄」に代表され、結集されていた源氏物語の注釈史の変容を、大きな年代的ずれ込みを残しながら、きわめて象徴的な形で示しているようにさえ思われる。歴史物語の源氏物語享受の方法と注釈史とは、やはり「史記」を原点として深くかわるものがあるように思われる。

それはともかくとしても、このように考えてくると、夕顔の巻で六条御息所と夕顔が、対偶的に語られていることを、

夕顔との性格上の対照のためならば、たとえば空蟬を起用しても足りることではなかったか。多少の付着造型を加えれば可能であつたろう。また、光源氏本来の上の品の恋の生活があることを示すためというなら、それは単にそういうこととしてのみ語ればよいことで、夕顔ふぜいと対照的にくらべるように語らずともよいように思われてくる。(森一郎氏「源氏物語作中人物論」)

というように解されることは如何なものであろうか。

既に指摘したごとく、夕顔の巻の物怪の詞「いとめざましくつらけれ」の「めざまし」は、その用例の検討を通して見られたごとく、「卑者を見下す」意識を潜め、何か笠に着的権高な物言いだと考えなければならぬものであつた。怨霊説に従えば、六条御息所その人ということになるが、物語は、そのような書き方はしていないし、「花

鳥余情』『細流抄』以前の、古注時代にも、そういう読まれ方はしていなかった。物怪の威圧的、権高な詞は、「六条御息所に対する良心の呵責」「源氏の心の鬼に乗じ」た怪美女の詞で、妖怪の発言であると同時に、「それと二重写しになった」光源氏の内心の声であるとの指摘があった。深沢三千男（『源氏物語の形成』）は、夕顔をとり殺した物怪が、六条御息所ではなく、「なにがしの院に棲む妖怪とするのは、構想的に孤立」することになるが、浮舟をとり殺そうとした修業僧の怨霊も、「宇治十帖の物語の根幹を支える人間関係とは何等の必然的なかわりも持たぬ孤立的な存在であった」と、その対偶的關係を指摘される。

どちらにしても、余りにも偶然的な闯入者によって物語の主人公の幸福が破られ、人間関係がかき乱されてしまふ悲劇的な物語なのであり、薫の場合はとどのつまり、この言わば風来坊的なもののけによって操られ通しであったという見方もできるのであり、遙かに深刻化している。しかも薫は最後まで現象の背後に在って自己の運命を翻弄したものの正体を知らずに終った形である。そしてそれが実は人生の姿そのものの縮図でもあった。（344頁）

この指摘は示唆にとみ、従うべきものだと考える。夕顔物語をふまえ、浮舟物語に新たな意味を加えて変相していく作者の意図を、そこに読みとることができるからである。

今井源衛氏の「『浮舟の造型』——夕顔・かぐや姫の面影をめぐって——」（岩波「文学」昭57・7月号）も、「浮舟の造型を、夕顔の延長として、またかぐや姫の現代版として把え直すことを」「目的として出発しながら、結論としては、浮舟の造型は、それらによって示唆される所がたしかにありながら、しかもそれを越えて、別種の発展を遂げていることも、また疑いないようである」（62頁）と指摘される。これもまた示唆にとむすぐれた論稿であるが、氏は、夕顔や浮舟に対する光源氏、薫の理解は、「理解の名に価しないほど皮相なもの」で、「女の心の奥深くに

はこれとまったく別種の物が潜んでいる」ことを気付かなかったこと、夕顔が、「自我といふべきもの」も十分に有していた女であったこと、夕顔と浮舟とは対偶的に造型された人物であること、を指摘されている。この対偶的な造型であるとする見方には従うべきであるが、夕顔の巻に、六条御息所の物語が対偶的に挿入されている意味は、更に別の視点から検討を加うべき問題をもっているように思われる。

夕顔物語の後日譚である玉鬘物語は、玉鬘の巻で、六条院物語の一端を担うものとして語られる。玉鬘の住む部屋を見立てながら、紫上に、夕顔との昔語りをするところに、

世にあらましかば、北の町に物する人のなみにはなどか見ざらまし。かどかどしう、をかしき筋などはおくれ  
たりしかども、あてはかにらうたくもありしかな（「新釈」 393頁）

とある。紫上は、明石の御方並みには待遇なさらなかつたでしようなどと語る。この少し前に、

中宮のおはします町は、かやうの人も住みぬべくのだやかなれど、さてさぶらふ人のつらにや聞きなさむ、と  
おぼして、すこしうもれたれど丑寅の町の西の対、書殿にてあるを、他方へ移してとおぼす（392頁）

とある。玉鬘を六条御息所の娘秋好中宮の、未申の町に住ませてもよいが、侍女と間違われるのをおそれて、花散里方に住まわせようとしたというのである。「かやうの人」は、河内本「りうしの人」とあるが、別本諸本によつて「う」は「ん」を「う」と表記したもので、「臨時の人」。帚木巻にも河内本には、「りうしの」の表記が見える。「聞きなさむ」という湖月抄と同じ本文をもつのは「大成」の底本と青表紙本の大島本だけでこういう本文の性格は注意する必要がある。その他の青表紙本、河内本、別本には受け身の言い方が見える。光源氏の気持としては、迷惑の受身の言い方が入ってくるのが当然で、こうした点を明確にしていく上で、「新釈」本は便利であるし、捨て難い価値をもつ。確かに湖月抄は江戸時代の校訂本で不純ではあるが、それによる研究が既に前提となるべき

テキスト観から、価値のないもののように考えるのは、この物語の本文研究に手をそめた人には、なかなか言いにくいことのように思われる。「大成」校異篇に目を配っていくことは必要であるが、そのこととその底本や青表紙本を善本であるとする立場とは別で、やはり、そういう立場は、とらわれた、かなり問題のある言い方のようにさえ思われる。だが、ここで、秋好中宮と玉鬘とが、対偶的に語られているのは、夕顔の巻での夕顔と六条御息所との対偶的關係を意識したものであることは疑い得ないことである。玉鬘は、あやにくな懸想の物語を、六条院で実現させていく形代としての意味をもって登場する。光源氏は、「好色者どもの心つくするくさはひにて、いたうもてなさむ」（『新釈』玉鬘 389頁）「好色者どもの、いとうるはしだちてのみ此のわたりに見ゆるも、斯かる、物のくさはひのなき程なり」（同 388頁）という。「好色者どもの氣をもませる種子」にしようとする光源氏の料簡は、紫上に見すかされ、「あやしの、人の親や。まづ人の心励まさむ事をおぼすよ。けしからず」とたしなめられる。「恋ひ渡る身はそれなれど玉鬘いかなる筋を尋ね来つらむ」の源氏の歌は、玉鬘が夕顔の形代として登場してきたことを暗示する。こうして玉鬘は、いろいろな意味を重ね持つ形代として登場する。その宿運も形代としての意味を背負っているように思われる。宇治の八宮が、薫に語る詞に、

何事にも、女はもてあそびのつまにしつべく、物はかなきものから、人の心を動かすくさはひになむあるべき。されば罪の深きにやあらむ、子の道の闇を思ひやるにも、をのこはいとしも親の心を乱さずやあらむ。女は、限りありていふかひなき方に思ひ捨つべきにも、なほいと心苦しかるべき（『新釈』椎本55頁）

とある。この語は、女の宿業を見据えた物語の主題にかかわる重い意味をもつことばのように思われる。

最近の源氏物語研究の方向は、その深層を読みとろうとする点にある。三谷邦明氏の「源氏物語第三部の方法」

——中心の喪失あるいは不在の物語——（岩波書店『文学』昭57年8月号所収）は、これらの問題についての示唆にと



む問題提起となっている。氏は次のごとく指摘される。

△ものけ▽が像を結ぶ時には、常にそれを見、語る人物の「心の鬼」が反映せざるをえないという視点で源氏物語は書かれているのである（102頁）

この論は「紫式部集」の次の贈答歌を論拠とする。

絵に、物の怪のつきたる女のみにくきかたかきたる後に、鬼になりたるもとの妻を、小法師のしばりたるかたかきて、男は経読みし物の怪せめたるところを見て

44 亡き人にかごとをかけてわづらふもおのが心の鬼にやはあらぬ

返し

45 ことわりや君が心の闇なれば鬼の影とはしるく見ゆらむ（新潮古典集成 132頁）

この歌は、竹内美千代氏が「紫式部集評釈」（桜楓社）で、次のごとく指摘されている。

「物の怪」を「おのが心の鬼」と見るこの歌は興味深いものである。己が心の影におびえて物の怪を見るとは冷静な見方である。そう思えば河原院の物の怪も、六条御息所の物怪も、正体を見たものは光源氏だけのようである。返しは共に物語絵を見ている人であり、女性であろうが作者の見解に同意し、男の心が暗いから物の怪の影がはっきり見えるという意味深長な返歌である（109頁）

山本利達氏（「紫式部日記 紫式部集」 新潮古典集成）も、「物の怪を疑心暗鬼だという作者は、心のありようを冷たく内観できる人だった」（131頁）といわれ、木船重昭氏（「紫式部集の解釈と論考」 笠間書院）も、「44番歌は、「疑心暗鬼ヲ生ズ」人間心理を洞察し、当代の迷信的な通念を批判している」（82頁）といわれる。南波浩氏（「紫式部集全評釈」 笠間書院）は、「理性的に対象を省察するところからくる自己回帰性の感慨である」（269頁）とされ、

「画中の人物も、「煩惱」——自らの妄想による暗鬼に苦しみ悩んでいるのだ、と見て取ったのだった」と解される。三谷氏が、

多分、平安朝において、この猟奇的とさえ言つてよい画は、当時の信仰から考え、紫式部のような解釈を拒否してはいたはずで、この紙絵らしき画を描いた画家も意識していなかった理解が和歌に詠み込まれたのである。フロイドの深層心理学とも通底するこの読みは、紫式部が本文をどのように $\wedge$ 読み $\vee$ 、どのように $\wedge$ 解体 $\vee$ ・ $\wedge$ 翻訳 $\vee$ 化して行つたかを考察する上で重要な意味を持っているのだが、それはともかく、こうした $\wedge$ もののけ $\vee$ 理解は、源氏物語に表出されている  $\wedge$ もののけ $\vee$ と無関係であるはずはないだろう。と言うより、実は、この贈答歌の三首後には、

世のはかなきことを嘆くころ、陸奥に名あるところ書いたる絵を見て、塩釜、

48 見し人の煙となりし夕べより名ぞむつまじきしほがまの浦

という和歌が記載されており、この歌は、源氏物語においてはじめて $\wedge$ もののけ $\vee$ が登場する夕顔の死後、彼女の素姓を右近から聞いた後に、

見し人の煙を雲とながむれば夕べの空もむつまじきかな

と詠む追悼歌に利用されているものであつて(100頁)

と指摘されるのも、こうした考え方に立たれるものであり、恐らく、正鶴を射たものと思われる。ただ、筆者は、「塩釜」、「源融」、「河原院」という古注の注記とその準拠に、紫式部集の歌を通して源氏物語を読んでいた当時の物語享受のありようをほのかに垣間見ることができるよう思う。そして、こういう視点に立って物語を読んできくと、六条御息所の物語を、対偶的構成によるものとどめようとする拙論の論旨はいかにも脆弱で浅薄なもの

のように思われもする。だが、やはり夕顔の巻は、そういう書き方をしているように見える。光源氏は、その良心に六条御息所に恨まれるのも道理だと心の負い目を感じながらも、夕顔をとり殺す物怪に、六条御息所のイメージを重ねてはいない。物怪の正体を廃院にとどまる可憐な若い女の怨霊としてとらえているところに、夕顔の巻の世界があるのだと考える。物怪の詞は、確かに六条御息所にかがれな源氏の軽率をいましめている。権高に六条御息所を笠に著して源氏をさすとす。確かに源氏の良心はそう感じている。だが、物怪そのもの、その正体は決して六条御息所ではないのだ。夕顔物語は、もっと昔物語の世界に身を寄せている。女のどろどろした怨念を超えた、可憐で、素直な物語、怪異と浪漫への志向が秘められてはいはしないか。夕顔物語の主調音は、やはり夕顔その人の性にかかわるものであるように思われる。六条御息所の怨霊の回路はそうした次元とは異なる世界にあった。しかし、物語の享受の変容のなかで、そうした理解がなされてもきたのだった。

「にもかかわらず、光源氏は自己の「心の鬼」に気付かず、その無自覚性が、光源氏に、なにがし院の霊物という転嫁を創出させた」と解することは確かに魅力ある見方で、現代の源氏学を担う新しさと合理性とがある。物怪の詞に、自己の良心を重ねて聴くという立場は、きわめて新しい理性的で批判的な解釈であったに違いない。

夕顔の巻と対偶的に語られている手習の巻の物怪についても、三谷氏は、

「昔、行ひせし法師の、いささかなる、世に恨みとどめ」た物の怪が出現したのは、浮舟に取りついた物の怪と解されるのであるが、物の怪は退散するに当って、常にその素姓を明かにしている。そこには確かに僧都自身が重ねられてはいるが、物怪の正体をあらわした詞と解すべきものではなからうか。物怪は、常に語るべき対象を限定し、いろいろな意味で、当事者にしかわからないことばとしぐさでそれと知らせる。このことを、良心の呵責と

(101頁)

いう視点だけでとらえるのは、新しく合理的ではあるが、やはり片手落ちになりはしないか。物語の作者は、そこに良心を重ねて聴かせようとしているように見える。それは、理性的、批判的な精神を背骨にしてつくり出されてきたきわめて新しいものであったに違いないが、そこに存する象徴的・暗示的な意味もまた大切なのである。

玉鬘の巻で、姫君達一行に出会った右近の歌、

二本の杉の立ちどを尋ねずば布留川のべに君を見ましや

この歌は、古注以来諸注が引く「古今」巻第十九、1009番の旋頭歌「はつせ河古川の辺にふたもとある杉年をへて  
またもあひ見むふたもとある杉」を引歌とする。小沢正夫氏は、「九〇五・九〇六番などと同じ樹木ぼめの歌である  
ろうが、恋人、友人などが再会を約束する歌としてうたわれたことがあったかもしれない」(小学館「全集」380頁)  
といわれ、窪田空穂氏は、「はつせ川のほとりに住んでいる夫婦の、男は何等かの事情で、また逢う時の期せない  
別れをする時、女に対して、慰めと誓いの心をもっていった言葉と取れる」(「評釈」下巻204頁)とされる。玉鬘  
の巻の右近の歌は、小沢氏の指摘されるところをふまえた歌のように思われる。ところが、この歌は、手習の巻で  
再び使われる。手習の巻に、

はかなくて世にふる川の憂き瀬には尋ねも行かじ二本の杉

と手習にまじりたるを、尼君見つけて、「二本は、又もあひ聞えむと思ふ人あるべし」と、たはぶれごとを言  
ひ当てたるに、胸つぶれて、おもて赤め給へるも、いと愛敬づきうつくしげなり。

ふる川の杉の本立知らねども過ぎにし人によそへてぞ見る(「新釈」272頁)

とある。尼君は浮舟を手に入れ、亡き娘の慰めぐさを得たのを初瀬観音の御利益と感謝し、御礼参りのようにして  
参詣しようと浮舟を誘う。前の歌は、誘われた浮舟の心情を詠んだ歌である。ここにも、やはり物語の対偶と変

相を見ることが出来る。このように夕顔、玉鬘の物語をふまえながら、浮舟物語を造型していく作者の意図は、登場人物の配置や「さすらい」の主題を通して明確に指摘することが出来る。源氏物語は、こうして骨格となる物語を書き変え、変容・変相の手を加えながら謎解きのたのしさを味わい享受されていた作品であった。

夕顔の巻の物怪の詞は、廃院に棲む若い女の妖怪であり、物怪の正体には六条御息所の面影はとどめていないこと、だが、物怪の詞には六条御息所を笠に着た権高な言い方があり、源氏をいましめていること、源氏は物怪の詞の意味を理解できないで、あくまでも若い女の妖怪だと考えていること、物語はそういう風に書かれていると解すべきであった。だが、『紫式部集』の歌を通して物語を享受できる読者達は、既に光源氏の良心を、その対偶的構成を超え、語られる世界を超えて理解することができたはずである。物語の作者は、読者達に、主人公も知り得ない高い物語的世界の達成を知るよるこびを用意していたように思われる。そして、そういう読者達の理解を通してより深い意味での変相・変容を、次の類型的物語で手がけていく。源氏物語は、そのような語り方や享受によって作られていった作品であったように思われる。

7

平安時代における源氏物語の本文の流伝とその系統論への試みは、既に発表したいくつかの論稿で述べてきたが、校訂がくり返され、本文の混成、混態を生じている源氏物語の本文研究は、総論的にはともかく、各論、系統論的にはほとんど手のつけようがないところまできているようにも思われる。だが、これまでの研究を要約し、新たな資料の処理によって、一つの結論を見出すことは可能のように思われる。

源氏物語絵詞を中心とする平安時代における源氏物語の本文資料について、筆者が指摘した主な点は次のごときものであった。

(一)、絵詞の本文が、その背後に源氏物語の完本を持たず、絵との対偶意識から青表紙本系統の本文によりながらも、適当に手を加えたため、現存諸本との間に異同が生じたと考えたり、青表紙本と河内本との混成、混成による不純な伝来を有する本文だとする従来の説は誤りである。絵詞の本文は別本系統の陽明家本、国冬本、保坂本、西行筆本、横山家本、御物本などと系統的に親近性を示す完本をその背後に有するものであった。

(二)、平安時代の有力な一伝本が、青表紙本ではなく、別本の側に存在していたという事実は、伊勢物語の流伝における定家本と非定家本との関係にきわめて類似するものである。そして、そのことは定家の学問的態度とその方法、定家の手になる写本の真価にかかわる重要な問題であるが、保坂本、国冬本の原形と、絵詞の本文と親近性を示す周辺の諸本は、いずれも同一の原形から分かれたものと考えるべきであり、青表紙本に対して系統論的純粋性を主張する従来の考えは、この辺からも検討を加えられる必要がある。了悟の「光源氏物語本事」に「京極自筆の本として、こと葉もよのつねよりも枝葉をぬきたる本」とあるのは、定家本の如何なる姿を指すものであろうか。

(三)、源氏積の抄出本文は現存諸本の系統からは不整で統一を欠いているが、それは、その形態、本文の上に現存諸本の体系とは異なるものが存在していた事実とかかわるものと考えるべきで、鎌倉時代に溯るかといわれる源氏物語本文を検討する上で、源氏物語大成は適切な物指しではないとする考えには従いがたい。源氏積抄出本文の性格は、その根底において別本系統に属するものであったことは疑い難い事実であり、源氏物語絵詞とともに平安時代に流布した物語本文の性格を知る上にきわめて重要な資料的価値をもつものである。ただ絵詞と同列に置かるべき源氏積の抄出本文が、一面ではその資料的価値を同じくし、他面では不統一であって、絵詞の本文の系統的統一性

に對照的であるのは、その形態の特殊性とかかわりながら、抄出本文が、別本系統周辺の諸本によりながらも、一方また相当乱れた当時の伝本によるものであったことを示している。そしてこのことが注釈や校訂のごとき学問的研究を促すことにもなった。こうして源氏物語の本文に関する研究は、解釈即ち理解という事実と密接に結びついて発生し、展開していった。そして、その時代は、池田博士の指摘されるように院政期を境とする頃であった。摂関政治体制が崩壊へと大きく揺らぐ院政期の社会変動による言語の変化、物語の享受層の変化などが、源氏物語の理解を困難にし、本文研究を必要とするに至ったものと考えられる。そして、その根底には、源氏物語の世界を郷愁として思慕し、厳しい現実を恐れ、過ぎゆくものの中に永遠なる魂の安らぎを求め、彼岸に救いを求めようとする時代の思潮があった。そうした風潮は、一方では歴史物語を発生させ、説話や歌謡を集成させたり、研究意識の発生によって注釈や古系図、絵巻の発生を促したものと考えられる。

(四) 池田博士は、伝津守国冬筆本桐壺巻は、河海抄指摘の本文特性によれば、従一位麗子本の流れを伝えるもののごとくであり、その一連の古写本は麗子本と認められることを指摘された。この池田博士の説は、中村義雄氏によって支持され、花園左大臣源有仁本もこの系統に属するものではなかったかと推測されている。これによれば、原形国冬本ともいうべき絵詞の原拠となった源氏物語の本文は従一位麗子本系統に属するものであったと考えるべきである。従一位麗子は、師房の女で、俊房の妹であった。道長の長子頼通の子息、京極入道関白藤原師実の室となり、京極北政所と称せられた。師房の父、具平親王は、紫式部と姻戚関係があり、道長も親王と密接な親族関係にあり、しかも紫式部の主筋に当る。源氏物語絵巻のなかで、他を抜いて最も優れている柏木巻から御法巻に至る一群の絵詞が、殊に国冬本を中心とする別本の系統に属する事実はいわめて重要である。

(五) 久曾神昇氏は伝西行筆切れの本文を調査すべき必要を教示された。池田博士によれば、伝西行筆竹河巻断簡、同じく東屋の巻残欠、同じく竹河巻一帖、伝二条院讀岐筆少女巻一帖などは、河内本成立以前に成る本文で、青表

紙本でもなく、またそれらの混成による本文でもないといわれる。これによれば、これらの伝本及び本文の資料的価値は、源氏物語絵詞の本文資料的価値と同列に扱われるべきものであり、これらの本文系統が、絵詞の本文と親近性を示すものとすれば、拙論は、それによっても妥当なものとして支持されなければならない。源氏物語絵詞の竹川卷(一)において国冬本に次いで絵詞の本文と最も親近性を示しているのは、大島雅太郎氏蔵伝西行筆本であり、同(二)では、静嘉堂文庫蔵伝西行筆本が最もその系統的関係が深く、絵詞の本文と伝西行筆本源氏物語の本文とが同系統に属するものであったことは動かし難い事実である。

(六)、池田博士が、古系図や古注の研究を通して、現存する源氏物語とは異なる物語群を有する体系を、物語本の形態としてその背後に見出そうとされた根底には、本文系統論に於ける一つの矛盾が存在した。それは、物語本文の系譜再建をいそがれたがゆえに、ある種の伝本の系統論的純粋性を主張されることが急で、そのためにかえって循環論的矛盾に逢着せざるを得なかつたからである。源氏物語絵詞の本文資料的価値を通して見られる別本系諸本の性格を、その周辺に存するいくつかの資料によって仔細に追求することにより、従来の源氏物語系統論は、その根底から検討を加えられる必要性に迫られる。そしてそれは、物語の構想と構成、更には成立とその主題についてもきわめて重要な問題を示唆するものといわなければならない。

(七)、源氏物語古系図は、平安時代における源氏物語の組織と、その本文の一部を伝えるものであるが、その資料的価値を通して、従来の基礎的研究をその根底から批判され、多くの創見を示されたのは池田博士であった。殊に古系図の研究によって到達された池田博士の成立論は、従来の成立論の根底を否定しようとする学問的確信にあふれるものであった。池田博士によれば、現存源氏物語の組織とは異なる物語群が存在していたことを証する古系図は、正嘉本、大島本、伝実秋筆本であり、しかもこれらの三本は、系統的に別種のものであることから、そこに、注記



された巻々の物語が削除され、現存の組織と体系とに置きかえられたとされる。稲賀敬二氏（『源氏物語の研究』笠間書院）は、源氏系図小鑑の資料的意味を検討され、単守物語は宇治十帖に対する一つの系列に位置するものであるが、その脱落によって現存宇治十帖へ再系列化されたものであること、浮舟物語の結末を不満として董を恋の勝利者として補作したものではなく、浮舟物語が単守物語を模倣したものであったこと、単守物語の特徴的事実を浮舟物語が吸収して構成された時、その残余部は紅梅巻として、再構成され、更に蜻蛉の巻にも吸収され、風葉和歌集の成立以後、単守物語は完全に脱落したことを指摘され、源氏物語第三部を、匂宮巻 — 橋姫物語、竹河巻 — 単守物語、紅梅巻 — 浮舟物語の三系統に想定された。稲賀氏の説は、単守物語を再検討することによって、池田博士の提出されたさまざまな疑問、矛盾を合理的、統一的に解釈、説明しようとするところに意味があった。これに対して、小山敦子氏（「女一宮物語」「国語と国文学」昭34・5月号）は、稲賀氏の立論の前提を否定され、その資料となった系図小鑑が「山路の露」を含む集成的性格の強いものであり、時代の下る後代のものによって源氏物語プロパー成立以前の源氏物語を推論することの危険を指摘され、古系図の注記には誤りが多く、その資料的価値は過大に評価せられるべきではないといわれ、池田博士の立論にも疑問をさしはさまれた。そして、「すもり」の資料的価値は、源氏物語プロパーよりも後か先かにあるのではなく、「白造紙」に至る約二百年間の空白の間に、巻序が如何なる状態にあったかを示す資料なるがゆえに貴重であるとされた。常磐井和子氏は『源氏物語古系図の研究』（笠間書院）で、源氏系図が、「それ自体一つの著作として伝来され」「一つの本文が終始純粹に河内本、あるいは青表紙本で統一されているような本はなさそう」だと言われる。そして、古系図というものがどれも一つの祖本から出たと考えられること、成長増補の段階で次々種々の系統の本文が混入したこと、現存青表紙本、河内本といつて伝えられている本文が、古系図成立の頃の物語本文とは性質が違うらしいこと、を指摘された。そのように、古

系図の本文の実態は、混沌としたもので、河内学派は河内本によつた系図を、定家流は青表紙本の本文に拠つた系図を持っていたというようなものではなかつたと考えられている。

(八)、九条家本源氏物語古系図の裏書に抄出された朝顔、玉鬘、野分、若菜下巻の本文の系統について、池田博士は別本の本文と見るべきであり、しかも現存諸本のいずれでもないといわれる。資料の調査、検討から明らかにし得る裏書本文の系統的性格は、次のごとく要約せらるべきである。

(一)、裏書本文の系統的性格を現存諸本に求めると、その系譜は不純である。

(二)、總体的に見た系統的性格は不純であるが、四巻の間には巻によつてそれぞれの系統的性格が存在する。即ち、朝顔巻異文六例については、別本に親近性を示すもの二例、別本に親近性を示しながら青表紙本、河内本との混成を示すもの三例、独自の系統的性格を示すがなお別本との接近を示すもの一例で、別本との親近性が裏書本文中最も深い。玉鬘巻五例については、河内本、別本との親近性を示すもの一例、河内本、別本との親近性を示しながらなお独自の系統的性格を示すもの三例、河内本、別本との親近性を示しながら青表紙本とも混成を示すもの一例で、別本、河内本に親近性を示している。野分巻三例については、別本に親近性を示しながらもなお独自の系統的性格を示すもの二例、河内本、別本に親近性を示し、青表紙本との混成を示すもの一例で四巻中その系統的性格が最も不純である。若菜巻三例については、別本と親近性を示しながらもなお独自の系統的性格を示し、且つ青表紙本との混成を示すもの一例、青表紙本と親近性を示すもの一例で、その系統的性格は四巻中最も不純である。このように、その本文の性格は不純であるが、四巻個々の巻については、若干の異例を共存させながらもほぼ本文の不整を否定しようとする傾向を示している。

(三)、裏書本文の独自異文は、現存諸本のいずれの系統にも属さないことを直接実証するものではない。抄出引用

による本文の修正加除、書写を担当した筆者の意識的、無意識的な誤写等によって生じた異文も存し、混成、混態によって生じたものの他、依拠した本文も相当混乱していたことを示す痕跡が、文節の位置の混乱などに見られる。池田博士の立論は、要約(一)に従えば妥当であるが、(二)(三)はこれを否定している。即ち、体系的に見る裏書本文の系統的性格は不純であるが、個々の巻々については、現存諸本にその系統的性格を追跡することが可能であり本文の不整を否定しようとする傾向を示している。この事實は、現存諸本の系統に裏書本文の原本が存在していたことを確証するものに他ならない。そして、こうした巻々による本文の系統的性格の不純は、本文の混乱と密接な関係を有するものと考えざるを得ない。更に、個々の巻々に共存する若干の不整もまたこの混乱に相関するものと考えべきである。このように、九条家本古系図の原拠となった源氏物語の本文は、別本の系統に属する本文を有する巻、河内本、別本両系の混成による本文を主とする巻、両系更に青表紙本との混成、混態によって生じた本文を有する巻が、それぞれ雑然と結集された系統的に不純な伝来を有する物語であったことは疑い難い事實である。そして、これらの事實は、従来の研究に性急な異論を立てるものと誤解されるかも知れないが、池田博士の立論をその根底から否定するものに他ならない。こうした裏書本文の系統的性格は、源氏積の原拠となった本文の系統的性格と完全に一致するものである。源氏物語絵詞と同列に置かるべきこれらの資料が、一面ではその本文資料的価値を同じくし、他面では不統一であって、絵詞の系統的統一性に対照的であること、源氏積の依拠した物語の形態には、現存諸本とは相違する特殊性が存すること、これらの事實は、源氏積、九条家本古系図の本文が、別本周辺の諸本に親近性を示すとともに、一方相当混乱した当時の伝本によるものであることを示すものに他ならない。

(九) 系図小鏡が集成的性格の著しいものであり、後代に下るものであることは動かし難い事實であるが、それはまた正嘉本、大島本古系図に見える「巢守」の証跡と完全に一致する。これによれば、系図小鑑の資料的価値によ

って「すもり」の存在を滅殺する小山氏の論証には飛躍があり、これらは源氏釈に存する「さくら人」の物語と同列に検討を加えるべきである。源氏釈の抄出本文によって想定し得る「さくら人」の物語は、玉鬘と螢宮との「あふをかぎりに」なげく恋を主題とするもののごとくで「ほたるかつきにあるへし」の注記は、螢宮との恋愛を主題とするものであったことを示すもののようにある。古系図によって想定できる「巢守」も、螢宮の息、源三位の女巢守三位と匂宮、薫の恋を主題とする螢宮家後日譚であったと考えられ、いずれも螢宮物語にかかわるものであったとすべきである。このように螢宮物語を主題とする「さくら人」「巢守」の巻が成立するに至った事情は如何なる理由にもとづくものであつたらうか。小山氏は、「すもり」に見られる螢宮と蜻蛉宮との二重写しの現象こそ、紅梅巻が現在の位置になつたことを示すもので、「すもり」に関する古系図の資料的価値はそこにあると主張された。しかし、九条家本古系図にはこれらの物語が存在する証跡はなく、源氏釈には、「巢守」の存在について注記するところがない。白造紙はこれらを後の補作とする。「巢守」の成立は、「さくら人」の成立と無関係であつたとは考えられない。無名草子にある「すもりの君」「すもりの中君」は、宇治中君を指したもので、稲賀氏の説を否定された小山氏の立論に従うべきであるが、「巢守三位」は中君、浮舟物語から可及的に構成されたもので、身分的要素をもつものである。巢守三位は、匂宮の好色心を嫌い、薫に心を移し若君を生んだが、匂宮との仲が気まぐずくなり、秘密の外聞も憚られて朱雀院の四君のいる大内山に隠れた。この構成は中君と浮舟との二重写しであるが類魔的であり、人間真理の追求に著しい情熱を欠き、源氏物語第三部の主題から逸脱している。そして、それは「桜人」についても言い得る。源氏の恋を揺曳しながら、玉鬘に逢う宮の物語、これらは、いずれも「山路の露」的世界であり、主題の深化はなく後の創作にかかわるものであることは疑い難い。そこにはもはや更級日記の憧憬的観照的世界さえも見られない。これらの物語が第二部から第三部への巻序の定着に資料的価値を提供するもので

あろうか。それは源氏物語の享受層の変質を示すものに他ならないのではないか。源氏物語絵詞との関係から追跡し得る源氏釈、古系図の本文資料的価値は、これらの推定を裏証する有力な根拠となっている。小山氏が、「すもり」の資料的価値を過大に評価されず著しく減殺された立論の傾向には従うべきであるが、なお古系図の本文資料的価値によれば、古系図の原拠となった本文は、後代の集成的性格の著しい不純な体系であったことは疑うべくもない。これらの問題については、既に「源氏物語とその周辺」の「第一部」の旧稿に詳述したので要約にとどめることにする。

陽明叢書図書篇「源氏物語 一」の阿部秋生博士の論は、高橋貞一博士の説に依拠するところが大きいように思われる。高橋氏（「陽明文庫蔵源氏物語について」「中古文学論考」所収 有精堂）は、陽明文庫本が「別本としても、青表紙本と極めて相違の多い巻とさまで相違のない巻とがあり」、相違の多い巻々として、桐壺、夕顔。相違の少ない巻々として帚木、空蟬の巻などをあげられている。そして、

前者は河内本とも相違があるが、河内本と一部又は多くの類似点を有し、河内本の成立に甚大な影響を与えた伝本と認められる（179頁）

とされ、

相違の少ない巻々は、又青表紙本と認められるものもあるが、河内本の本文と同類の本文を含むものが多いので、これも河内本への影響を与えた伝本と認むべきであろう。これらの巻々を別本としないで、新しく古本として、青表紙本、河内本成立以前の伝本たることを明確にすべきである（179頁）

と指摘されている。更に、定家本以前の本文が探求せらるべきであり、源氏物語絵詞との関係が次の研究対象にな

ろうと結ばれている。「中古文学論考」が、「山岸徳平先生頌寿」として出版されたのは昭和四七年であった。筆者は既に「源氏物語絵詞の本文資料的価値」以下の本文研究を、昭和二十三年から国学院大学国文学会に連続発表し、私家版として刊行、四二年には「源氏物語論」として、それらを集成、上梓した。岩波古典文学大系「源氏物語」の解説を批判した拙論に、「絵詞の本文については仰せのごとし」との書簡を山岸徳平氏からいただいた。研究史をふまえない論の類は、学術論文に価しないように思われもする。

このように安易で恣意的とも思われる説が、十年の歳月を経た現在、阿部博士によって実証的に分析されているのも如何なるものであろうか。「体系 物語文学史 第三卷」(三谷栄一編 有精堂)の秋山虔氏の伝本に関する記述は、五十数行に及ぶが、別本については、

別本系というのは河内本、青表紙本の二系統のいずれにも属さない本文形態の本を一括した名称で、その独自の本文形態は前記二系統の混態であったり、後の改訂や誤脱衍加があったりする場合もあるが、二系統の校訂以前の平安時代の古形を伝えている場合もありうるだろう(226頁)

と三行足らずの記述にとどめている。そこには、別本に対する疑問と、それらの問題に深くかかわり得ないとする配慮が存するように思われもする。だが、既に別に指摘してきたように、別本の問題を離れて源氏物語の伝本を論じることは、最も大切な一面を見落していることになる。

阿部秋生博士は、陽明叢書国書篇『源氏物語 一』の解説で、桐壺から夕顔の巻について、「この四帖の本文は別本とされているが、青表紙本と河内本との本文の混淆によって生じた別本ではない。青表紙本・河内本とは無関係に成立している別本である」(100頁)と説かれ、夕顔の巻について、「本文は青表紙本・河内本のいずれとも違い、三本相互に等距離ぐらいにある。別本とすべきであらう」(113頁)と指摘されるが、にわかに従い得ない。陽

明文庫本について、阿部氏は「一字一句を精確に書写して「証本」を作することを考えていたのではなく」「代々の書写者が、かなり自由に、気軽な態度で自分のための物語本を作っていた」と、想定され、「青表紙本と河内本の本文をどのようにとりあわせても」陽明文庫本の本文は出てこないこと、「河内本は、この陽明文庫本、あるいはそれに近似した本文をみていたのではないかと思われるところ」があることから、「陽明文庫本の本文は、河内本成立以後の本文ではないように思われると指摘されている。だが、こうした安易で恣意的な考え方には、とうてい従うことはできない。源氏物語の本文は、そうした単一な過程を経て伝来してきたものではなく、その混態は、もっと複雑であり、現存諸本の操作によって原形を想定し得る状態ではあり得ないことを認識しなければならない。秋山虔氏（陽明叢書国書篇「源氏物語 十六」）は、「各帖の調査によって、若干の巻はともかくとして、いかにも阿部氏の見解は裏づけられることになるようである」（98頁）とされ、

陽明文庫本の別本の諸帖の形姿は、それが証本を尊重し継承する態度をもって書写するのは異質の書写者によって伝えられたものといえよう。書写の態度は、あるいは積極的に、その度合も各帖まちまちであるけれども、書写することがその時点での享受の行為であったといつてよい書写者によって作られた本文の形姿を伝えるものであるということが出来る。それだけに、青表紙本・河内本に対する価値表とは別箇のそれをもって、改めて研究の俎上にのぼらせられねばならないのである。

と、指摘されているが如何なものであろうか。

青表紙本系統の大島本に対して、尾州家河内本と別本系統の陽明家本の本文はどのような関係にあるのか夕顔の巻の調査を通して検討を加えることにする。

青表紙本に対する河内本の異文例

青表紙本に対する別本の異文例

1268

1118

この統計は大島本の本文を忠実に伝える中野幸一氏の校注源氏物語「夕顔」(武蔵野書院)を底本に、尾州家本と陽明家本とを校合した筆者の手沢本によって異文例を集計したもので、その教え方、判定の方法に若干の問題がないわけではないが、大筋においてその結論は動かし難いと考えている。恣意的な解釈を避け、統計の正確さを期したが、資料とした異文を分類別に示すことにした。音便の表記と仮名違いの特殊なものについては問わなかった。尾州家本、陽明家本については異文の部分のみを該当諸本の表記に従って示し、両系に共通する異文は若干の仮名遣い上の表記の違いは問わないで河内本の異文によって示した。

この統計によれば、青表紙本系の大島本に対する異文例は尾州家河内本、別本系統の陽明家本とともに千百から千二百数十で、一〇%程度の差で青表紙本に対峙していることがわかる。青表紙本に対する尾州家河内本、陽明家本の距離は、この係数によるかぎり、ほぼ同じ位置に対峙していると考えることができ、異文を次の四類に分類し、

第一類 別本系統の陽明家本の独自異文

第二類 尾州家河内本の独自異文

第三類 陽明家本と尾州家河内本とが共通する異文

第四類 陽明家本と尾州河内本とがほぼ共通する異文

として示した。頭書きの算用数字は手沢本、武蔵野書院校注源氏物語の頁数である。これら資料の表示には、桐壺、帚木、空蟬の巻などで試みたと同じように、かなり恣意的な要素も加わるが、文節による機械的な異文の表示より



もその本質的な性格を知るといふ別の意味で合理的な面をもっている。

青表紙本に対する別本系統の陽明家本、尾州家河内本の異文を、資料から四類に分類して集計すること、次のごとくである。

分類の基準	異文例	本文系統別異文百分率
(一) 別本陽明家本の独自異文	591	46.6
(二) 尾州家河内本の独自異文	441	39.5
(三) 別本、河内本が共通する異文	526	41.6
(四) 別本、河内本がほぼ共通する異文	153	12.0
		13.6
		47.0

第三、四の異文百分率の上段は別本の、下段は河内本の百分率を表わしたものである。これらの統計をもとに、青表紙本、河内本、別本の本文系統の関係を系数的に考えると、次のようになる。

(一)、陽明家本の独自異文は、青表紙本に対する別本異文の四六・五%、河内本のそれは三九・五%で、異文総数も陽明家本一二六八例、河内本一一一八例、青表紙本に対する両本の関係は、相互にほぼ等距離に存在すると思えなければならない。

(二)、陽明家本と河内本とに共通する異文は五二六例あり、これを本文系統別に異文を百分率で示すと、陽明家本では四一・六%、河内本では四七・〇%となっている。また、両系にほぼ共通する異文は一五三例あり、その異文の百分率は、陽明家本では一二・〇%、河内本では一三・六%である。これによれば、青表紙本、河内本、別本の

三本の位置は相互に等距離に存在すると考えることはできない。近親度を示す第三、四類の総計からすれば、陽明家本では五三・五%、河内本では六〇・五%となり、異文例の五〇数%から六〇%以上が両系に共通することになり、河内本、別本はきわめて近い関係に立つものであると考えなければならない。

(三)、(一)及び(二)から河内本、別本は近親性をたもちながら、青表紙本に対してほぼ等距離の位置に存在するものと考えるべきであり、河内本と別本とは非青表紙本として青表紙本に対立する性格をその一面に持つものであることが明らかである。

異文例を集計し、その系数で本文の系統関係を考えていくと、以上のような結論に到達せざるを得ないが、これらの関係は従来どのように考えられてきたのであろうか。

阿部秋生博士は、陽明文庫源氏物語の翻刻、解説のなかで、次のように指摘されている。

陽明文庫の本文は、青表紙本、河内本の本文をどのように操作しても出て来る可能性はない。単なる誤写や異文ではない。文章の書き手、物語の語り手としての視点の構え方の違いがあるように感じられる。(「源氏物語

一 翻刻・解説」思文閣出版105頁)

この伝本を書写した代々の人は、底本の文章を精確に書写することを考えてはいないものようである。青表紙本・河内本以後の人々が、この作品や底本に対して尊重乃至は敬慕の気持をもって精確に書写する場合は違って、気楽な態度で書写しているように思われる(同110頁)

青表紙本と陽明文庫本とをとりあわせると、河内本の大部分(具体例の( )内省略―筆者注)が出てくるということがある。となると、河内本が作られる際に空蟬に関しては、この陽明文庫本の如き本文が使われた可能性があるかもしれない。角度を変えていえば、陽明文庫本は、青表紙本・河内本以前の本文と考える可能性

があるかもしれない。ただし、これをいうには、全体を検討してみることが必要だろう（同 112頁）

本文は、青表紙本・河内本のいずれとも違い、三本は相互に等距離ぐらいある。別本とすべきであろう（同 113頁）

桐壺から夕顔の巻に至る四貼の解説の問題点を摘記してきたが、118頁から119頁にかけて三項目にそれらの問題点を要約されている。重複する部分もあるが、四帖についての阿部博士の想定された結論は次のごとくである。

一、陽明文庫本の書写者は、青表紙本・河内本成立以後、これらの系統をひく人々が「源氏物語」を書写する時のように、研究乃至は家の学問という意識をもって書写しているのではないようである。端的にいえば、一字一句を精確に書写して「証本」を作することを考えていたのではなく、物語本を書写するという自由で気楽な立場にいる人の書写ではないかと思われる。

二、例示して来たように、意味・論理・場面の状況、人物関係等に影響する異文がかなり多数ある（例示したもの以外にもある）が、これらはただ一回の書写の際に生じたものではあるまいと思われる。つまり、この陽明文庫本書写の際に生じたものもあるだろうが、それ以前の何回かの書写の際に生じたものの累積がこの伝本の姿であるのだろう。代々の書写者が、かなり自由に、気軽な態度で自分のための物語本を作っていたことを想定していいのではないか。

三、例示の註でもふれておいたことだが、陽明文庫本の本文は、青表紙本・河内本の本文をどのようにとりあわせても出て来ないものである。両本の混淆から生じた別本ではない。逆に、部分的には、河内本は、この陽明文庫本、あるいはそれに近似した本文をみていたのではないかと思われるところがあつた。とすると、陽明文庫本の本文は、河内本成立以後の本文ではないように思われる（同 119頁）

阿部博士の想定は、部分的な調査にもとづかれたもので、「ないようである」「ないように思われる」とのご発言で、論をかみ合わせていくのも、如何かと思われもするし、多くの示唆にとむお説ではあるが、従い難い想定であると言わざるを得ない。異文の系統的近親度は、夕顔の巻のなかでもその部分によってかなりの相違がある。どの部分をとるかによって、その結論はかなり恣意的なものとなるのである。いま、便宜的に手沢本の頁数によってそのことを明らかにしよう。頭書きの算用数字はその頁数で、第一類から第四類までの分類は、一二七頁にかかげた分類による。各類の上段Aは異文の数、下段Bは系統別に異文を百分率であらわしたものである。最下段B'は第三、四類のBを合計したものである。また、各B'の上段は別本、下段は河内本の異文を百分率で表わしたものである。欄外上段の小見出しは小学館日本古典全集の小見出しの引用である。

源氏、乳母を見舞い女から扇を送らる					頁	
⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	A	第一類
8	7	7	5	5		B
72.7	87.5	77.8	50.5	71.4		
8	8	3	2	4	A	第二類
72.7	88.9	60.0	28.6	66.7		B
3	1	2	3	2	A	第三類
27.3	12.5	22.2	30.0	28.6		B
27.3	11.1	40.0	42.8	33.3		
0	0	0	2	0	A	第四類
0	0	0	20.2	0		B
0	0	0	28.6	0		
27.3	12.5	22.2	50.0	28.6		B'
27.3	11.1	40.0	71.4	33.3		

源氏心から老病の乳母を見舞い慰める

源氏歌に興をおぼえ返歌を贈る

源氏六條邸を訪れ夕顔の家を意識する

源氏惟光の報告で関心を強める

源氏、伊予介の訪れにより空蟬を思う

⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳
9	1	7	5	8	7	8	9	5	5	6
100	846	58.3	45.5	40.0	30.4	47.1	40.9	29.4	71.4	46.2
4	5	14	6	5	5	6	6	3	3	3
100	71.4	73.7	50.0	29.4	23.8	40.0	31.6	20.0	60.0	30.0
0	1	5	5	9	15	9	11	10	2	5
0	7.7	41.7	45.5	50.5	65.2	50.5	50.0	58.8	28.6	38.4
0	14.3	26.3	41.7	52.9	71.4	56.3	57.9	66.7	40.0	50.5
0	1	0	1	3	1	1	2	2	0	2
0	7.7	0	9.0	15.0	4.4	5.6	9.1	11.8	0	15.4
0	14.3	0	8.3	17.7	4.8	6.3	10.5	13.3	0	20.0
0	15.4	41.7	54.5	60.0	69.6	55.6	59.1	70.6	28.6	53.8
0	28.6	26.3	50.0	70.6	76.2	62.6	68.4	80.0	40.0	70.0

秋、源氏六条の御方を訪れる

惟光、夕顔の家を偵察源氏を手引きする

源氏、名も知れぬ夕顔の女に耽溺する

③①	③②	③③	③④	③⑤	③⑥	③⑦	③⑧	③⑨	③⑩	③⑪
7	7	6	7	11	8	10	10	6	5	7
46.7	53.9	37.5	43.8	64.6	44.4	66.7	62.5	85.7	62.5	46.7
5	10	3	3	7	7	7	7	2	6	4
38.5	62.5	23.1	25.0	54.0	41.2	58.4	53.9	66.7	66.7	33.3
8	2	6	5	3	8	4	4	1	3	6
53.3	15.4	37.5	31.2	17.7	44.4	26.6	25.0	14.3	37.5	40.0
61.5	12.5	46.2	41.7	23.0	47.0	33.3	30.8	33.3	33.3	50.0
0	4	4	4	3	2	1	2	0	0	2
0	30.7	25.0	25.0	17.7	11.2	6.7	12.5	0	0	13.3
0	25.0	30.7	33.3	23.0	11.8	8.3	15.4	0	0	16.7
53.3	46.1	62.5	56.2	35.4	56.6	35.3	37.5	14.3	37.5	53.3
61.5	37.5	76.9	75.0	46.0	58.8	41.6	46.2	33.3	33.3	66.7

源氏、  
中秋の夜夕顔の家に宿る

源氏、  
夕顔の女を廃院に伴う

④②	④①	④⑩	③⑨	③⑧	③⑦	③⑥	③⑤	③④	③③	③②
11	10	5	3	5	8	10	5	9	9	9
78.6	66.7	71.4	37.5	45.5	57.1	55.6	33.3	47.4	52.9	75.0
6	8	5	8	3	5	8	7	7	8	5
66.7	61.5	71.4	61.5	33.3	45.5	50.0	41.2	41.2	50.0	62.5
2	3	2	3	6	5	4	9	9	6	2
14.3	20.0	28.6	37.5	54.5	35.7	22.2	60.0	47.4	35.3	16.7
22.2	23.1	28.6	23.1	66.7	45.5	25.0	52.9	52.9	37.5	25.0
1	2	0	2	0	1	4	1	1	2	1
7.1	13.3	0	25.0	0	7.2	22.2	6.7	5.2	11.8	8.3
11.1	15.4	0	15.4	0	9.0	25.0	5.9	5.9	12.5	12.5
21.4	33.3	28.6	62.5	54.5	42.9	44.4	66.7	52.6	47.1	25.0
33.3	38.5	28.6	38.5	66.7	54.5	50.0	58.8	58.8	50.0	37.5

物の怪、夕顔の女を取り殺す

⑤③	⑤②	⑤①	⑤④	④⑨	④⑧	④⑦	④⑥	④⑤	④④	④③
5	6	7	8	8	9	9	10	8	11	3
23.8	50.0	38.9	53.3	53.3	69.2	69.2	62.5	50.0	55.0	30.0
11	4	8	13	5	14	6	8	12	7	3
40.8	40.0	42.1	65.0	41.7	77.8	60.0	57.1	60.0	43.8	30.0
12	5	8	5	5	3	3	4	7	7	6
57.1	41.7	44.4	33.3	33.3	23.1	23.1	25.0	43.8	35.0	60.0
44.4	50.0	42.1	25.0	41.7	16.7	30.0	28.6	35.0	43.8	60.0
4	1	3	2	2	1	1	2	1	2	1
19.1	8.3	16.7	13.4	13.4	7.7	7.7	12.5	6.2	10.0	10.0
14.8	10.0	15.8	10.0	16.6	5.6	10.0	14.3	5.0	12.5	10.0
76.2	50.0	61.1	46.7	46.7	30.8	30.8	37.5	50.0	45.0	70.0
59.2	60.0	57.9	35.0	58.3	22.3	40.0	42.9	40.0	56.3	70.0



惟光参上して、夕顔の遺骸を東山に送る

源氏、二条院に帰る。人々あやしむ

⑥4	⑥3	⑥2	⑥1	⑥0	⑤9	⑤8	⑤7	⑤6	⑤5	⑤4
12	6	3	5	4	13	6	9	13	6	5
57.2	30.0	18.8	25.0	28.6	76.5	40.0	50.0	72.2	46.2	41.7
8	2	1	0	5	7	6	10	6	10	6
47.1	12.5	7.1	0	33.3	63.6	40.0	52.6	54.5	58.8	46.2
7	12	10	10	9	3	9	4	3	5	4
33.3	60.0	62.5	50.0	64.3	17.4	60.0	22.2	16.7	38.4	33.3
41.2	75.0	71.4	66.7	60.0	27.3	60.0	21.1	27.3	29.4	30.8
2	2	3	5	1	1	0	5	2	2	3
9.5	10.0	18.7	25.0	7.1	5.9	0	27.8	11.1	15.4	25.0
11.7	12.5	21.5	33.3	6.7	9.1	0	26.3	18.2	11.8	23.0
42.8	70.0	81.2	75.0	71.4	23.5	60.0	50.0	27.8	53.8	58.3
52.9	87.5	92.9	100	66.7	36.4	60.0	47.4	45.5	41.2	53.8

源氏、病癒え右近に夕顔の素姓を聞く

源氏、東山より帰邸後、重くわづらう

⑦5	⑦4	⑦3	⑦2	⑦1	⑦0	⑥9	⑥8	⑥7	⑥6	⑥5
3	3	4	2	4	11	5	6	5	7	7
18.8	30.0	23.5	11.8	26.7	57.9	41.7	35.3	23.8	41.2	36.8
0	2	4	3	2	4	4	2	2	2	6
0	22.2	23.5	16.7	15.4	33.3	36.4	15.4	11.1	16.7	33.3
8	7	11	10	7	4	7	9	11	9	11
50.0	70.0	64.7	58.8	46.6	21.1	58.3	52.9	52.4	52.9	57.9
61.5	77.8	64.7	55.6	53.8	33.3	63.6	69.2	61.1	75.0	61.1
5	0	2	5	4	4	0	2	5	1	1
31.2	0	11.8	29.4	26.7	21.1	0	11.8	23.8	5.9	5.3
38.5	0	11.8	27.7	30.8	33.3	0	15.4	27.8	8.3	5.6
81.2	70.0	76.5	88.2	73.3	42.2	58.3	64.7	76.2	58.8	63.2
100	77.8	76.5	83.3	84.6	66.6	63.6	84.6	58.9	83.3	66.7

源氏、夕顔の四十九の法要を行なう

源氏、空蟬や軒端萩と歌を贈答する

⑧⑥	⑧⑤	⑧④	⑧③	⑧②	⑧①	⑧①	⑧①	⑧①	⑧①	⑧①
6	11	6	5	10	4	3	8	3	8	5
35.3	73.3	40.0	62.5	71.4	26.7	25.0	53.3	23.1	38.1	38.5
1	3	2	4	3	2	5	2	1	5	1
8.3	42.9	18.2	57.1	42.9	15.4	35.7	22.2	9.1	27.8	11.1
11	3	7	3	4	7	5	6	9	11	7
64.7	20.0	46.7	37.5	28.6	46.6	41.7	40.0	69.2	52.4	53.8
91.7	42.9	63.6	42.9	57.1	53.8	35.7	66.7	81.8	61.1	77.8
0	1	2	0	0	4	4	1	1	2	1
0	6.7	13.3	0	0	26.7	33.3	6.7	7.7	9.5	7.7
0	14.3	18.2	0	0	30.8	28.6	11.1	9.1	11.1	11.1
64.7	26.7	60.0	37.5	28.6	73.3	75.0	46.7	76.9	61.9	61.5
91.7	57.2	81.8	42.9	57.1	84.6	64.3	77.8	90.9	72.2	88.9

その後の事——源氏、夕顔の夢を見る  
空蟬伊予国に下向し、源氏、錢別を贈る

⑨2	⑨1	⑨0	⑧9	⑧8	⑧7
0	2	4	7	3	3
0	25.0	40.0	35.0	18.8	37.5
1	1	3	2	2	4
50.0	14.3	33.3	13.3	13.3	44.4
0	4	5	11	10	4
0	50.0	50.0	55.0	62.5	50.0
0	57.1	55.6	73.3	66.7	44.4
1	2	1	2	3	1
50.0	25.0	10.0	10.0	18.8	12.5
100	28.6	11.1	13.3	20.0	11.1
50.0	75.0	60.0	65.0	81.3	62.5
100	85.7	66.7	86.6	86.7	55.5

これによれば、別本、河内本の独自異文はともに、一〇〇%から〇%、共通異文とほぼ共通する異文を合計したものは、別本では八八・二%から〇%、河内本では一〇〇%から〇%の間に分布していることがわかる。これだけの差異が存在する本文を、その一部分を抜き出して、全体を想定する資料として用いることは無謀であり、その結論は、きわめて恣意的なものであるという謗をまぬがれない。一般に思文閣出版陽明叢書の翻刻・解説者は、第一巻の、こうした安易とも思われる推論を継承していく傾向が見られるようであるのは、いかがなものであろうか。本文全体に対する文献学的な追求、分析を通して、その系統論的な問題、意味を明らかにしていく必要があるのではないか。第三類及び四類の共通異文の合計が、同一系統の異文に対してどのような比率になっているかを手沢本の頁ごとの百分率で表わしたものの分布は次のようになる。各%の欄は、「以下」の指定がある

もの他はすべてその数値の台内であることを示す。

河内本	陽明家本	10% 以下
1	1	10%
1	3	20%
5	11	30%
10	9	40%
12	11	50%
17	19	60%
13	16	70%
11	14	80%
10	4	90%
5		100%
3		

これによれば、部分的統計が、全体の本文形態を表わすものでないことはさらに明確である。

次に独自異文と共通異文の分布が、夕顔一帖のなかで、どのような位相を示しているかを検討することにする。

(一) ①頁～⑩頁

河内本、別本の独自異文が多く、共通異文の少ない部分。これは、「源氏、乳母を見舞い、女から扇を送らる」から「源氏、歌に興をおぼえ、返歌を贈る」とある終章部とほぼ一致している。「いかに聞こえむ」など、言ひしろふべかめれどめざましと思ひて」とあるが、別本、河内本ともに「言ひしろふべかめり」とあり、それ以後の本文は、共通異文が顕著にあらわれてくる。別本ではほぼ第七丁の表の終り、河内本ではほぼ六丁の表の終りの部分に相当する。

(二) ⑭頁～⑱頁

河内本、別本の共通異文が顕著に増加し、両本の独自異文の百分率が低くなる部分。これは、「源氏、六條邸を訪れ、夕顔の家を意識する」から「源氏、惟光の報告で関心を強める」を経て「源氏伊予介の訪れにより空蟬を思

う」の最初の部分である。別本では九丁の裏、河内本では八丁の表のそれぞれほぼ終りの部分に相当する。

(三) ①頁～③頁

河内本、別本の共通異文がほぼ30%から60%の間に集中していて異本間の特性が比較的少ない部分。「源氏、伊予介の訪れにより空蟬を思う」の後半部から「源氏、二条院に帰る、人々あやしむ」のはじめの部分である。別本では四十丁裏の終り、河内本では三十一丁裏の中程の部分に相当する。

(四) ④頁～⑧頁

河内本、別本の共通異文が増加し、特に河内本の共通異文の百分率が高くなり、両系の独自異文の百分率が低くなる部分。「源氏、二条院に帰る、人々あやしむ」から「源氏、病癒え右近に夕顔の素性を聞く」の終りの部分である。別本では、五六丁裏のほぼ終り、河内本では四四丁表の中程の部分に相当する。

(五) ⑨頁～⑫頁

⑨頁のような例外的なものもあるが、別本、河内本の独自異文の百分率が高く、両系の共通異文の百分率が低い部分。「源氏、空蟬や軒端萩と歌を贈答する」物語の大部分で、別本では五九丁表の終りの部分、河内本では四六丁の中程の部分に相当する。

(六) ⑬頁～⑮頁

別本、河内本の独自異文の百分率が低く、両系の共通異文の百分率が高くなり、特に河内本の共通異文の百分率が高い。「源氏、夕顔の四十九の法要を行なう」前後から「空蟬、伊予国に下向し、源氏、餞別を送る」の最後までである。

別本、河内本の独自異文、共通異文の分布の位相は、統計的には以上の六群に分類することができるが、一般的

には、冒頭の部分に独自異文が多く、末尾の部分には共通異文が多い。そして、中間で大部分をしめる部分は、その重なるの部分と見ることが出来る。異文には、無意識に、書写に当った者の不注意によって生じたもののほか、既にそのような形で伝来してきた写本の本文をそのまま書写したために生じたものや、意識的にその本文を変えようとしたために生じたものなどが存在するはずである。こうして、その写本の書写担当者や校訂者の趣向や時代の好み、さらにはそれを流伝して来た人々の考え方や時代の風潮など、複雑な要素をからませながら、物語の本質的な理解にかかわる問題にもつながっていく異文も存在する。これらの検討を通して、源氏物語の本文と享受のありようを明らかにすることが出来るし、本文の系統的なかわりあいを、具体的に知ることが出来る。

秋山虔・池田利夫氏（「尾州家河内本 源氏物語 第五卷」 武蔵野書院）は、解題のなかで、

河内本が総じて別本に近いことは知られているが、別本それぞれの性格の調査や整理が行き届いていない現状の状況では、それらが両系統といかなる関連を有するかの分析も、今後に残された課題と言えよう。（235頁）

と指摘されている。夕顔の巻では、陽明文庫本と河内本とが共通する異文は五二六例、ほぼ共通する異文は一五一例に達し、それぞれの系統の異文教に対する共通異文教の百分率は、陽明文庫本では五三・五％、河内本では六〇・五％に達する。このことは、両系の本文が一つの祖形から生じたことを示すもので、いずれかが一方のいずれかに影響を与えた校合の一本であったというような関係ではなかったことを示している。青表紙本、河内本、別本の位置が相互に等距離に存在すると考える阿部氏らの考えは誤りである。

若紫の巻の陽明文庫本の本文について、阿部氏は、「かなり河内本に近いが、時に河内本とは違うところもあり、そこを重くみて別本と認めるべきなのである」（91頁）と、指摘されているが、従い難いお説である。陽明文庫本の若紫・橋姫・東屋・浮舟の四帖は、甲類表表紙をもっているが、その表紙が本来の表紙かどうか疑わしいとこ

るがあり、本文の系統にも問題がある。「大成」校異篇で、池田亀鑑博士が別本として校異に採択されなかったのは妥当であった。陽明文庫本は河内本に一部の誤写、混態を生じている本文と見るべきで、別本とはなし得ない。例によって青表紙本の手沢本に対する校異を、問題点を明確にできる部分まで追っていくことにする。頭書きの番号は、若紫の巻のはじめから異文の順序に従って便宜的につけたものである。

- ①、驗なく—驗もなく 河 ②、ある人—ある人の申すやう 河、ある人の申やう 陽 ③、北山になむ—北山なる 河 ④、所に—所になんいと 河、陽 ⑤、世に—世のなかに 河、陽 ⑥、あまた—おほく 河、陽 ⑦、つる時は—はへりぬるは 河、はへりぬ 陽 ⑧、うたて—あやにくに 河、陽 ⑨、聞こゆれば—聞えさせければ 河、聞えさせ給ければ 陽 ⑩、外にも—外にもえいてはへらぬよしもうさせ 河、陽 ⑪、ものせん—ものせ 陽 ⑫、睦ましき—睦ましき人 河、陽 ⑬、おはす—おはするに 河 おほするに 陽 ⑭、深く—深く 河、陽 ⑮、みな過ぎにけり—過ぎにたるを 河、陽 ⑯、ありき—御あるき 河、陽 ⑰、ならひ給はず—ならひ給はぬ 河、陽 ⑱、深き—こふかき 河、陽 ⑲、ぞ聖入り—ぞ聖は 河 聖は 陽 ⑳、しらせ—いは 河 ㉑、いたう—いたく 河 いたふ 陽 ㉒、御さまなれば—御ありさまいかか見たてまつりけん 河、陽 ㉓、めし侍り—めしたり 河、陽 ㉔、事を—事も 河、陽 ㉕、思ひたまへねば—思ひたまはねは 河、陽 ㉖、忘れて—忘れきて 河 ㉗、かう—かく 河 ナシ 陽 ㉘、おはしまし—おはし 河、陽 ㉙、大徳なりけり—大徳のさまなり 河、陽 ㉚、もの—ふん 河 ふむ 陽 ㉛、たてまつり—たてまつる 陽 ㉜、まゐるほと—まゐりてすこし 河、陽 ㉝、さしあがりぬすこし—なるほとに 河、陽 ㉞、僧房—の僧房 河、陽 ㉟、みおろさる—みおろさるゝ 河、陽 ㊱、小柴—小柴かき 河、陽 ㊲、うるはしう—うるはしく 河、陽 ㊳、屋—屋とも 河、



陽 ③、よしあるは——よしあるさましるきを 河、陽 ④、住むにか——住むならん 河、陽 ⑤、これ——  
かれ 河、陽 ⑥、かたに侍りける——ところなるときこゆ 河、陽 ⑦、住むなる——の住む 河、陽 ⑧、  
あやしう——あやしく 河、陽 ⑨、やつし——やつして 河、陽 ⑩、聞き——聞きつけ 河 ⑪、宣ふ——  
宣ふほとに 河、陽 ⑫、童——童あま 河、陽 ⑬、かしこに——かしこには 河、陽 ⑭、さやうは——さ  
やうに 河 ⑮、据え——すみ 陽 ⑯、人な——人にかあ 河、陽 ⑰、口々に——河 ⑱、女子ども——ナ  
シ河、陽 ⑲、童女なむみゆると——ともありけるなと 河

この資料からも明かなように、意識的、無意識的誤写により独自異文を構成していると思われるものは「語」に限られ、河内本では六例、陽明文庫本では四例程度に過ぎない。ただ、これらの異文は陽明文庫本の校訂者が河内本を見誤ったために生じたものとも、河内本の伝来過程や陽明文庫本の伝来過程のなかで生じた誤写であったとも考えられ、にわかには即断することはできない。だが、語句の形であらわれる重要異文はきわめてまれで、⑮の例に過ぎない。これによれば、陽明文庫本若紫の巻の本文は、青表紙との間に混態を生じていると見るべきである。

伊井春樹博士（『源氏物語注釈史の研究』桜楓社）は、

「源氏釈」で用いられた本文だけは、当然のことながら両系統本とは無関係な、院政期の別本を使用していた。こういった注釈書依拠本文の流伝史の中において、この逸文に別本の本文が一項目ではあるが引用されている。事實は、その性格や成立を推定する上においてとくに重要な意義を持つことになろう（98頁）

といわれる。「この逸文」とは、宮内庁書陵部蔵、貞成親王筆「源氏物語注釈」に抄出された古注逸文を指す。氏はそれを、執柄本奥書の著者藤原光長の注記によるもので、「源氏釈」と「奥入」の空白期を埋める本文資料であると指摘されている。「源氏釈」の本文に対する考えと、筆者の考え（『源氏物語とその周辺』25頁）とは、必ずしも

一致しないが、別本系統の本文を基幹とするものであるという点では共通する。陽明文庫本の基幹的な巻々は、ほぼ別本系統に属するものではあるが、夕顔の巻は、河内本の底本的な役割を果たした本文と原形を同じくするものであったと考えなければならない。そして、陽明文庫本若紫の巻は、河内本そのものを原本とするものであったと考えざるべきであり、それは、陽明文庫本の結集が数次に亘ってなされてきたことを示すものである。甲類表表紙が本来の本文につけられていたものかどうか、疑わしいところがあると指摘されている書誌学的問題は、やはり、その本文の性格、価値にかかわるものであったことが確認される。

桐壺、帚木、空蟬の三帖は、阿部秋生博士の調査に従えば、いずれも陽明家本の基幹部分をなす別本二十八帖に属する巻々で、数次に亘る諸本の集成の過程で最も古い原態をとどめている巻々である。墨流し文様の表紙に、本文の料紙は同じ楮紙を用い、筆者には、それぞれ後深草院、春日、後鳥羽院が当てられている。陽明叢書国書篇「源氏物語 一」の阿部博士の解説が委曲を尽されている。鎌倉時代以来、陽明文庫に秘蔵されるに至った伝来の過程は明らかではなく、「源氏筆者目六」の書かれた享保初年以後に近衛家に入ったとする推定に従うべきであろうか。博士は、

わずかに言いうるのは、上冷泉家の所有ではなかったようだといいことであり、それを拡げて、和歌、あるいは「源氏物語」を家の学問として扱っていた家に伝えられていたものではなかったようだといいことだけである。つまり「源氏物語」を学問の目ではなく、「物語」として見ていた人々の手による書写であり、所有であったのであると思われる。ただし、「古目錄」なるものの性質如何によっては、もうすこし別の考え方をしなければならぬかもしれない。（「繭刻・解説」98頁）

と指摘されているが、書誌的には同列に置かるべきこれら三帖の本文は如何なる性質を持つものであるうか。

青表紙本に対する別本系統の陽明家本、尾州家河内本の異文を四類に分類して集計すると、次のごとくである。

第一類 別本陽明家本の独自異文

第二類 尾州家河内本の独自異文

第三類 陽明家本と河内本とが共通する異文

第四類 陽明家本と河内本とがほぼ共通する異文

第四類	第三類	第二類	第一類	
54	167	141	414	桐壺卷
8.5	26.3	39.0	65.2	
14.9	46.1			
39	144	268	463	帚木卷
6.0	22.3	59.4	71.7	
8.7	31.9			
19	141	41	75	空蟬卷
8.1	60.0	20.4	31.9	
9.5	70.2			

各巻の上段の数字は異文例、下段は本文系統別の異文百分率で、第三、四類の異文百分率の上段は別本の、下段は河内本の百分率を表わしたものである。これらの統計をもとに、青表紙本、河内本、別本の本文系統の関係を系統的に考えると、次のようになる。

(一)、三帖の本文の性質にはかなり異質なものが存在し、夕顔の巻で指摘した本文の傾向ともあい入れないものがある。陽明家本、河内本の独自異文の百分率の最も高いのは帚木の巻で、陽明家本では独自異文が七一・七%、河内本では五九・四%に達する。最も低いのは空蟬の巻で、それぞれ三一・九%、二〇・四%に過ぎない。桐壺の巻は、陽明家本では六五・二%とかなり高いのに、河内本では三九・〇%と低く、この数値は夕顔の巻の三九・五%に近い。夕顔の巻では陽明家本のそれは四六・六%である。異文総数では、

河内本	陽明家本	桐壺
362	635	
451	646	帚木
201	235	空蟬

となり、夕顔の巻が陽明家本一二六例、河内本一一九例で、青表紙本に対する両系の関係が、相互にほぼ等距離に存在したのとは趣を異にする。桐壺の巻では青表紙と陽明家本とが大きく対立し、河内本は陽明家本の側にかなり近寄って存在する。帚木の巻では、青表紙本と陽明家との対立が更に大きくなり、河内本と陽明家本との距離も離れていく。空蟬の巻では、青表紙本に対する河内本、陽明家本の対立が少なくなり、しかも、河内本と陽明家本とは非常に接近している。

(二)、陽明家本と河内本とが共通する異文と、ほぼ共通する異文とを合計し、それぞれ本文系統別に異文を百分率で示すと次のようになる。

河内本	陽明家本	桐壺
61.0	34.8	
40.6	28.3	帚木
79.7	68.1	空蟬
60.5	53.4	夕顔

これによれば、帚木の巻にはかなり異質な要素を含むが、河内本は陽明家本に60%から80%近い近親性をもちながら、非青表紙本として、陽明家本、河内本が対立する性格をその一面に持つことが明らかになる。

しかし、異文の系統的近親度は、各巻のなかでも、その部分によってかなりの相違がある。従って、どの部分をとるかによって、その結論はかなり恣意的なものとならざるを得ない。いま便宜的に手沢本の頁数によって、そのことを明らかにしよう。頭書の算用数字はその頁数で、第一類から第四類までの分類は、先に述べた分類による。各類の上段Aは異文の数、下段Bは系統別に異文の占める割合を百分率であらわしたものである。最下段B'は、第三、四類のBを合計したもので、B、B'の上段は陽明家本、下段は河内本の異文の占める割合を百分率で表わしたものである。表上段の小見出しは、小学館日本古典文学全集からの引用である。

<p>桐壺更衣に帝の御おぼえまばゆし</p> <p>更衣に皇子誕生、方々の憎しみつゝのる</p> <p>若宮三歳になり袴着の儀を行なう</p> <p>更衣、帝に別れて退出、命果てる</p> <p>無心の若宮、更衣の里に退出する</p> <p>し 更衣の葬送、三位の追贈、人々の哀惜深</p>											頁	
⑭	⑬	⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤			
14	13	9	14	8	9	17	9	9	11	A	第一類	
77.8	76.5	50.0	87.5	66.7	52.9	94.4	75.0	90.0	91.7	B		
5	4	1	5	0	5	3	4	2	1	A	第二類	
55.6	50.0	10.0	71.4	0	38.5	75.0	57.1	66.7	50.0	B		
3	4	8	2	4	5	1	2	1	1	A	第三類	
16.7	23.5	44.4	12.5	33.3	29.4	5.6	16.7	10.0	8.3	B		
33.3	50.0	80.0	28.6	10.0	38.5	25.0	28.6	33.3	50.0			
1	0	1	0	0	3	0	1	0	0	A	第四類	
5.5	0	5.6	0	0	17.7	0	8.3	0	0	B		
11.1	0	10.0	0	0	23.0	0	14.3	0	0			
22.2	23.5	50.0	12.5	33.3	47.1	5.6	25.0	10.0	8.3	B'		
44.4	50.0	90.0	28.6	10.0	61.5	25.0	42.9	33.3	50.0			

帝、涙にしずみ、悲しみの秋来たる

勅使毅負命婦、母君を訪れ共に故人を偲ぶ

命婦帰参、さらに帝の哀傷深まる

⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕
7	8	7	13	11	10	7	8	13	9	13
58.3	66.7	87.5	72.2	64.7	58.8	63.6	57.1	92.9	64.2	65.0
2	2	2	4	3	2	0	1	2	2	3
28.6	33.3	66.7	44.4	33.3	22.2	0	14.3	66.7	28.6	30.0
3	3	1	4	5	5	4	5	1	3	6
25.0	25.0	12.5	22.2	29.4	29.4	36.4	35.7	7.1	21.4	30.0
42.9	50.0	33.3	44.4	55.6	55.6	100	71.4	33.3	42.3	60.0
2	1	0	1	1	2	0	1	0	2	1
16.7	8.3	0	5.6	5.9	11.8	0	7.1	0	14.3	5.0
28.6	16.7	0	11.1	11.1	22.2	0	14.3	0	28.6	10.0
41.7	33.3	12.5	27.8	35.3	41.2	36.4	42.8	7.1	35.7	35.0
71.5	66.7	33.3	55.5	66.7	77.8	100	85.7	33.3	71.4	70.0

源氏、亡母に似る藤壺の宮を慕う	先帝の四の宮（藤壺）入内さる	高麗人の観相、若宮源姓を賜わる	若宮の神才と美貌、内裏を庄する	若宮参内、祖母北の方の死去						
③⑥	③⑤	③④	③③	③②	③①	③⑦	②⑨	②⑧	②⑦	②⑥
12	15	9	6	9	14	10	20	8	6	7
60.0	57.7	52.9	40.0	56.2	58.3	71.4	95.2	57.1	40.0	87.5
7	5	6	4	4	5	5	5	2	2	4
46.7	31.3	42.9	30.8	36.4	33.3	55.6	83.3	25.0	18.2	80.0
5	7	5	5	6	9	3	1	3	7	1
25.0	26.9	29.4	33.3	37.5	37.5	21.4	4.8	21.4	46.7	12.5
33.3	43.8	35.7	38.4	54.5	60.0	33.3	1.7	37.5	63.6	20.0
3	4	3	4	1	1	1	0	3	2	0
15.0	15.4	17.6	26.7	6.3	4.2	7.1	0	21.4	13.3	0
20.0	25.0	21.4	30.8	9.1	6.7	11.1	0	37.5	18.2	0
40.0	42.3	47.0	60.0	43.8	41.7	28.5	4.8	42.8	60.0	12.5
53.3	68.8	57.1	69.2	63.6	66.7	44.4	1.7	75.0	81.8	20.0



源氏の元服の儀、左大臣家の婿となる

左右大臣家並び立つ藏人少将と四の君  
源氏一途に藤壺の宮を怨慕する

帝 木 卷

源氏のあやにくな本性 — 語り手の前口  
上  
五月雨の夜の宿直に、女の品定めはじま  
る

⑥	⑤	頁	
3	6	A	第一類
37.5	66.7	B	
2	0	A	第二類
28.6	0	B	
4	3	A	第三類
50.0	33.3	B	
57.1	0		
1	0	A	第四類
12.5	0	B	
14.3	0		
62.5	33.3	B'	
71.4	0		

④④	④③	④②	④①	④①	③⑨	③⑧	③⑦
6	11	8	8	7	11	12	16
54.5	52.4	47.1	66.7	43.8	73.3	54.5	66.7
2	5	3	4	1	7	9	8
28.6	33.3	25.0	50.0	10.0	63.6	47.4	50.0
4	8	7	3	7	4	7	4
36.4	38.1	41.2	25.0	43.8	26.7	31.8	16.7
57.1	53.3	58.3	37.5	70.0	36.4	36.8	25.0
1	2	2	1	2	0	3	4
9.1	9.5	11.8	8.3	12.5	0	13.6	16.7
14.3	13.3	16.7	12.5	20.0	0	15.8	25.0
45.5	47.6	53.0	33.3	56.3	26.7	45.4	33.4
71.4	66.6	75.0	50.0	90.0	36.4	52.4	50.0

左馬頭の弁 — 女の三階級について

左馬頭の弁 — 中流のおもしろさ

左馬頭の弁 — 理想の妻は少ないこと

⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰
5	8	3	9	4	2	6	7	5	4	4
833	889	100	90.0	80.0	50.0	75.0	87.5	55.6	100	100
3	6	2	6	3	4	11	5	2	8	4
75.0	85.7	100	85.7	75.0	66.7	84.6	83.3	33.3	100	100
1	1	0	0	1	1	2	0	3	0	0
16.7	11.1	0	0	15.0	25.0	25.0	0	33.3	0	0
25.0	14.3	0	0	25.0	16.7	15.4	0	50.0	0	0
0	0	0	1	0	1	0	1	1	0	0
0	0	0	10.0	0	25.0	0	12.5	11.1	0	0
0	0	0	14.3	0	16.7	0	16.7	16.7	0	0
16.7	11.1	0	10.0	15.0	50.0	25.0	12.5	44.4	0	0
25.0	14.3	0	14.3	25.0	33.4	15.4	16.7	66.7	0	0

左馬頭、夫婦間の寛容と知性を説く

左馬頭の弁——芸能のたとえごと

⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚
7	5	4	2	9	4	5	4	4	1	4
70.0	50.0	66.7	100	81.8	80.0	83.3	80.0	57.1	50.0	80.0
3	1	3	2	7	6	8	0	5	2	4
50.0	16.7	60.0	100	77.8	85.7	88.9	0	62.5	66.7	80.0
2	4	1	0	2	1	1	0	1	0	1
20.0	40.0	16.7	0	18.2	20.0	16.7	0	14.3	0	20.0
33.3	66.7	20.7	0	22.2	14.3	11.1	0	12.5	0	20.0
1	1	1	0	0	0	0	1	2	1	0
10.0	10.0	16.7	0	0	0	0	20.0	28.6	50.0	0
16.7	16.7	20.0	0	0	0	0	100	25.0	33.3	0
30.0	50.0	33.4	0	18.2	20.0	16.7	20.0	42.9	50.0	20.0
50.0	83.4	40.0	0	22.2	14.3	11.1	100	37.5	33.3	20.0

左馬頭の体験談  
— 浮気な女

左馬頭の体験談  
— 指咬いの女

⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚
8	6	8	7	5	4	6	3	11	7	5
80.0	54.5	66.7	77.8	45.5	80.0	100	75.0	91.7	87.5	50.0
4	4	3	4	7	2	2	3	3	3	7
66.7	44.4	42.9	66.7	53.8	66.7	100	75.0	75.0	75.0	58.3
2	3	4	1	6	1	0	0	1	1	3
20.0	27.3	33.3	11.1	54.5	20.0	0	0	8.3	12.5	30.0
33.3	33.3	57.1	16.7	46.2	33.3	0	0	25.0	25.0	25.0
0	2	0	1	0	0	0	1	0	0	2
0	18.2	0	11.1	0	0	0	25.0	0	0	20.0
0	22.2	0	16.7	0	0	0	25.0	0	0	16.7
20.0	45.5	33.3	22.2	54.5	20.0	0	25.0	8.3	12.5	50.0
33.3	55.5	57.1	33.4	46.2	33.3	0	25.0	25.0	25.0	41.7

頭中将の体験談 — 内気な女

式部丞の体験談 — 博士の娘

⑤①	④⑨	④⑧	④⑦	④⑥	④⑤	④④	④③	④②	④①	④①
6	9	7	8	5	2	5	4	5	2	7
54.5	81.8	58.3	88.9	71.4	100	83.3	100	55.6	100	87.5
6	1	3	3	3	1	4	5	2	3	2
54.5	33.3	37.5	75.0	60.0	100	80.0	100	33.3	100	66.7
5	1	4	1	1	0	1	0	4	0	1
45.5	9.1	33.3	11.1	14.3	0	16.7	0	44.4	0	12.5
45.5	33.3	50.0	25.0	20.0	0	20.0	0	61.7	0	33.3
0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0
0	9.1	8.3	0	14.3	0	0	0	0	0	0
0	33.3	12.5	0	20.0	0	0	0	0	0	0
45.5	18.2	41.6	11.1	28.6	0	16.7	0	44.4	0	12.5
45.5	66.6	62.5	25.0	40.0	0	20.0	0	66.7	0	33.3

左馬頭、女性論のまとめをする

品定めの翌日、源氏、左大臣邸へ退出

源氏、紀守邸へ方違えにおもむく

⑥1	⑥0	⑤9	⑤8	⑤7	⑤6	⑤5	⑤4	⑤3	⑤2	⑤1
6	7	6	4	4	5	7	5	5	6	7
66.7	63.6	85.7	40.0	57.1	83.3	100	45.5	55.6	75.0	87.5
3	3	3	1	5	3	3	2	1	2	3
50.0	42.9	75.0	14.3	62.5	75.0	100	25.0	20.0	50.0	75.0
2	4	1	6	2	1	0	4	4	1	1
22.2	36.4	14.3	60.0	28.6	16.7	0	36.4	44.4	12.5	12.5
33.3	57.1	25.0	85.7	25.0	25.0	0	50.0	80.0	25.0	25.0
1	0	0	0	1	0	0	2	0	1	0
11.1	0	0	0	14.3	0	0	18.1	0	12.5	0
16.7	0	0	0	12.5	0	0	25.0	0	25.0	0
33.3	36.4	14.3	60.0	42.9	16.7	0	54.5	44.4	25.0	12.5
50.0	57.1	25.0	85.7	37.5	25.0	0	75.0	80.0	50.0	25.0

翌日、方違えの夜、源氏空蟬と契る

⑦2	⑦1	⑦0	⑥9		⑥7	⑥6	⑥5	⑥4	⑥3	⑥2
3	6	11	7	8	7	4	7	12	8	7
50.0	100	73.3	70.0	88.9	77.8	66.7	70.0	85.7	88.9	63.6
3	0	4	2	0	7	2	3	4	1	2
50.0	0	50.0	40.0	0	77.8	50.0	50.0	66.7	50.0	33.3
2	0	3	3	1	0	2	3	2	1	4
33.3	0	20.0	30.0	11.1	0	33.3	30.0	14.3	11.1	36.4
33.3	0	37.5	60.0	100	0	50.0	50.0	33.3	50.0	66.7
1	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0
16.7	0	6.7	0	0	22.2	0	0	0	0	0
16.7	0	12.5	0	0	22.2	0	0	0	0	0
50.0	0	26.7	30.0	11.1	22.2	33.3	30.0	14.3	11.1	36.4
50.0	0	50.0	60.0	100	22.2	50.0	50.0	33.3	50.0	66.7

源氏、小君を召して文使いとする

源氏、再び紀伊守の邸を訪れる

㉘	㉙	㉚	㉛	㉜	㉝	㉞	㉟	㊱	㊲	㊳
7	6	5	4	1	5	6	8	4	2	8
70.0	75.0	62.5	50.0	25.0	83.8	75.0	66.7	44.4	28.6	100
3	2	3	6	4	1	5	3	2	1	2
50.0	50.0	50.0	60.0	57.1	50.0	71.4	42.9	28.6	16.7	100
2	2	2	3	2	1	2	3	5	4	0
20.0	25.0	25.0	37.5	50.0	16.7	25.0	25.0	55.6	57.1	0
33.3	50.0	33.3	30.0	28.6	50.0	28.6	42.9	71.4	66.7	0
1	0	1	1	1	0	0	1	0	1	0
10.0	0	12.5	12.5	25.0	0	0	8.3	0	14.3	0
16.7	0	16.7	10.0	14.3	0	0	14.3	0	16.7	0
30.0	25.0	37.5	50.0	75.0	16.7	25.0	33.3	55.6	71.4	0
50.0	50.0	50.0	40.0	42.9	50.0	28.6	57.2	71.4	83.4	0



空 蟬 卷

源氏、空蟬を断念せず、小君を責む						
源氏、空蟬と軒端萩の暮打つ姿をのぞく						
⑨3	⑨2	⑨1	⑨0	⑨0		
1	5	4	5	5	A	第一類
10.0	27.8	22.2	33.3	45.5	B	
1	1	1	4	2	A	第二類
10.0	7.1	6.7	28.6	25.0	B	
9	11	12	8	4	A	第三類
90.0	61.1	66.7	53.3	36.4		
90.0	78.6	80.0	57.1	50.0	B	
0	2	2	2	2	A	第四類
0	11.1	11.1	13.3	18.2		
0	14.3	13.3	14.3	25.0	B	
90.0	72.2	77.8	66.6	54.6	B'	
90.0	92.9	93.3	71.4	75.0		

⑧7	⑧6	⑧5	⑧4
1	7	3	9
50.0	77.8	60.0	100
1	1	1	4
50.0	33.3	33.3	100
0	1	1	0
0	11.1	20.0	0
0	33.3	33.3	0
1	1	1	0
50.0	11.1	20.0	0
50.0	33.3	33.3	0
50.0	22.2	40.0	0
50.0	66.6	66.6	0

源氏、老女に見咎められ危ない目をみる

⑩④	⑩③	⑩②	⑩①	⑩①	⑩①	⑩①	⑩①	⑩①	⑩①	⑩①
3	3	3	5	4	9	1	5	2	2	4
50.0	37.5	18.8	41.7	28.6	60.0	9.1	27.8	25.0	15.4	26.7
2	7	3	6	1	1	1	0	2	0	2
40.0	58.3	18.8	46.2	9.1	14.3	9.1	0	25.0	0	15.4
1	3	12	7	10	6	10	10	6	10	11
16.7	37.5	75.0	58.3	71.4	40.0	90.9	55.6	75.0	76.9	73.3
20.0	25.0	75.0	53.8	90.9	85.7	90.9	76.9	75.0	90.9	84.6
2	2	1	0	0	0	0	3	0	1	0
33.3	25.0	6.3	0	0	0	0	16.7	0	7.7	0
40.0	13.3	6.3	0	0	0	0	23.1	0	9.1	0
50.0	62.5	81.3	58.3	71.4	40.0	90.9	72.3	75.0	84.6	73.3
60.0	38.8	81.3	53.8	90.9	85.7	90.9	100	75.0	100	84.6

源氏、空蟬とともに歌に思いを託す

	100	107	106	105
1	2	4	7	
100	20.0	57.1	77.8	
2	0	4	1	
100	0	57.1	33.3	
0	7	3	1	
0	70.0	42.9	11.1	
0	87.5	42.9	33.3	
0	1	0	1	
0	10.0	0	11.1	
0	12.5	0	33.3	
0	80.0	42.9	22.2	
0	100	42.9	66.6	

これによれば、陽明文庫本、河内本の独自異文は、桐壺の巻では九五・二%から〇%、帚木の巻では一〇〇%から〇%、空蟬の巻では一〇〇%から〇%で、共通異文と、ほぼ共通する異文を合計したものでは、陽明文庫本では桐壺の巻六〇%から五・六%、帚木の巻七五%から〇%、空蟬の巻九〇・九%から〇%、河内本では桐壺の巻一〇〇から〇%、空蟬の巻一〇〇%から〇%の間に分布していることがわかる。これだけの大きな差異を有する本文から、その一部を抜き出して、全体を想定する資料として用いることは無謀であり、その結論はきわめて恣意的なものであるという謗をまぬがれない。第三、四類の共通異文の合計が、同一系統内の異文の数に対してどのような比率になっているかを、手沢本の頁ごとの百分率で表わしたものの分布は次のようになる。各%の欄は、「以下」の指定があるものの他は、すべてその数値の台内であることを示す。

河內本	陽明文庫本	空蟬卷	河內本	陽明文庫本	帚木卷	河內本	陽明文庫本	桐壺卷	
1	1		13	13		1	4		以9 下%
			6	19			4		10 %
	1		14	14		3	6		20 %
1			9	13		4	8		30 %
1	2		6	9		3	13		40 %
1	3		18	10		9	3		50 %
2	2		8	3		8	2		60 %
3	6		3	2		6			70 %
3	3		4			2			80 %
5	2					2			90 %
3			2			2			100 %

これによれば、部分的で恣意的な推計が、全体的な本文の形態や性格を表わすものでないことは明確である。こうした両系の本文の性格的な片寄りは、夕顔の巻では、物語群とのかかわりのなかでとらえることができた。このことは、源氏物語の本文と享受との関係を明らかにしていく上で、かなり重要な、示峻にとむ問題をなげかけている。だが、桐壺、帚木、空蟬の巻々においては、そうした片寄りを明確に指摘することは困難である。このように、陽明文庫本の基幹的な巻々においても、その本文的性格にはかなりのばらつきと異質なものの存在を指摘することができる。(未完)

付記——本稿執筆後、ゲラ刷りの段階で「文学」(岩波書店)昭59年1・2月号に吉岡曠氏の「河内本「桐壺」の巻の校訂過程」が発表された。示峻にとむ論稿で、非常に重大な問題に触れられている。しかし、更に検討を加うべき多くの問題をもっているように思われる。稿を改めて考えてみたい。同誌に連載されている阿部秋生博士の論には既に充分こたえていると考える。